岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 331 集

休場遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業徳岡地区関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

やすみば
休場遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業徳岡地区関連遺跡発掘調査

序

岩手県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、平成10年現在で10,278ヵ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。このように埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、圃場整備事業に関連して平成10年度に発掘調査を実施した休場遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。調査によって、岩手県南部においては調査例の少ない縄文時代早期から前期にかけての遺構・遺物が出土し、貴重な資料を提供することができました。この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助、ご協力を賜りました水沢地方振興局胆江土地改良事業所、胆沢町教育委員会をはじめとする多くの関係機関・関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成12年1月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　船　越　昭　治

例　　言

1．本報告書は、岩手県胆沢郡胆沢町小山字外浦70他に所在する休場遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．岩手県遺跡台帳の登録番号はＮＥ45－1144、遺跡略号はＹＢ－98である。

3．本遺跡の調査は圃場整備事業の実施に伴い記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と水沢地方振興局胆江土地改良事業所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

4．発掘調査期間、調査面積、担当者は、次の通りである。

　平成10年9月1日～11月6日　3,200㎡　中村直美・平めぐみ

5．整理期間と担当者は次の通りである。

　平成10年11月1日～平成11年3月31日　中村直美・平めぐみ

6．今回の調査で検出された遺構の種類および遺構数は次のとおりである。

竪穴住居跡	7棟	土坑	14基	陥し穴	11基
陥し穴状遺構	2基	焼土遺構	3基	溝	1条
柱穴状小ピット	10基				

7．出土遺物一部の接合・復元・鑑定・空中写真撮影は次の機関及び方々に依頼した。

　土器の接合・復元……株式会社京都科学

　石器の材質　……花崗岩研究会（代表　矢内桂三）

　火山灰の分析・鑑定…パリノ・サーヴェイ株式会社

　空中写真撮影　……東邦航空株式会社　株式会社ハイマーテック

8．調査区内の基準点測量・基準杭の設置は有限会社東北プランニングに委託した。

9．土層の観察は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1989）によった。

10．野外調査では胆沢町教育委員会・小山地区をはじめとする地元作業員の方々の協力をいただいた。

11．本報告書の作成にあたり、下記の方々に御指導を頂いた。（順不同・敬称略）

　村木　淳、藤田俊雄、宇部則保（八戸市教育委員会）、神原雄一郎（盛岡市教育委員会）

12．本書の執筆は、Ⅰ章を高橋與右衛門、Ⅱ～Ⅳ章を平めぐみ、Ⅴ章を中村直美・平めぐみが分担し、文末に氏名を記した。

13．本遺跡で出土した遺物及び調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

目次

本文目次

序
例言
目次
Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
1　遺跡の立地と地形 …… 2
2　基本層序 …… 2
3　周辺の遺跡 …… 3
Ⅲ　調査方法と整理方法 …… 9
1　調査方法 …… 9
2　整理方法 …… 9
Ⅳ　検出された遺構と遺物 …… 11
1　遺構と遺構内出土遺物 …… 11
(1) 竪穴住居跡 …… 11
(2) 土坑 …… 40
(3) 陥し穴 …… 48
(4) 陥し穴状遺構 …… 56
(5) 焼土遺構 …… 57
(6) 柱穴状小ピット …… 58
(7) 溝跡 …… 58
2　遺構外出土遺物 …… 61
(1) 土器 …… 61
(2) 石器 …… 61
Ⅴ　まとめと考察 …… 67
1　遺構 …… 67
(1) 竪穴住居跡 …… 67
(2) 土坑 …… 72
(3) 陥し穴 …… 72
(4) 焼土遺構 …… 73
2　遺物 …… 73
(1) 土器 …… 73
(2) 土製品 …… 74
(3) 石器 …… 75
Ⅵ　分析・鑑定 …… 77
(1) 休場遺跡の炭化材の年代測定 …… 77
(2) 休場遺跡の火山灰分析鑑定 …… 77
報告書抄録 …… 116

表目次

第1表　周辺の遺跡 …… 8
第2表　岩手県内における表裏縄文期の住居観察表 …… 69
第3表　竪穴住居における器種組成 …… 75

図版目次

第1図　基本層序 …… 2
第2図　岩手県図 …… 4
第3図　遺跡の周辺図 …… 5
第4図　胆沢扇状地を中心とした段丘区分 …… 6
第5図　周辺の遺跡分布図 …… 7
第6図　1号竪穴住居跡・出土遺物① …… 16
第7図　1号竪穴住居跡遺物出土状況・出土遺物② …… 17
第8図　1号竪穴住居跡出土遺物③ …… 18
第9図　1号竪穴住居跡出土遺物④ …… 19
第10図　1号竪穴住居跡出土遺物⑤ …… 20
第11図　2号竪穴住居跡①・② …… 21
第12図　2号竪穴住居跡柱穴断面図・出土遺物① …… 22
第13図　2号竪穴住居跡出土遺物② …… 23
第14図　3号竪穴住居跡①・② …… 24
第15図　3号竪穴住居跡出土遺物① …… 25
第16図　3号竪穴住居跡出土遺物② …… 26
第17図　3号竪穴住居跡出土遺物③ …… 27
第18図　3号竪穴住居跡出土遺物④ …… 28

第19図　3号竪穴住居跡出土遺物⑤ …… 29
第20図　4号竪穴住居跡 …… 30
第21図　5号竪穴住居跡……31・32
第22図　4・5号竪穴住居跡出土遺物①…… 33
第23図　5号竪穴住居跡出土遺物② …… 34
第24図　5号竪穴住居跡出土遺物③ …… 35
第25図　5号竪穴住居跡出土遺物④ …… 36
第26図　5号竪穴住居跡出土遺物⑤ …… 37
第27図　6号竪穴住居跡・出土遺物 …… 38
第28図　7号竪穴住居跡・出土遺物 …… 39
第29図　1～6号土坑…… 44
第30図　7～14号土坑 …… 45
第31図　1・3・5号土坑出土遺物 …… 46
第32図　7・11・13・14号土坑出土遺物 …… 47
第33図　1～3号陥し穴…… 52
第34図　4～7号陥し穴…… 53
第35図　8～11号陥し穴 …… 54
第36図　1～3号陥し穴出土遺物 …… 55
第37図　1・2号陥し穴状遺構…… 56
第38図　1～3号焼土遺構…… 57
第39図　柱穴状小ピット …… 58
第40図　遺構配置図 …… 59・60
第41図　遺構外出土遺物① …… 62
第42図　遺構外出土遺物② …… 63
第43図　遺構外出土遺物③ …… 64
第44図　遺構外出土遺物④ …… 65
第45図　遺構外出土遺物⑤ …… 66
第46図　岩手県における表裏縄文期の住居跡①　70
第47図　岩手県における表裏縄文期の住居跡②　71
第48図　陥し穴配列図 …… 72
第49図　県内近県における早期～前期の土偶土製品
…… 74
第50図　遺構外石器出土点数 …… 75

写真図版目次

カラー写真図版1　調査区遠景…… 83
カラー写真図版2　3号竪穴住居跡・尖底土器出土状況…… 84
カラー写真図版3　3号竪穴住居跡出土土器 …… 85
写真図版1　調査区遠景・基本土層…… 86
写真図版2　1号竪穴住居跡 …… 87
写真図版3　2号竪穴住居跡 …… 88
写真図版4　3号竪穴住居跡 …… 89
写真図版5　4号竪穴住居跡 …… 90
写真図版6　5号竪穴住居跡…… 91
写真図版7　6号竪穴住居跡 …… 92
写真図版8　7号竪穴住居跡 …… 93
写真図版9　1～5号土坑 …… 94
写真図版10　6～9号土坑 …… 95
写真図版11　10～14号土坑 …… 96
写真図版12　1～3号陥し穴
・1号陥し穴副穴検出状況…… 97
写真図版13　4～8号陥し穴 …… 98
写真図版14　9～11号陥し穴、
1～2号陥し穴状遺構 …… 99
写真図版15　1～3号焼土遺構・作業風景 …… 100
写真図版16　1号溝 …… 101
写真図版17　遺構内出土遺物①…… 102
写真図版18　遺構内出土遺物②…… 103
写真図版19　遺構内出土遺物③…… 104
写真図版20　遺構内出土遺物④…… 105
写真図版21　遺構内出土遺物⑤…… 106
写真図版22　遺構内出土遺物⑥…… 107
写真図版23　遺構内出土遺物⑦…… 108
写真図版24　遺構内出土遺物⑧…… 109
写真図版25　遺構内出土遺物⑨…… 110
写真図版26　遺構内出土遺物⑩…… 111
写真図版27　遺構内出土遺物⑪…… 112
写真図版28　遺構外出土遺物①…… 113
写真図版29　遺構外出土遺物②…… 114
写真図版30　遺構外出土遺物③…… 115

Ⅰ　調査に至る経過

休場遺跡は、「担い手育成基盤整備事業徳岡地区」の施行に伴って、その事業区域に位置することから発掘調査することとなったものである。

「担い手育成基盤整備事業徳岡地区」は、胆沢郡胆沢町小山地内の受益面積219.9haの地区で、水田は昭和38年ごろ10a区画に整備されたが、区画形状が小さく農道の幅員も狭い状況であった。

又小用水路は、土水路で漏水し用水不足を補うために、小排水路は用排兼用で浅く、排水不良となって湿田化しているなど、営農の機械化、耕地の汎用化、さらには農地の流動化、生活環境の向上など、高生産性農業を阻害していた。

これらの阻害要因を除去し、効率的で安定的な経営体に農地を集積し、高生産性農業の確立を図り、併せて農村環境水準の向上を資すために、大区画ほ場整備を実施するものとして、平成7年度新規採択された地区で、平成9年で3度目である。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、水沢地方振興局胆江土地改良事業所から平成7年6月5日付け胆土地第179号「県営ほ場整備事業実施に伴う遺跡分布調査について（依頼）」の文章によって岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼をしたのが最初である。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成7年7月17～18日に分布調査を実施したが、その結果は平成7年8月25日付け教文第478号「県営ほ場整備事業実施に伴う文化財の分布調査について（回答）」で水沢地方振興局胆江土地改良事業所へ回答、その際工事施工範囲内が休場遺跡の範囲内であることが付記された。

回答を受けた水沢地方振興局胆江土地改良事業所では、休場遺跡を含む面工事実施年度である平成9年10月28日付け胆土地第337号「担い手育成基盤整備事業徳岡地区に係る埋蔵文化財の発掘調査について（依頼）」の文章によって岩手県教育委員会に対して、試掘調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会では平成9年11月12～14日に試掘調査を実施したが、その結果は平成9年11月25日付け教文第704号「担い手育成基盤整備事業徳岡地区に係る埋蔵文化財の発掘調査について（回答）」で水沢地方振興局胆江土地改良事業所へ回答し、その際休場遺跡の発掘調査が必要である旨が付記された。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　遺跡の立地と地形

休場遺跡は岩手県胆沢郡胆沢町小山字外浦70他に所在し、ＪＲ東北本線前沢駅より北西に約5kmに位置する。胆沢町は奥羽山脈の中央部東側の山間部にあり、北は金ヶ崎町、東は水沢市、南は前沢町・衣川村、西が秋田県東成瀬村に接している。北西には焼石岳（1547m）が望まれ、西から南西にかけては笹森山(1085m)、桑原岳（1126m）、大薊山（1165m）などが南北に連なり、これらの山々の狭間を縫うように胆沢川が流れている。この川は胆沢扇状地南側を通り水沢市胆沢城跡の北東で北上川に注ぐ。また、石淵ダム下流約2kmで胆沢川から分流した岩堰川は胆沢扇状地を南西方向に流れＪＲ東北本線前沢駅の西側で北上川に注ぐ。現在岩堰川は前沢町に入ってからの名称で、胆沢町内では寿安上堰の名称が使用されている。

胆沢扇状地は胆沢川の侵食と堆積によって今から約80～50万年前につくられたとされる。この扇状地は胆沢川から衣川間に広がる北上川流域では最大のもので扇頂から扇端に傾斜すると共に、南部から北部にも傾斜し、階段状に多くの段丘面が段丘崖をはさんで配列している。これら段丘群は、南から高位（人首坂段丘）・中位（胆沢段丘）・低位（水沢段丘）に大別される。各段丘の中で、最も広範囲を占めるのは胆沢段丘である。胆沢段丘は高位から順に上野原・横道・堀切・福原の各段丘に細分され、人首坂段丘の残丘と思われる見分森・養ヶ森が存在する他は、段丘面群の交叉はほとんど見られない。福原段丘では黒沢尻火山灰がのり、その下半に村崎野浮石がみられる。また、上野原・横道・堀切の各段丘には、黒沢尻火山灰と、その下位に前沢火山灰がのる。

休場遺跡は胆沢扇状地の南部、岩堰川の河岸段丘上に立地している。回りは緩やかな傾斜が見られるがほぼ平坦な地形が続き、北側に岩堰川、南側に一の沢・二の沢・三の沢などを源流とする白鳥川に挟まれ、水源にも恵まれている。昭和38年まで水田の開墾が進み、それに伴い胆沢川より水路を増設し、その時の堰跡は調査区内にも見られる。現状は水田のほか畑地や宅地となっている。遺跡の標高は約120m、岩堰川との比高は約11m高く、白鳥川との比高は約29m低くなっている。

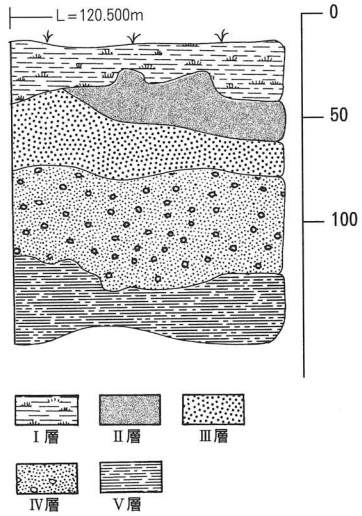
2　基本層序

調査区の大部分は地山のⅢ層まで削平され、遺構の上面が一部掘削されているものもある。調査区内では基本的に図1のような土層が観察される。以下、表土から順に層序を示す。

Ⅰ層　黄褐色土（10YR5/6）と暗褐色土（10YR3/4）の混合土。
層厚10～30cm。草木根・ビニールなどの農業廃棄物を多く含む。現在の表土および畑地の耕作土。掘削の跡が激しく部分的に地山がブロック状に入る箇所も見られる。

Ⅱ層　暗褐色土（10YR3/3）
層厚0～20cm。Ⅲ層に続く漸移層である。Ⅰ層と同様に掘削が激しく一部地山がブロック状に混入する。またこのⅡ層は部分的にみられない所もある。

Ⅲ層　褐色土（10YR4/6）
層厚20～35cm。しまり・粘性あり。地山、遺構検出面。



第1図　基本層序

Ⅳ層　褐色土（10YR4/4）

層厚 45～55cm。直径 1cm 程の黒色ブロック（マンガン）含む。しまりあり。

Ⅴ層　明黄褐色土（10YR6/8）

層厚 20cm 以上。直径 3～5cm の黒色ブロック（マンガン）含む。非常に固い。涌水著しい。

3　周辺の遺跡

岩手県教育委員会事務局文化課の遺跡登録台帳によれば、胆沢町の遺跡は 170 ヵ所確認されている。

第 5 図には胆沢扇状地の南部を中心として 82 ヵ所（№1～82）の遺跡を掲載した。遺跡の分布状況をみると胆沢扇状地中央部にかけては角塚古墳を中心に古代・近世の遺跡が密集している。該期の遺跡は古くから水田の開けたと伝えられる胆沢扇状地低部や、それに接する段丘崖北縁に多いようである。扇状地南端部には縄文時代の遺跡の分布が多く見られる。ここでは旧石器・縄文時代を中心に遺跡を概観する。

旧石器時代の遺跡として若柳の上萩森遺跡があげられる。ここではナイフ形石器や彫刻刀形石器等が出土している。

縄文時代早期前半の遺跡として、胆沢町西部、宮原段丘北縁の 19 山の神・20 十文字遺跡などが挙げられる。また、尼坂台地北縁には 18 芦の随・25 浅野・26 小十文字・28 尼坂・29 片子沢・30 糀谷田遺跡が分布している。十文字・芦の随遺跡からは槻ノ木 2 式相当の土器片、尼坂遺跡からは貝殻条痕文・縄文条痕文土器が出土している。

縄文時代前期初めとしては、25 浅野遺跡から胎土に多量の繊維を含み撚りのきつい縄文をもつ土器小破片が出土している。その他前期の遺跡として、白鳥川水系の 66 西風・78 二の沢遺跡から大木 1 式相当の土器片が出土し、44 小田切遺跡は大木 4～5 式相当の土器片が出土している。その他にも 29 片子沢・30 糀谷田・34 浅野前遺跡などが挙げられる。

縄文時代中期に入ると若柳の宮沢原Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｅ東遺跡が挙げられる。大木 7b～10 式期にわたっての集落であり、宮沢原Ｅ遺跡では複雑な構造を備えた複式炉をもつ住居跡が見られる。この他には、大木 8a 式期の有孔土器が出土した 40 北赤堰遺跡、小山地区の 56 油地・47 大畑・49 船戸・50 念仏塚遺跡等が挙げられる。

縄文時代後期になると分布は少なくなる。若柳地区西部の大清水上・赤剥遺跡などが上げられ、赤剥遺跡からは堀之内Ⅱ～安行Ⅰ式併行の土器が出土している。

縄文晩期の遺跡としては 37 濁川・38 合野（大洞Ｃ₂式）、若柳の大清水上（大洞Ｃ₁～Ａ）・萩袋（大洞Ａ）から晩期の土器片が出土している。

弥生時代の遺跡としては石包丁が出土した 6 清水下遺跡や 19 山の神・44 小田切遺跡等が上げられる。

その他、古代の土師器や須恵器が出土した遺跡として 54 遺跡、中・近世は 13 遺跡が登録されている。

胆沢町教育委員会では、上萩森遺跡・角塚古墳等を初めとする 18 遺跡の一部を発掘調査している。

＜引用・参考文献＞

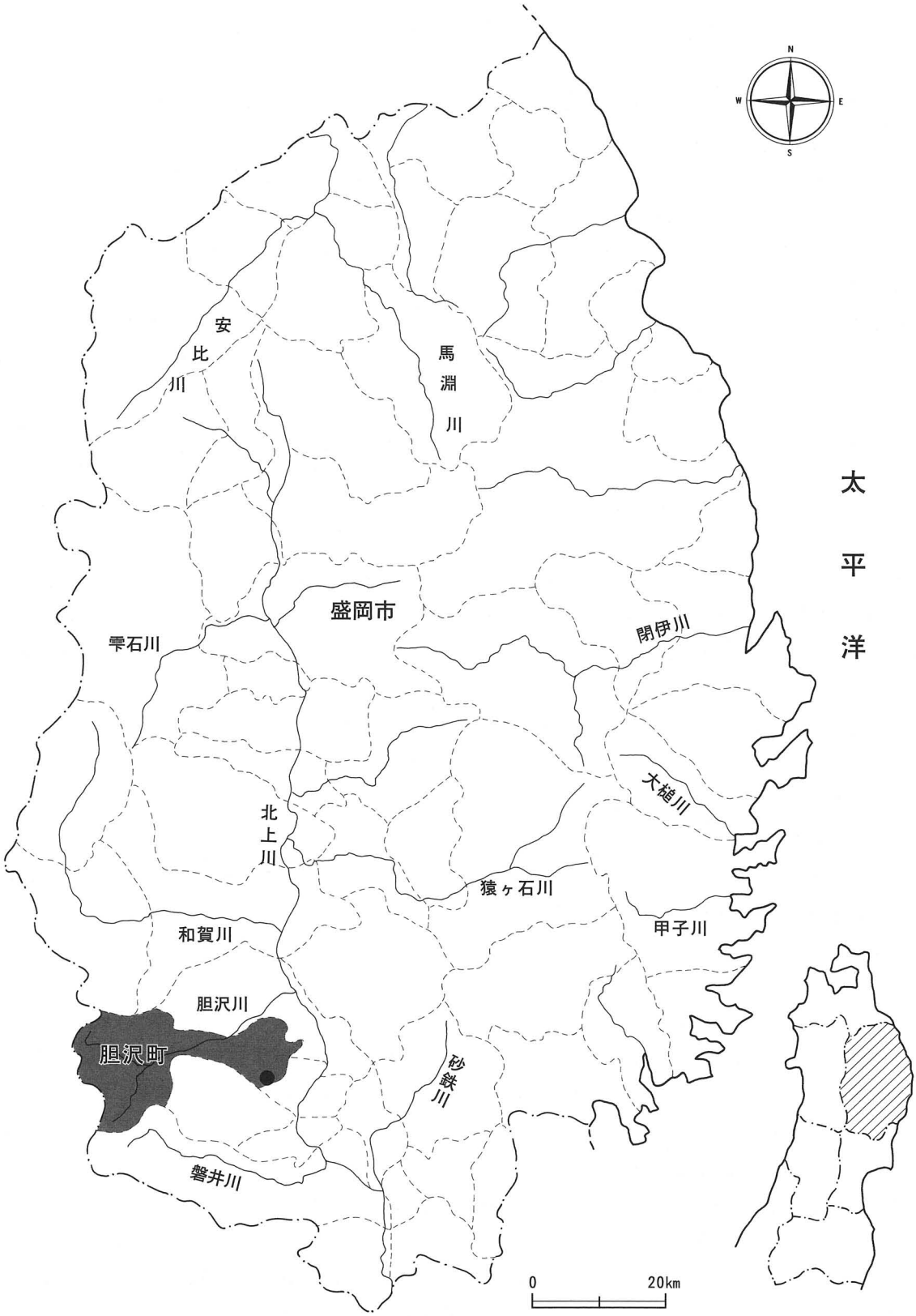
胆沢町　1971　『胆沢町史Ⅰ　原始古代編』

岩手県教育委員会　1995　『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』

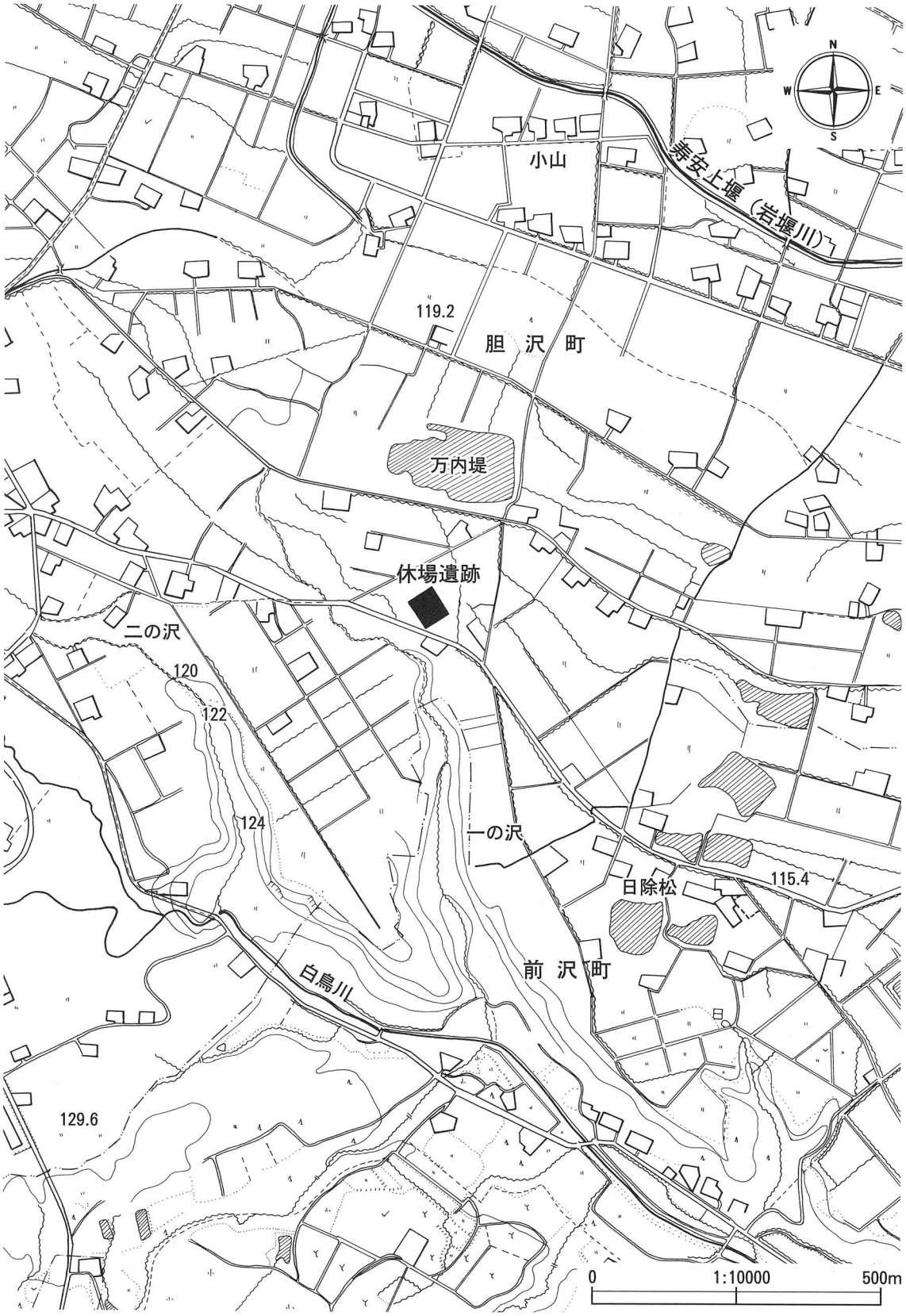
文化庁　1984　『全国遺跡地図　岩手県』

（財）岩手県埋蔵文化財センター　1996　『龍ヶ馬場遺跡発掘調査報告書　第243集』

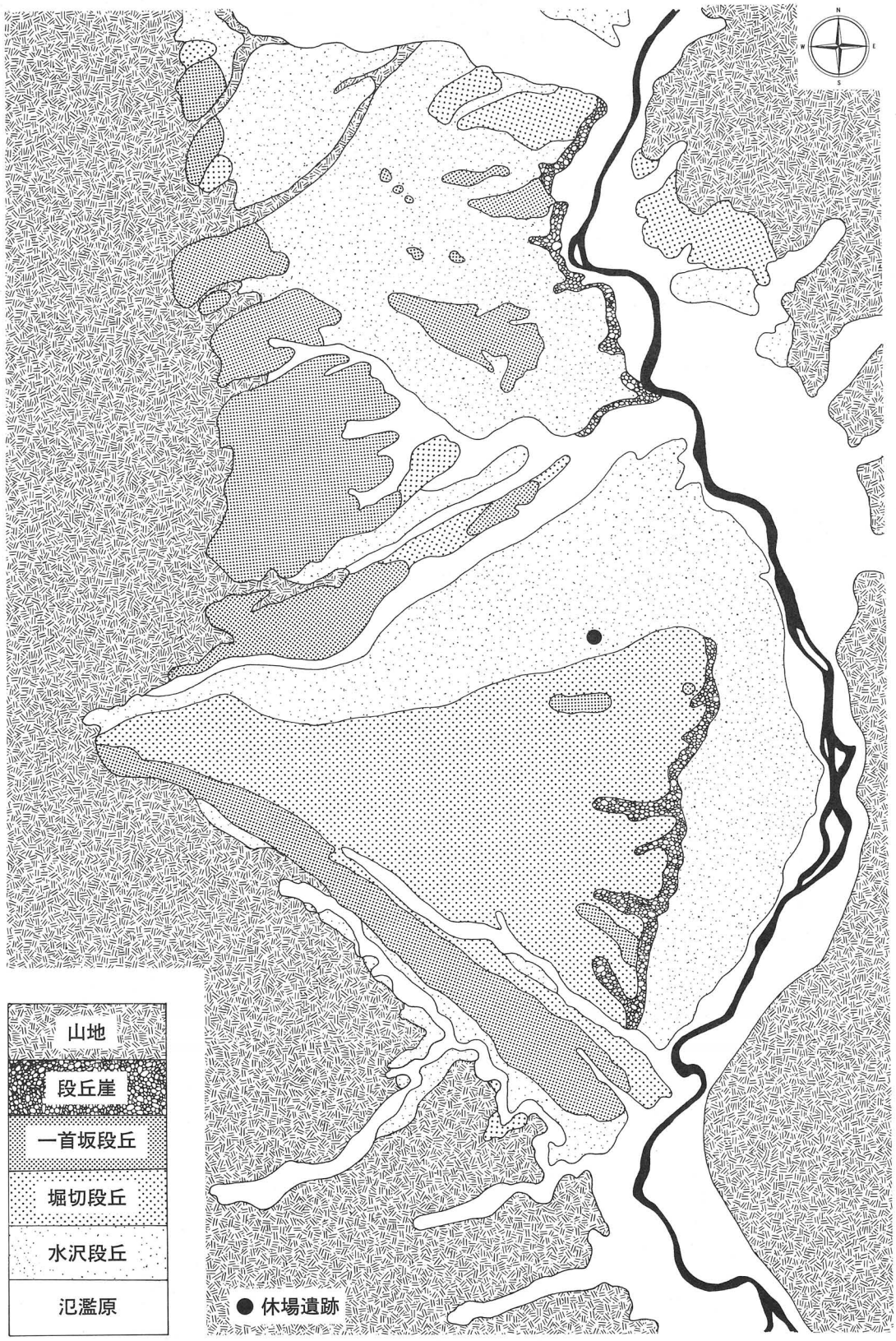
（財）岩手県埋蔵文化財センター　1997　『下尿前Ⅱ遺跡発掘調査報告書　第252集』


N
W
E
S
安
比
川
馬
淵
川
太
平
洋
盛岡市
雫石川
閉伊川
大槌川
北
上
川
猿ヶ石川
甲子川
和賀川
胆沢川
胆沢町
砂
鉄
川
磐井川
0
20km

第2図 岩 手 県 図


N
W
E
S
小山
寿安上堰（岩堰川）
119.2
胆沢町
万内堤
休場遺跡
二の沢
120
122
124
一の沢
日除松
115.4
前沢町
白鳥川
129.6
0
1:10000
500m

第３図　遺跡の周辺図



第４図　胆沢扇状地を中心とした段丘区分

第５図　周辺の遺跡分布図

第１表　周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	遺構、遺物	所在地
1	香取根館	城館跡	中世	土塁、堀	若柳字新里
2	堰田	散布地	平安	土師器	南都田字堰田
3	机地	散布地	奈良・平安	土師器	南都田字机地
4	中井	散布地	平安	須恵器	南都田字中井
5	新里館	城館跡	平安	土師器、須恵器、堀	若柳字島塚
6	清水下	散布地	弥生・平安	弥生土器、土師器	南都田字清水下
7	漆町	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	南都田字漆町
8	机地館	城館跡	中世	水堀	南都田字古城
9	銭倉	散布地	奈良・平安	土師器	南都田字銭倉
10	要害	散布地・城館跡	平安・近世	土師器、須恵器、土塁	南都田字本木
11	角塚古墳	古墳	古墳時代	埴輪	南都田字塚田
12	二本木	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	南都田字清水下
13	石田Ⅰ・Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	南都田字石田
14	沢田	散布地	奈良・平安	土師器	南都田字沢田
15	明神下	散布地	平安	土師器、須恵器	若柳字土橋
16	箸塚	散布地	縄文・古代	縄文土器、師器	若柳字箸塚
17	山田城	城館跡	中世	土塁、堀	若柳字明神下
18	芦の随	散布地	縄文・平安	縄文土器（前・中期）、石器、土師器	若柳字芦の森
19	山の神	散布地	縄文・古代	縄文土器（早・前期）、弥生土器、土師器、石斧	若柳字山の森
20	十文字	散布地	縄文・古代	縄文土器（早期）、土師器、石匙、石鏃	小山字十文字
21	作屋敷	祭祀跡	奈良・平安	土師合甕	南都田字作屋敷
22	牡丹野	散布地	奈良・縄文	縄文土器、土師器、須恵器	南都田字牡丹野
23	川端	散布地	平安	土師器	南都田字大道
24	広岡館	城館跡	中世	二重堀、土塁	南都田字広岡
25	浅野	散布地	縄文・古代	縄文土器（前・中期）、土師器、須恵器、土偶	南都田字浅野
26	小十文字	集落跡	縄文・古代	縄文土器（前期）、土師器	南都田字小十文字
27	国分	散布地	縄文・近世	縄文土器、石鏃、石斧	南都田字国分
28	尼坂	散布地・集落跡	縄文・古代	縄文土器（早・前期）、石器、土師器	南都田字尼坂
29	片子沢	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器、フレーク	南都田字片子沢
30	糀谷田	散布地	縄文	縄文土器（前期）	南都田字糀谷田
31	石行	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	南都田字石行
32	森下Ⅰ	散布地	奈良・平安	土師器	南都田字森下
33	南蛸の手	散布地	縄文	縄文土器	小山字蛸の手
34	浅野前	集落跡	縄文・古代	縄文土器（前・中期）、土師器、土師器	南都田字浅野
35	鶴田Ⅰ・Ⅱ	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器	南都田字鶴田
36	鶴田古墳群	古墳群	奈良		南都田字鶴田
37	濁川	集落跡	縄文・平安	縄文土器（前・晩期）、土師器、須恵器	南都田字濁川
38	合野	散布地	縄文	縄文土器（前・晩期）、石鏃	南都田字合野
39	中島	散布地	縄文・古代	縄文土器（前・中期）、石器	小山字大深沢
40	北赤堰	散布地	縄文・古代	縄文土器（中期）、土師器	小山字北赤堰
41	台Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、フレーク	小山字台
42	稔橋	散布地	縄文	縄文土器	小山字細入
43	台Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	小山字台
44	小田切	散布地	縄文	縄文土器（前期）、弥生土器、石斧	小山字小田切
45	上峠	散布地	縄文	縄文土器	小山字峠
46	小山方八丁館	城館跡	中世・近世	空濠、三郭	小山字方八丁
47	大畑	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）　石器	小山字前大畑
48	後大畑	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石器	小山字後大畑
49	船戸	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石斧、石鏃、石匙	小山字斎藤
50	念仏塚	散布地	縄文	縄文土器（中期）	小山字北赤堰
51	恩俗長根	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石鏃	小山字恩俗長根
52	明山	散布地	縄文	縄文土器、石器	小山字明山
53	上恩俗	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）	小山字上恩俗
54	上狼ヶ志田	散布地	縄文	フレーク	小山上狼ヶ志田
55	八幡堂	散布地	古代	土師器	小山字八幡堂
56	油地	散布地	縄文・古代	縄文土器（中期）、石斧、土師器	小山字西油地
57	中谷地	散布地	平安	土師器	小山字上中谷地
58	四ッ屋	散布地	平安	土師器	小山字下中谷地
59	壇山	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器	小山字斎藤
60	五反町	散布地	縄文	縄文土器	小山字二の台、五反町
61	二の台	散布地	縄文・奈良	縄文（中期）、石器、土師器	小山字二の台
62	細入	散布地	縄文・奈良	縄文土器、土師器	小山字細入
63	駒込三堤	散布地	縄文	フレーク	小山字駒込
64	鶴供養	散布地	縄文	縄文土器	小山字二の台
65	屋敷	散布地	縄文	フレーク、石器	小山字屋敷
66	西風	散布地	縄文	縄文土器（前期）、石鏃、石匙、石斧	小山字西風
67	二の台長根	散布地	縄文	石器	小山字屋敷、二の台長根
68	浪入	散布地	縄文	フレーク	小山字三の沢
69	主計谷地	散布地	縄文	縄文土器	小山字主計谷地
70	竹地子	散布地	縄文	縄文土器	小山字竹地子、駒込
71	駒込	散布地	縄文	縄文土器	小山字外浦
72	上鞍骨	散布地	古代	土師器	小山字上鞍骨
73	後鞍骨	散布地	縄文	縄文土器、石器	小山字後鞍骨
74	鞍骨	散布地	縄文	縄文土器	小山字鞍骨
75	田中	散布地	縄文	縄文土器（前期）、石篦	小山字田中
76	田中Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	小山字田中
77	佐布	散布地	縄文	縄文土器	小山字佐布
78	二の沢	散布地	縄文	縄文土器（早・前期）	小山字二の沢
79	二の沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文（フレーク）	小山字二の沢
80	外浦	散布地	縄文	縄文土器、石斧、石匙、磨石	小山字外浦
81	休場	散布地	縄文	縄文土器、石器	小山字外浦
82	二の沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文（フレーク）	小山字二の沢

Ⅲ　調査方法と整理方法

1　調査方法

グリッドの設定と遺構名

調査区域は南北約 90m、東西約 70m の平地にある。調査区内に南北方向 2 点の基準点を設定し、それを基にグリットを設定した。基準点 1・2 の成果値は以下のとおりである。

基準点 1　　X＝－103,485.000m　Y＝+21,200.000m　H＝　120.271m

基準点 2　　X＝－103,410.000m　Y＝+21,200.000m　H＝　121.060m

調査区内には上記の基準点のほか、補点を 5 ヵ所に設置している。

グリットは、起点を北西に置き 5×5mを 1 グリッドとした。南北方向は 00 から 17（算用数字）まで、東西方向はＡからＲ（アルファベット大文字）までを与え、その組み合わせによって（01Ａ区・12Ｂ区など）グリット名とした。

なお、基準点 1 は 17Ｉ区、基準点 2 は 7Ｉ区の各グリットにあたる。

粗掘と遺構検出・遺構の精査

調査は、まず雑物の除去後に文化課が実施した試掘結果の確認とトレンチのクリーニングを行った。その後、表土の厚さや遺構の有無、遺物の出土状況を確認する目的で調査区全体にトレンチを入れた。この結果、表土下・基本層序の第Ⅲ層上面が遺構の検出面であることが確認された。このため基本層序の第Ⅱ層下位までは重機を使用した。地点によりⅡ層がみられない所もあり重機の掘り下げは表土を指標に行い、この後人力によって遺構の有無を確認しながら第Ⅲ層まで掘り下げた。

検出された遺構は、住居跡は 4 分法、土坑・焼土は 2 分法を原則として精査を行ったが、必要に応じて他の方法も併用した。各遺構とも平面実測はグリット軸に合わせた 1mのメッシュを基本とした。遺構の平・断面図は 20 分の 1 の縮尺を基本とし、炉跡等は 10 分の 1 で実測した。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。

写真撮影

野外での写真撮影は、35mm 判 2 台（モノクローム・カラーリバーサル各 1 台）と 6×7cm 判モノクローム 1 台を使用した。また、メモ的にポラロイドカメラも使用した。調査終了直前には、セスナ機による空中写真撮影を行った。

2　整理方法

遺物の処理

遺物は、野外調査と並行して雨天時などに水洗まで行い、その後室内で注記・接合・復元の順に進めた。

土器類は報告書掲載用のものを選別後、登録作業・実測・拓本・写真撮影・トレースを行い、遺物図版を作成した。また、復元については 2 点を外部に委託した。石器類は器種毎に登録し、土器類と同様に進めた。

遺構図面・図版について

野外調査で得られた図面類は、標高等の確認、平面・断面図の点検をし、必要に応じて合成した。その後トレース・遺構図版作成の順に進めた。

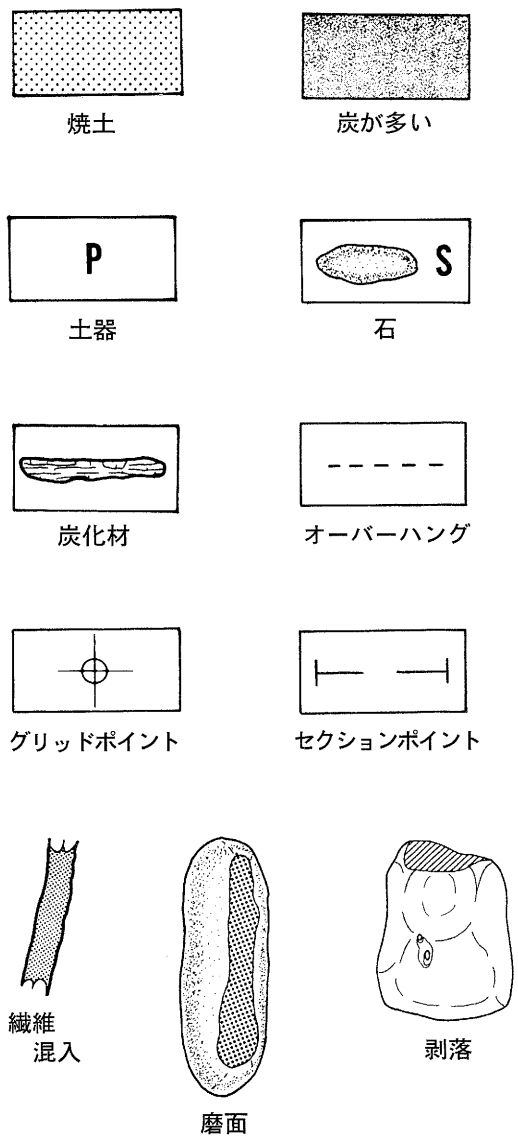
遺物の図版は遺構の種別毎に作成し、遺構外出土のものはまとめて掲載した。縮尺は、土器実測図は原寸および 2 分の 1 および 3 分の 1、拓本図は 2 分の 1 および 3 分の 1、剥片石器は 3 分の 2、礫石器は 3 分の 1、土製品は 2 分の 1 とした。また各図版内にはそれぞれスケールを付している。

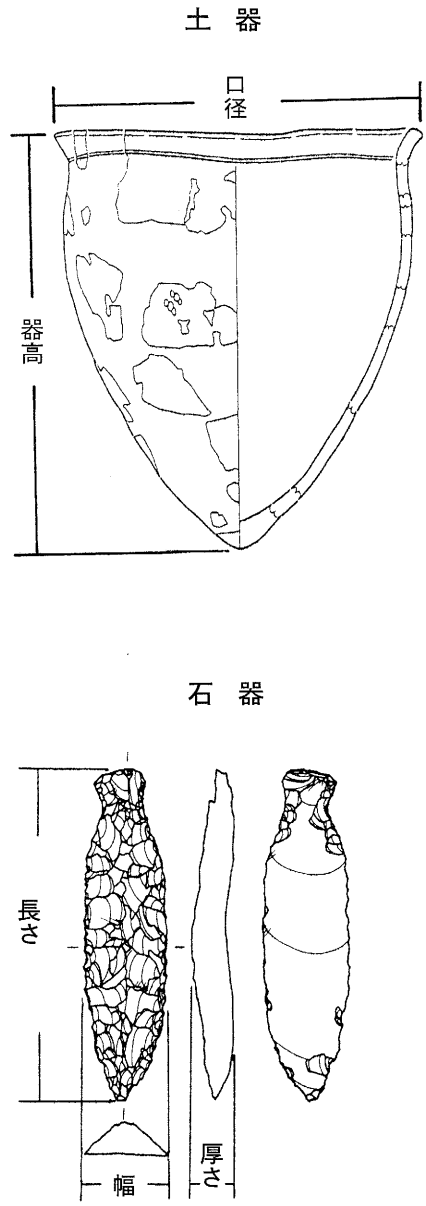
遺構図版は遺構の種類毎に掲載した。縮尺は住居跡・陥し穴・陥し穴状遺構が50分の1、土坑が40分の1、焼土が30分の1である。遺構・遺物の図版に使用したスクリーントーンについては凡例に示した。

遺物写真について

遺物写真図版の縮尺は、剥片石器3分の2、礫石器3分の1および6分の1、土器の立体が3分の1、土器破片2分の1および原寸、土製品は2分の1を原則とした。遺物写真図版の№は、遺物図版と同一の№とした。

＜凡　例＞





Ⅳ　検出された遺構と遺物

1　遺構と遺構内出土遺物

(1) 竪穴住居跡

縄文時代の竪穴住居跡が7棟検出された。時期は早期末葉のものと思われる。出土遺物数は各遺構ごとにばらつきはあるものの総じて僅少であり、土器は磨耗の著しい細片がほとんどであった。

各住居ともⅢ層上面で検出されている。Ⅰ・Ⅱ層からの削平跡がⅢ層にもみられ遺構の上部が剥ぎ取られたものもあると思われる。柱穴の配置については明確な特定に至らず、調査時に確認できたものを全て図面に掲載した。文章内で推定しているものは暗褐色～黒褐色土を含んだもので、柱穴の規模と配置に着目したものである。

1号竪穴住居跡

遺構（第6図、写真図版2）

＜位置＞　調査区南西部グリッド15Ⅰ区の南西側に位置する。

＜検出状況＞　Ⅲ層上面で暗褐色土の上面プランと、プラン北側にて84×90cmの範囲で広がる明赤褐色焼土により検出した。

＜規模・平面形＞　2.67×2.35mの不整円形を呈する。

＜埋土＞　上位に明赤褐色の焼土を薄く含む。埋土は暗褐色土の単層で炭化粒を含む。

＜壁・床＞　Ⅲ層を壁・床とし緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は4.3～11.0cmである。床面はほぼ平坦であるが、部分的に僅かな凹凸がある。北側で土器が集中して出土した地点の床は一部しまっている。

＜ピット＞　3基検出した。P1の埋土は褐色土・炭化粒を含む暗褐色土の単層で、配置・深さ・埋土からみて柱穴の可能性もある。P2の埋土は黒褐色土で多量の炭化物を含んでいる。P3は窪んだように浅く、平面形は楕円形を呈し、埋土は暗褐色土の単層である。また同様のものが2号住居から2基検出されている。

＜柱穴＞　柱穴状小ピットは3基検出し、深さは8.1～14.4cmである。2基は壁際に位置しているが、1基は遺構外に位置している。埋土はいずれも炭化物を含んだ黒褐色土である。柱穴はpp1－pp2－pp3で三角形の柱穴配置が想定される。

遺物（第6～10図、写真図版17・18）

＜出土状況＞　埋土及び床面直上から土器片・石器類が出土している。土器片は住居の北・南・北東隅・中央部にまとまって出土し、それぞれA・B・C・Dに分けて取り上げた。C地点の出土土器は特に摩滅が激しかった。P1からは磨石3点、横型石匙1点、口縁部土器片が出土している。P2からは黒褐色土中から破砕した小破片と多量の炭化物が出土している。

＜土器＞　1～4はA地点より出土したものである。胎土は全て砂粒を含みやや粗～粗で繊維の混入は見られない。色調は橙～褐色を呈し2・4は内面に炭化物が付着している。5～8はB地点の出土土器である。6・7には内外面ともLR縄文が施されている。8は土器の口縁部で内外表面が非常にもろく剥がれやすい。9～11はD地点より出土した土器で、11には1段Rの撚糸文が施される。12は口縁部と同一ヵ所から出土した撚糸文が施された破片である。12は外面がにぶい明黄褐色、内面が黒色を呈する土器片で内面に指頭圧痕と思われる跡がある。15・16はほぼ同一地点より出土した口縁部で胎土・焼成ともほぼ似通っているが16には口唇部に刻目がはいり、外面には0段rの撚糸文が施されている。19はP2埋土より出土した口縁部の

破片である。外面はＬＲ縄文が口唇部近くまで施され、口縁部には太くて浅い沈線が巡る。沈線の下には原体圧痕が施される。

＜石器＞　20・21 は床面より出土した縦型の石匙で表面は全面加工が施され裏面は片側に加工が施される。22 は住居内Ｐ1 より出土した横型の石匙でつまみ部分から表面にかけて丁寧な加工が施されてある。23 は台形状、24 は三角形状の石篦である。25 は上部に加工が施された剥片（Ｒフレ）である。26・27・28 は 22 の横型石匙と同地点より出土した磨石である。27 は右縁辺に磨面を持つ磨石である。

2 号竪穴住居跡

遺構（第 11 図、写真図版 3）

＜位置＞　調査区南西部グリッド 12Ｈ・12Ｉ区の北側にかけて位置する。

＜検出状況＞　Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにて検出した。

＜規模・平面形＞　4.68×2.77ｍの不整楕円形を呈する。

＜埋土＞　暗褐色土を主体とする 3 層からなる。黒色土・黒褐色土には炭化粒を含む。

＜壁・床＞　立ち上がりは一部はっきりと確認できず、Ⅲ層の褐色土を壁・床とした。壁の立ち上がりは緩やかに外傾し壁高は 8.0～17.2cm である。床面は部分的に凹凸があり、住居の南側の土器が出土した地点と炉の東側部分が一部硬くしまっている。

＜ピット＞　住居内北側、南北に連なるように 2 基検出した。1 号竪穴住居跡と同様、平面形は楕円形で浅い窪み状である。埋土は暗褐色土の単層である。

＜柱穴＞　遺構内外にて 46 基検出した。開口部は 8～34cm とばらつきが多く、深さは 5.0cm と浅いものから 28.6cm まである。埋土は暗褐色土・黒褐色土を主体とし、炭化物はほとんど含まれていない。推定される柱配置は pp6－pp7－pp8－pp14－pp19－pp20－pp24 である。浅い柱穴は全て壁際に寄っているため、3 cm ほどの深さのものもプランに入れた。

＜炉＞　住居北側より地床炉を検出した。規模は 53×38cm・厚さ約 20cm、平面形は楕円形を呈する。焼土は 2 層に分かれ、その下層の黒褐色土には炭化物が多く含まれる。また、焼土の下層には焼土の形に沿うような状態で炭化材が残っている。

遺物（第 12～13 図、写真図版 19）

＜出土状況＞　埋土及び床面直上から土器片・石器類が出土している。住居南側で土器片がまとまって出土した。

＜土器＞　29 は尖底深鉢の胴下部から底部にかけての接合破片である。外面はＬＲ縄文が施され尖底部はナデ調整されている。内外面ともに灰黄褐色を呈し繊維の混入は見られなかった。30～37、39 は表裏縄文土器片である。30・31 の胎土は砂粒を含みやや粗く少量ではあるが繊維を含み、内外面には微かな痕跡であるがＲＬ縄文が施されている。33 の内面には炭化物が付着している。32～34 はＬＲ、35～37 はＲＬの縄文が施される。繊維は含んでいない。

＜石器＞　40 は無茎円基の石鏃、41 は片面加工の縦型石匙である。

＜土製品＞　長さ（4.3cm）、幅 3.3cm で上半部に凸状のふくらみを持つ。下側部に刺突が 2 ヵ所、ふくらみの下 1 ヵ所に施されている。裏面は僅かに内湾する。

3号竪穴住居跡

遺構（第14図、写真図版4）

＜位置＞　調査区南西部グリッド13・14K区の東側にかけて位置する。

＜検出状況＞　Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりにて検出した。

＜規模・平面形＞　4.49×1.74mの不整長楕円形を呈する。

＜埋土＞　黒褐色土・暗褐色土を主体とする6層からなる。住居中央部の埋土には炭化物を含む。

＜壁・床＞　Ⅲ層を壁とし、緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は6.0～22.9cmである。床面は黒色土を含んで汚れた暗褐色土を床面とし、東側から中央部に緩やかに傾斜していくが西側はやや凹凸気味である。東側壁付近は部分的に硬くしまっている。

＜柱穴＞　35基検出した。うち15基は壁の外側から、13基は壁の立ち上がり部分から検出した。開口部7～24cm・深さ2.1～41.9cmとばらつきが多い。pp33は住居内に内傾して柱穴が入り込むがその他はほぼ垂直に柱穴が入り込む。埋土は褐色土混じりの黒褐色土・暗褐色土が主体である。推定される柱配置はpp1－pp2－pp3－pp5－pp11－pp12－pp33－pp35である。浅い柱穴に関しても2号住居と同様に壁際に寄っているものが多いためプラン内にいれた。

遺物（第15～19図、写真図版20～21）

＜出土状況＞　埋土及び床面直上から土器片・石器類が出土している。住居内の西側壁際より尖底土器が2点出土した。また、尖底土器の出土位置から土器の上部に僅かに重なるように1点（43×23cm）・住居内中央部より2点（凹石・僅かに使用面が見られる台石）・住居内東側より大きい礫（台石？）が2点出土した。

＜土器＞　43・44は出土状況を元に復元したものである。43は外面にＲＬ縄文、44は内外面ともＲＬ縄文が施されている。器形は両方とも尖底部から胴部にかけて緩やかにふくらみ、口縁部はやや外傾する。43には口縁部のくびれに浅い沈線がめぐっている。52・53は同一個体と思われる破片である。ＬＲ縄文施文後、口縁部に浅い沈線をめぐらし沈線の下に原体圧痕が見られる。また、口唇部にも同一の原体圧痕を施していると思われる。48の口縁部破片は口唇部近くまで地文が入り、口唇部には工具により刻目が施されている。55は住居内東側の石台の下より出土した土器片で、ＲＬ縄文が施されている。

＜石器＞　56は無茎で基部が長い石鏃である。57・58は3縁辺に刃部を持つ石箆で、57は裏面1辺に粗雑な剥離が入り、58は基部に大きな剥離が施され下部が欠損している。59・60は1辺に刃部をもつ削掻器である。61は上部が欠損し、片面に押圧剥離が施され尖頭部を持つ。62は表面の剥離の末端と裏面の右側辺に刃部を形成している。63・64・65はＲフレ、66はＵフレである。67～69は側面に磨面を持つ磨石で、69の棒状磨石は半分が欠損し表面に煤が付着している。70は小型の凹石、71は中央部に使用痕を残した凹石である。

4号竪穴住居跡（第20図、写真図版5）

＜位置＞　調査区南東部グリッド12L・12M区にかけて北側に位置する。

＜検出状況＞　Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりにて検出した。

＜規模・平面形＞　4.53×3.60mの不整円形を呈する。

＜埋土＞　上位に黒褐色土、下位に黒褐色土を含む褐色土が堆積する。

＜壁・床＞　Ⅲ層を壁とし、緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は9.5～12.7cmである。しまりのある褐色土を床面とし、部分的に凹凸が見られる。

＜柱穴＞　遺構内より 6 基、遺構外より 4 基計 10 基を検出した。開口部 12.5～30cm・深さ 8 ～36.5cm である。埋土は黒褐色土を主体としている。pp1、pp2、pp3、pp6、pp7、pp8 は開口部が底部に比べ大きく開き、開口部付近でえぐられたような跡を伴う。柱配置は pp1－pp2－pp3－pp4－pp10 を推定した。

遺物（第 22 図、写真図版 22）

＜出土状況＞　床面直上より土器の細片数点と石器 1 点が出土した。

＜土器＞　74 は北側壁際から出土した土器で、磨耗が著しく原体はＲＬと思われる。胎土は砂粒を含み粗く、少量であるが繊維を含んでいる。

＜石器＞　75 の削掻器は右側の縁辺部に刃部が作られている。

5 号竪穴住居跡（第 21 図、写真図版 6）

＜位置＞　調査区南東部グリッド 12Ｎ区の北西側に位置する。

＜検出状況＞　Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにて検出した。

＜規模・平面形＞　8.02×6.94mの不整隅丸方形を呈する。東側にやや張り出し気味である。

＜埋土＞　上位は暗褐色土、下位は褐色土を主体とする。

＜壁・床＞　Ⅲ層を壁とし、緩やかに外傾して立ち上がる。しまりのある褐色土を床面とする。壁高は 7～15.3cmと緩やかな凹凸がある。

＜ピット＞　住居南東側より平面形が不整楕円形のピット 1 基検出。規模は開口部径 90×61cm・深さ 17 cmである。暗褐色土の単層からなり埋土中より炭化粒と 110 点のチップが出土した。総重量は24.7g、石材は全て頁岩である。また、住居内より出土した石器と全てのチップの接合関係は確認できなかった。床面検出時に検出されたことからこの住居に伴う施設と思われる。

＜柱穴＞　遺構内全体より 32 基、壁の外側より 5 基の計 37 基を検出した。規模は、開口部 14.5～33.5cm・深さ 9～33.7cm である。埋土は暗褐色土・褐色土等の混合土が多い。柱穴配置は pp23－pp4－pp28－pp30－pp31－pp32－pp33－pp17－pp20 と推定され、配置を見る限り南東側にも検出し得なかった柱穴がある可能性を持っている。

遺物（第 22～26 図、写真図版 22～25）

＜出土状況＞　埋土上部・床面より土器片・石器が出土した。

＜土器＞　76・78 は埋土上部にて出土した。76 は胴下部から底部の接合破片である。丸みを帯びた尖底部から緩やかに外傾している。胎土は砂粒を含み粗く微量であるが繊維を含んでいる。外面にのみＲＬ縄文が施される。77 は床面より検出した破片で、微量であるが繊維を含み、外面のみにＲＬ縄文が施されている。

＜石器＞　79 は尖頭部を欠損した石鏃、80 は刃部を欠損した石箆である。81～84 は片面加工の石箆で、81 は細長台形状、82 は不整台形状を呈する。83・84 はホルンフェルスを石材としているため摩滅が著しい。85 は細長の形状を呈し表面に加工が施され右側辺に刃部を持つ。86・89 はノッチ状に加工した刃部を持つ。92 は両面全体に加工を施している。93 は左側辺に刃部を施し尖頭部を形成している。103 は片面加工の打製石斧で、刃部が欠損している。105・106 は棒状磨石で石の縁辺と側面に磨面をもつ。105 は焼成を受け表面が破損している。

6号竪穴住居跡（第27図、写真図版7）

＜位置＞　調査区南東部グリッド11M区の南東側に位置する。

＜検出状況＞　Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにて検出した。

＜規模・平面形＞　3.95×2.27mの長楕円形を呈する。

＜埋土＞　暗褐色土を主体とする。

＜壁・床＞　上部は削平を受け壁高は1.8～7cmと浅く、埋土のしまりがある部分で壁の立ち上がりを決めた。暗褐色土を含む褐色土を床面とする。

＜柱穴＞　遺構内より4基、立ち上がり部分より3基、壁の外側より12基の計19基を検出した。開口部は径9～57cm・深さ5.9～21.8cmである。一部の柱穴は埋土上部には撹乱の跡が見られるが、下層は暗褐色土を主体とするものがほとんどであった。またpp11の埋土には暗褐色土中に炭化物が多く含まれていた。

遺物（第27図、写真図版25）

＜出土状況＞　床面より土器片が出土した。住居中央部に18×15cm程の礫があり、その周りに土器の小破片が散らばっていた。礫には磨面等は見られなかった。

＜土器＞　住居床面の北西側から出土した。磨耗が著しく108は外面ＬＲ、109は外面ＲＬ？の縄文が施される。胎土は砂粒を含みやや粗い。

7号竪穴住居跡（第28図、写真図版8）

＜位置＞　調査区南東隅グリッド10Q区の南西側に位置する。

＜検出状況＞　Ⅲ層上層で褐色土混じりの暗褐色土の広がりにて検出した。

＜規模・平面形＞　3.35×3.06mのほぼ円形を呈する。北側は一部トレンチにより切られている。

＜埋土＞　褐色土混じりの暗褐色土を主体とする。

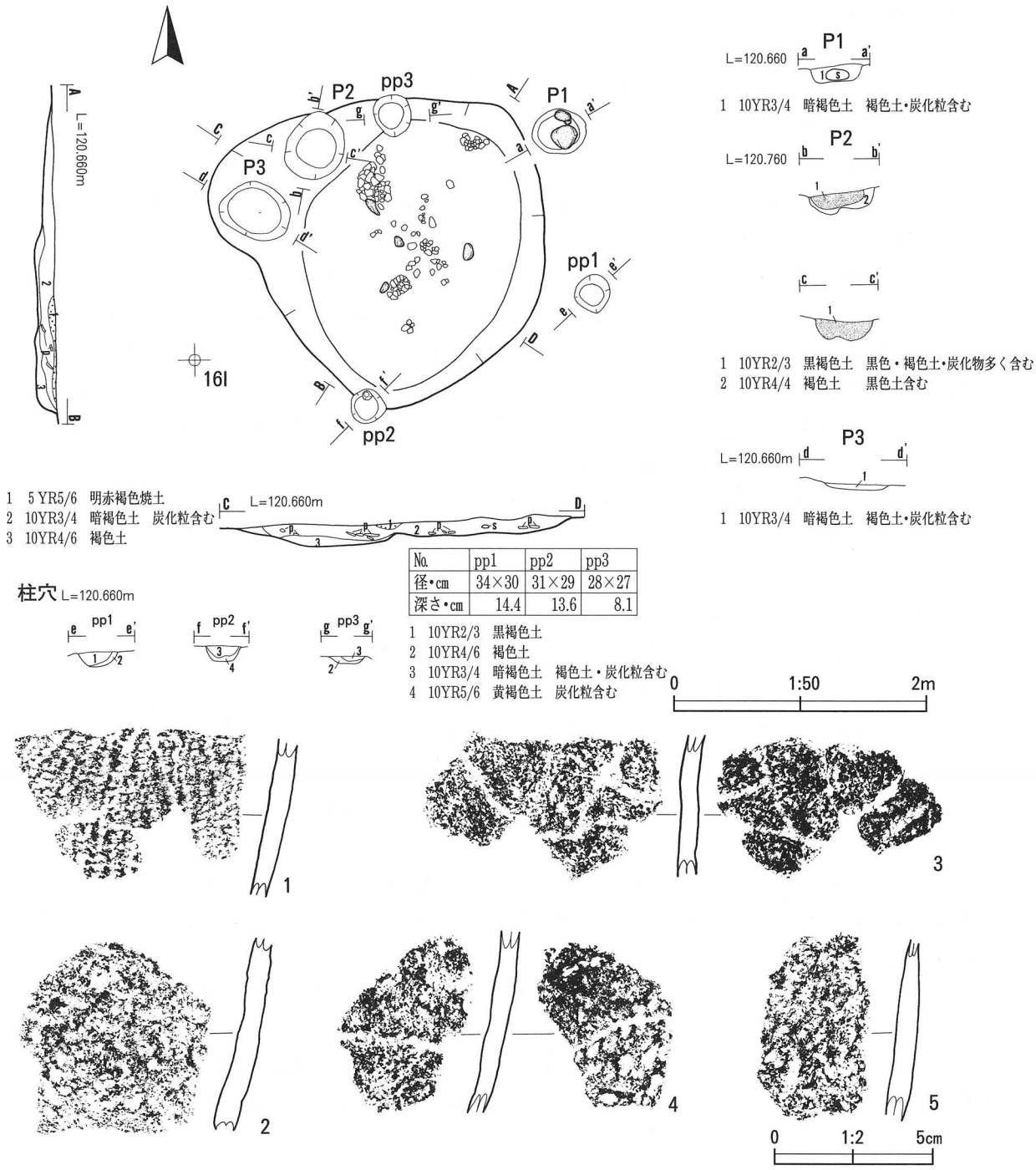
＜壁・床＞　壁高は1.6～8cmと浅く、埋土のしまりがある部分で壁の立ち上がりを決めた。暗褐色土を含む黄褐色土を床面とし、ほぼ平坦である。

＜柱穴＞　遺構内より8基、壁の外側より4基の計12基を検出した。開口部径9～50cm・深さ7～24cmである。埋土は暗褐色・褐色土等の混合土を主体としている。推定される柱配置はpp6－pp3－pp11である。

遺物（第28図、写真図版25）

＜出土状況＞　床面中央部よりまとまった状態で土器片が出土した。土器の縄文・条痕の違いより2個体の破片があるものと思われる。

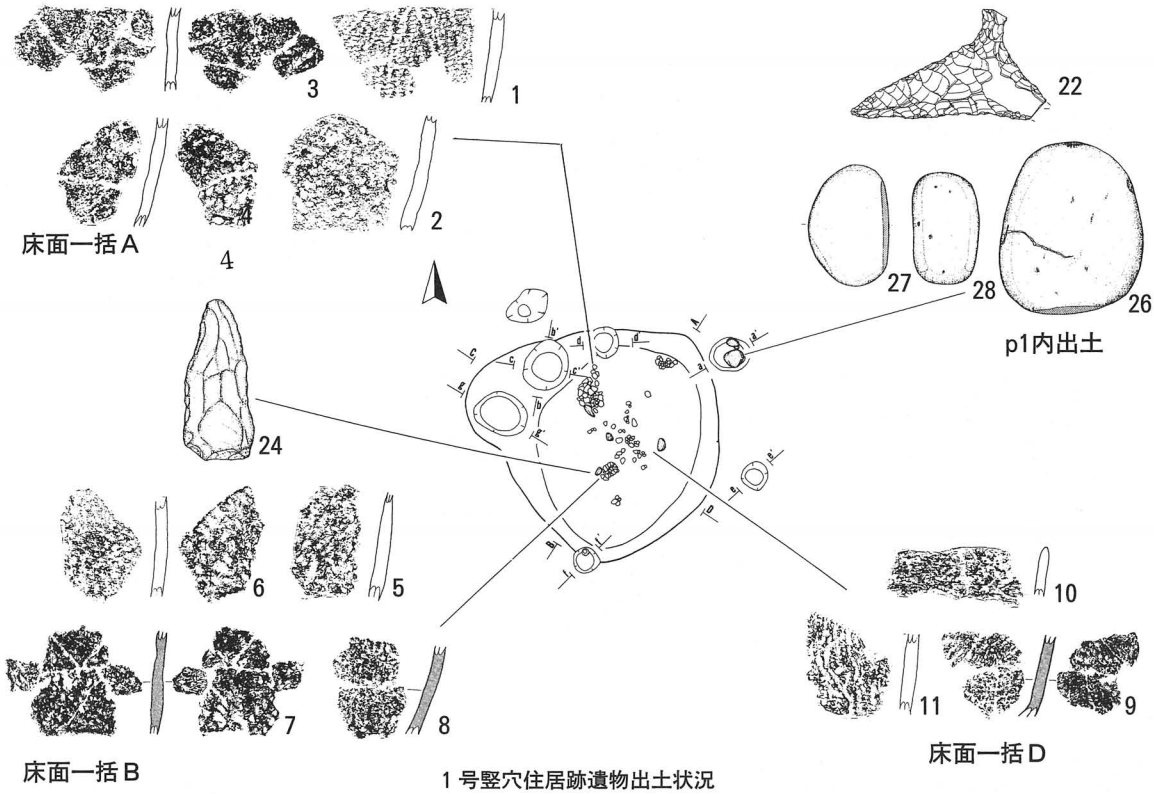
＜土器＞　7号住居より出土の土器の胎土は砂粒を含んではいるが、他の住居から出土した土器に比べ焼成は良好である。110・111は外面ＬＲで内面はナデ調整される。112・113は外面ＬＲ・内面貝殻条痕文が施される。53の内面には炭化物が付着する。



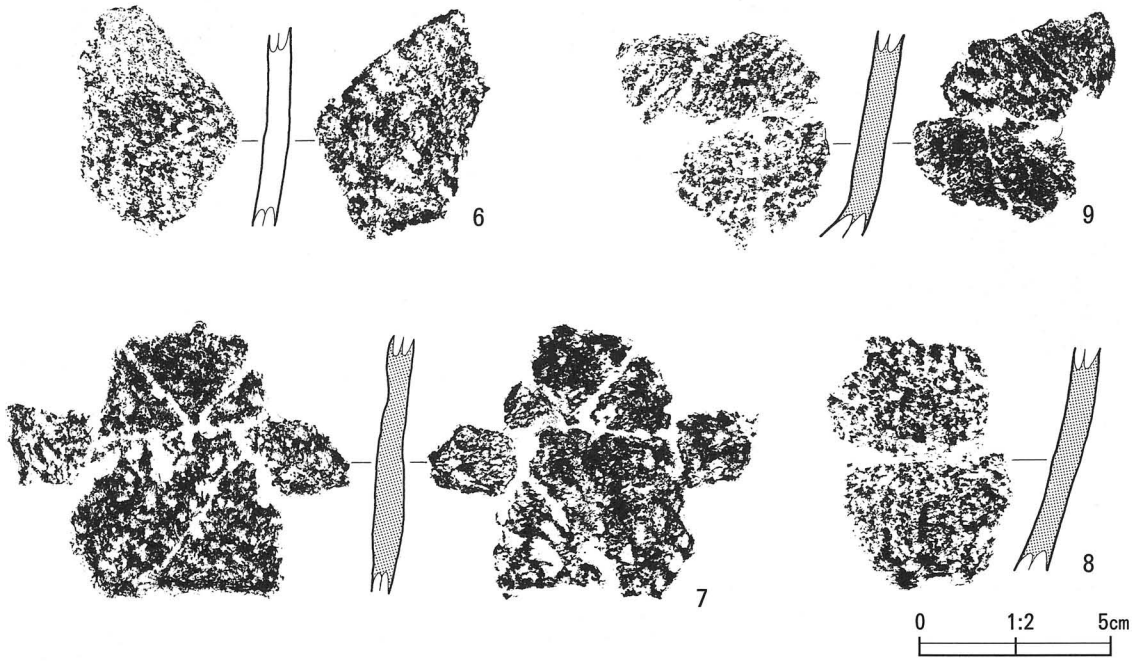
No.	pp1	pp2	pp3
径・cm	34×30	31×29	28×27
深さ・cm	14.4	13.6	8.1

No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	繊維	色調 外面	色調 内面	分類	写真図版
1	1号住居	床面一括A	深鉢	胴部	縄文（外面：LR？）内面：ナデ	なし	明黄褐色	褐灰色	Ⅰ	17−1
2	1号住居	床面一括A	深鉢	胴部	内外面磨耗著しい 内面炭化物付着 胎土：砂粒含む・やや粗	なし	褐色	褐色	Ⅰ	17−2
3	1号住居	床面一括A	深鉢	胴部	内外面磨耗著しい 胎土：砂粒含む・やや粗	なし	褐色	にぶい黄褐色	Ⅱ	17−3
4	1号住居	床面一括A	深鉢	胴部	縄文（LR）内面炭化物付着 胎土：砂粒含む・粗い	なし	褐色	褐色	Ⅱ	17−4
5	1号住居	床面一括B	深鉢	胴部	内外面磨耗著しい 胎土：砂粒含む・粗い	なし	褐色	褐色	Ⅰ	17−5

第6図 1号竪穴住居跡・出土遺物①

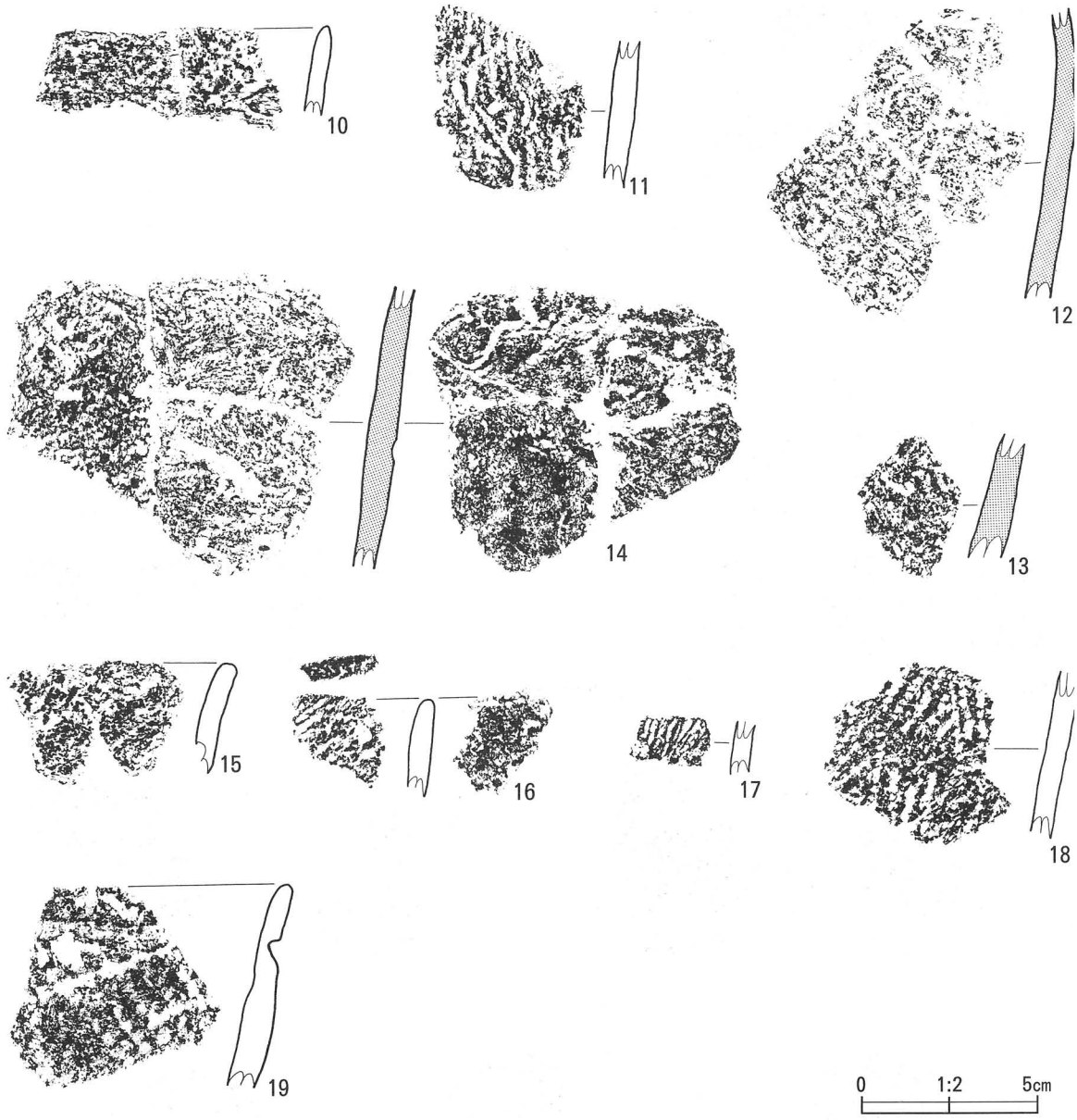


1号竪穴住居跡遺物出土状況



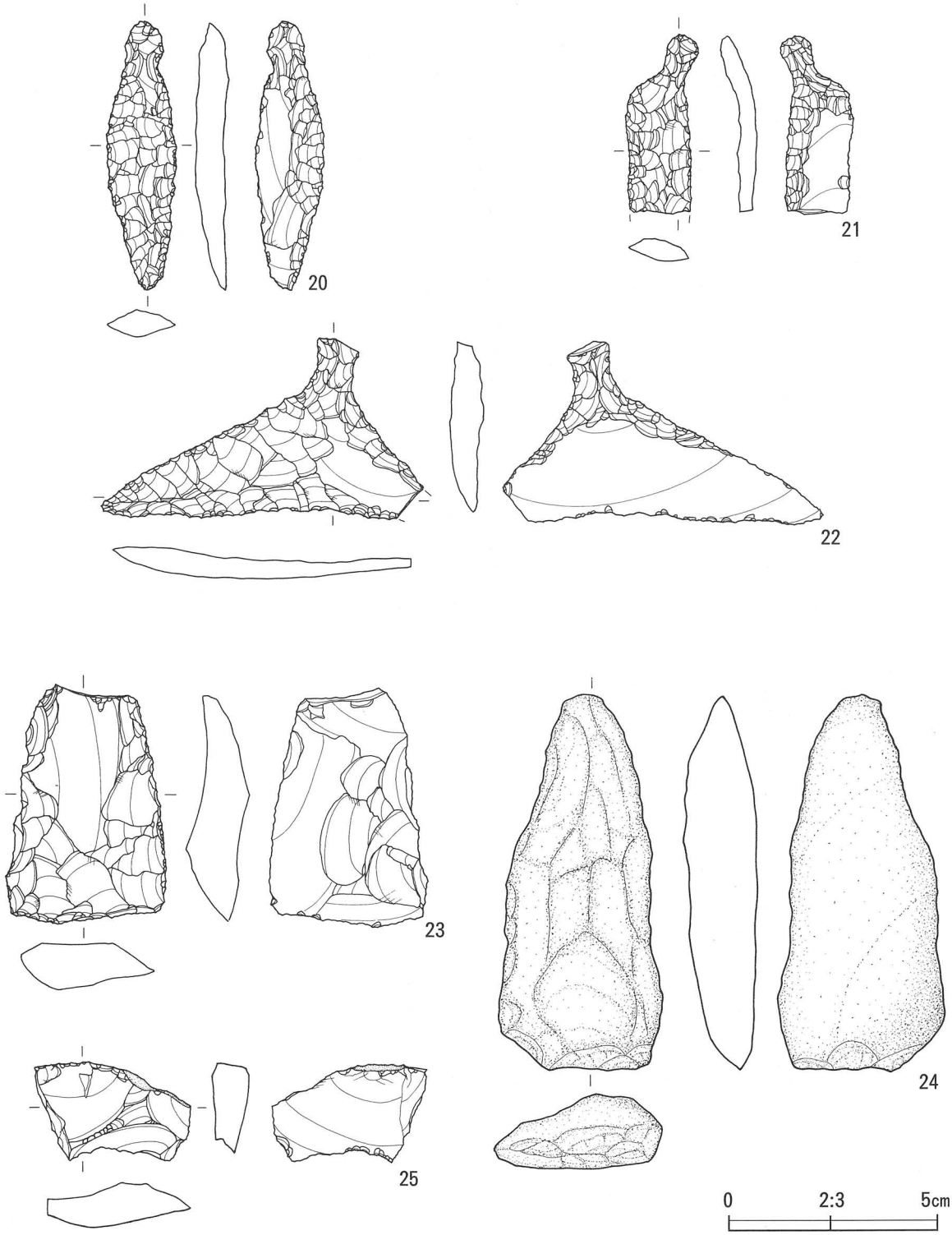
No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	繊維	色調 外面	色調 内面	分類	写真図版
6	1号住居	床面一括B	深鉢	胴部	縄文（外面：不明・内面：LR？）胎土：砂粒含む・粗い	なし	褐色	褐色	Ⅱ	17−6
7	1号住居	床面一括B	深鉢	胴部	縄文（外面：LR？・内面：LR？）胎土：砂粒含み粗い	微量	褐色	褐色	Ⅱ	17−7
8	1号住居	床面一括B	深鉢	胴部	内外面磨耗著しい	含む	明褐色	黒色	Ⅰ	17−8
9	1号住居	床面一括D	深鉢	胴部	縄文（内面：LR？）	微量	明褐色	黒色	Ⅱ	17−9

第7図　1号竪穴住居跡遺物出土状況・出土遺物②



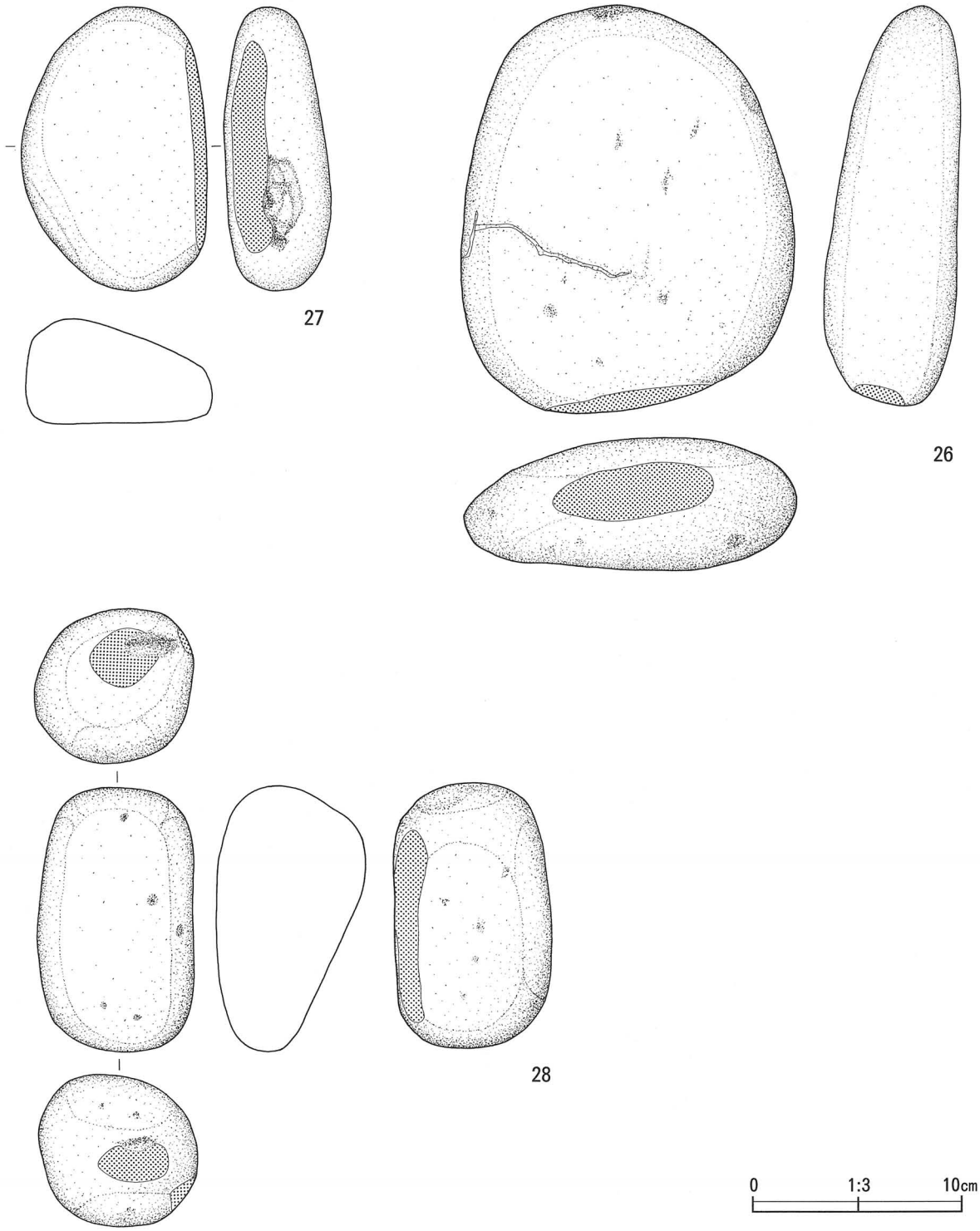
No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	繊維	色調 外面	色調 内面	分類	写真図版
10	1号住居	床面一括D	深鉢	口縁部	内外面磨耗著しい	なし	にぶい明褐色	褐灰色	Ⅰ	17－10
11	1号住居	床面一括D	深鉢	胴部	縄文（外面：撚り糸R１段）内面：ナデ	なし	にぶい黄褐色	褐色	Ⅴ	17－11
12	1号住居	Q１	深鉢	胴部	内外面磨耗著しい　内面：指頭圧痕　胎土：砂粒含むやや粗い	含む	にぶい明褐色	黒色	Ⅰ	17－12
13	1号住居	Q１	深鉢	胴部	胎土：砂粒含むやや粗い	少量	褐色	にぶい黄橙色	Ⅰ	17－13
14	1号住居	Q１	深鉢	胴部	胎土：砂粒含むやや粗い	多量	褐色	にぶい黄橙色	Ⅱ	17－14
15	1号住居	Q２	深鉢	口縁部	内外面磨耗著しい	なし	褐色	にぶい黄橙色	Ⅰ	17－15
16	1号住居	Q２	深鉢	口縁部	縄文（外面：０段r撚り糸）内面：ナデ	なし	褐色	にぶい黄橙色	Ⅱ	17－16
17	1号住居	Q２	深鉢	胴部	縄文（外面：撚り糸）内面：ナデ　胎土：砂粒含むやや粗い	なし	褐色	黒色	Ⅴ	17－17
18	1号住居	西側ベルト	深鉢	胴部	縄文（外面：LR？）内面：ナデ	なし	褐色	黒色	Ⅰ	17－18
19	1号住居	P１埋土	深鉢	口縁部	縄文（外面：RL）内面：ナデ　口縁：太くて浅い沈線巡る　沈線の下に原体圧痕	なし	褐色	くすんだ黄橙色	Ⅰ	17－19

第８図　１号竪穴住居跡出土遺物③



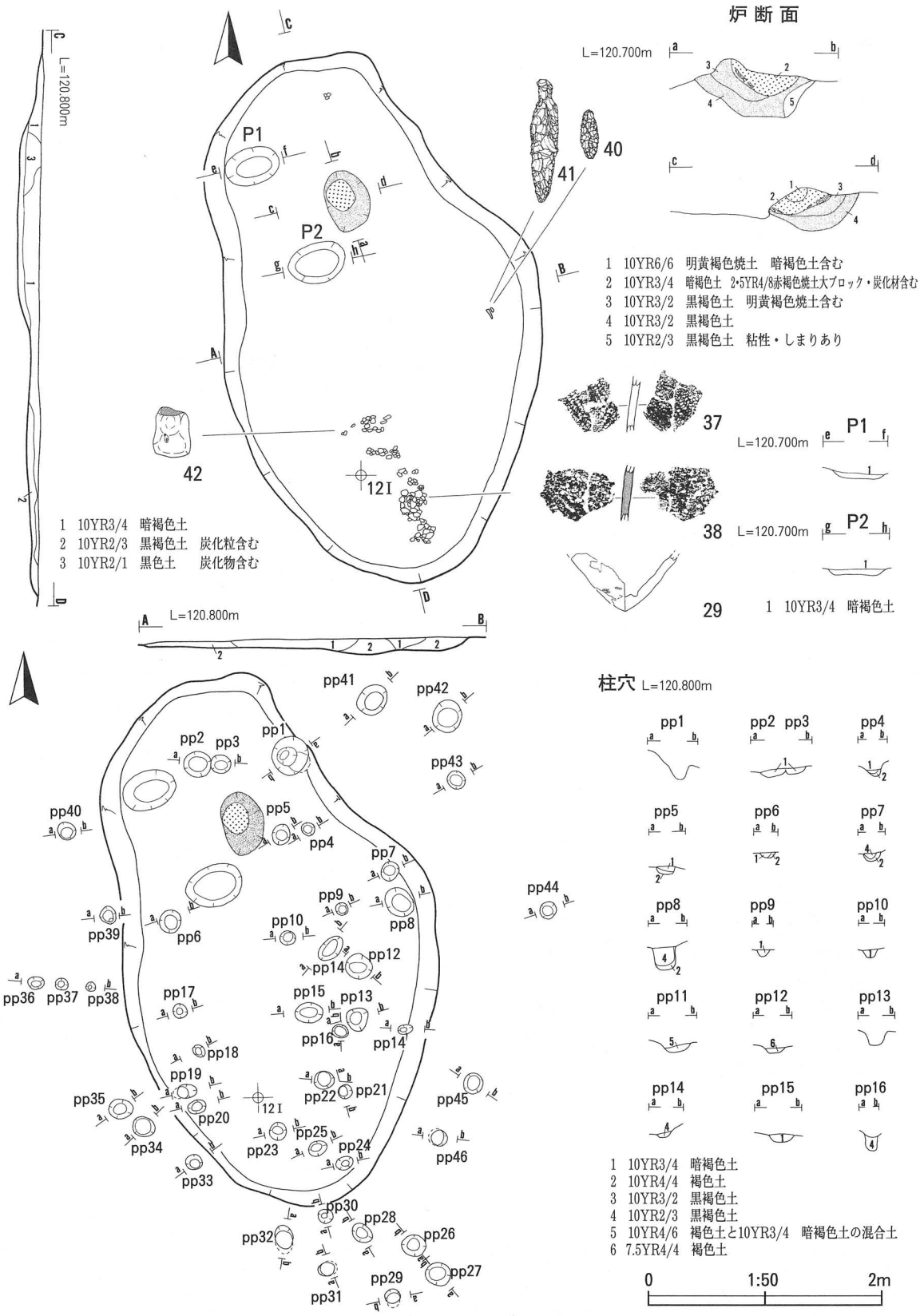
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
20	1号住居	上面一括	石匙	6.5	1.7	0.8	6.6	頁岩	奥羽山脈		18－20
21	1号住居	上面一括	石匙	(4.4)	1.7	0.9	4.3	頁岩	奥羽山脈	欠損	18－21
22	1号住居	床面一括E	石匙	4.4	(7.8)	0.8	16.0	頁岩	北上山地	欠損	18－22
23	1号住居	埋土	石篦	5.8	3.9	1.5	34.0	頁岩	奥羽山脈		18－23
24	1号住居	上面一括	石篦	9.0	4.0	1.8	70.0	ホルンフェルス	北上山地	表面磨滅著しい	18－24
25	1号住居	床面一括s2	剥片	2.4	3.8	0.9	7.7	頁岩	奥羽山脈		18－25

第9図　1号竪穴住居跡出土遺物④



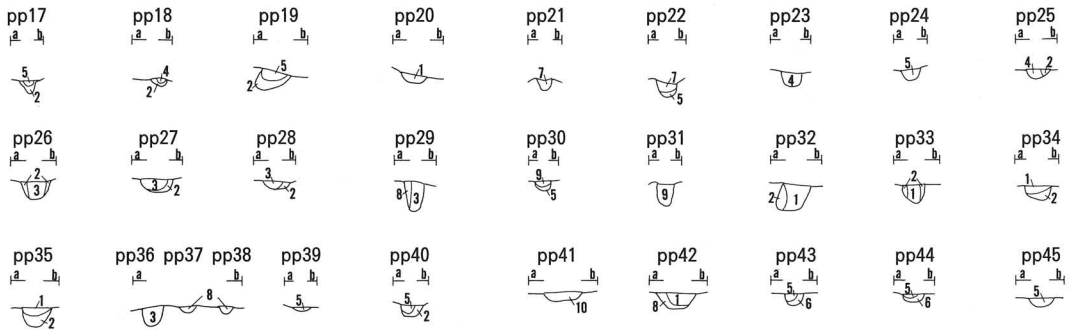
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
26	1号住居	pp1	磨石	19.8	16.0	6.3	2960.0	石英安山岩	奥羽山脈		18－26
27	1号住居	pp1	磨石	13.8	8.9	5.7	810.0	石英安山岩	奥羽山脈		18－27
28	1号住居	pp1	磨石	12.8	7.6	7.3	1150.0	石英安山岩	奥羽山脈		18－28

第10図　1号竪穴住居跡出土遺物⑤



第11図 2号竪穴住居跡①・②

柱穴 L=120.800m

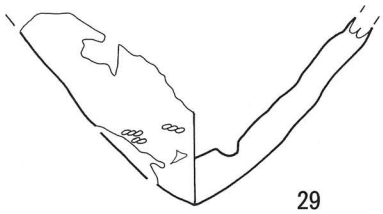


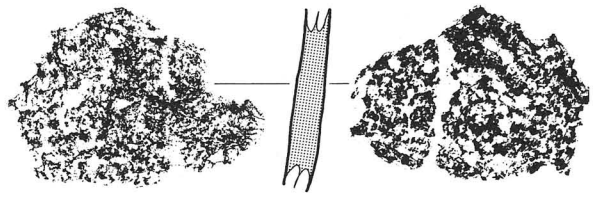
1 10YR3/4 暗褐色土
2 10YR4/4 褐色土
3 10YR3/2 黒褐色土
4 10YR2/3 黒褐色土
5 10YR4/6 褐色土と10YR3/4暗褐色土の混合土
6 7.5YR4/4 褐色土
7 10YR /4 褐色土 炭化粒含む
8 10YR4/6 褐色土と10YR3/4暗褐色土の混合土 しまりあり
9 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色ブロック含む
10 10YR3/4 黒褐色土 褐色土含む

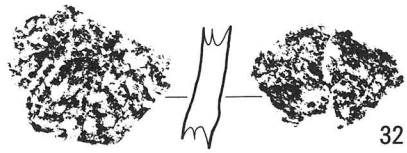
No.	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5	pp6	pp7	pp8	pp9	pp10	pp11	pp12	pp13	pp14	pp15	pp16
径・cm	34×32	23×22	18×17	13×11	18×16	21×18	17×15	26×20	11×10	13×12	26×16	22×22	22×19	12×8	24×18	13×11
深さ・cm	25.9	8.6	3.6	7.9	15.9	6.1	2.1	27.9	9.8	15.8	9.1	10.0	11.4	10.0	7.4	19.4

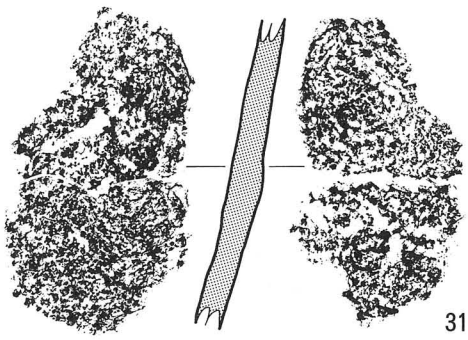
No.	pp17	pp18	pp19	pp20	pp21	pp22	pp23	pp24	pp25	pp26	pp27	pp28	pp29	pp30	pp31	pp32
径・cm	13×12	12×10	18×11	17×12	12×11	17×15	16×15	16×15	16×13	21×20	21×20	19×15	13×12	14×12	15×11	21×15
深さ・cm	4.8	2.0	15.4	8.6	12.0	17.3	18.1	18.1	7.6	17.8	11.6	6.0	23.8	7.0	19.3	21.1

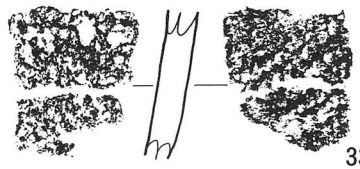
No.	pp33	pp34	pp35	pp36	pp37	pp38	pp39	pp40	pp41	pp42	pp43	pp44	pp45	pp46
径・cm	14×13	21×18	21×17	15×12	12×11	8×7	15×14	16×15	28×23	29×25	16×13	15×14	18×17	14×13
深さ・cm	13.9	10.3	15.1	9.2	3.1	4.4	3.0	8.8	8.2	17.9	10.4	10.0	14.0	28.6


29


30


32

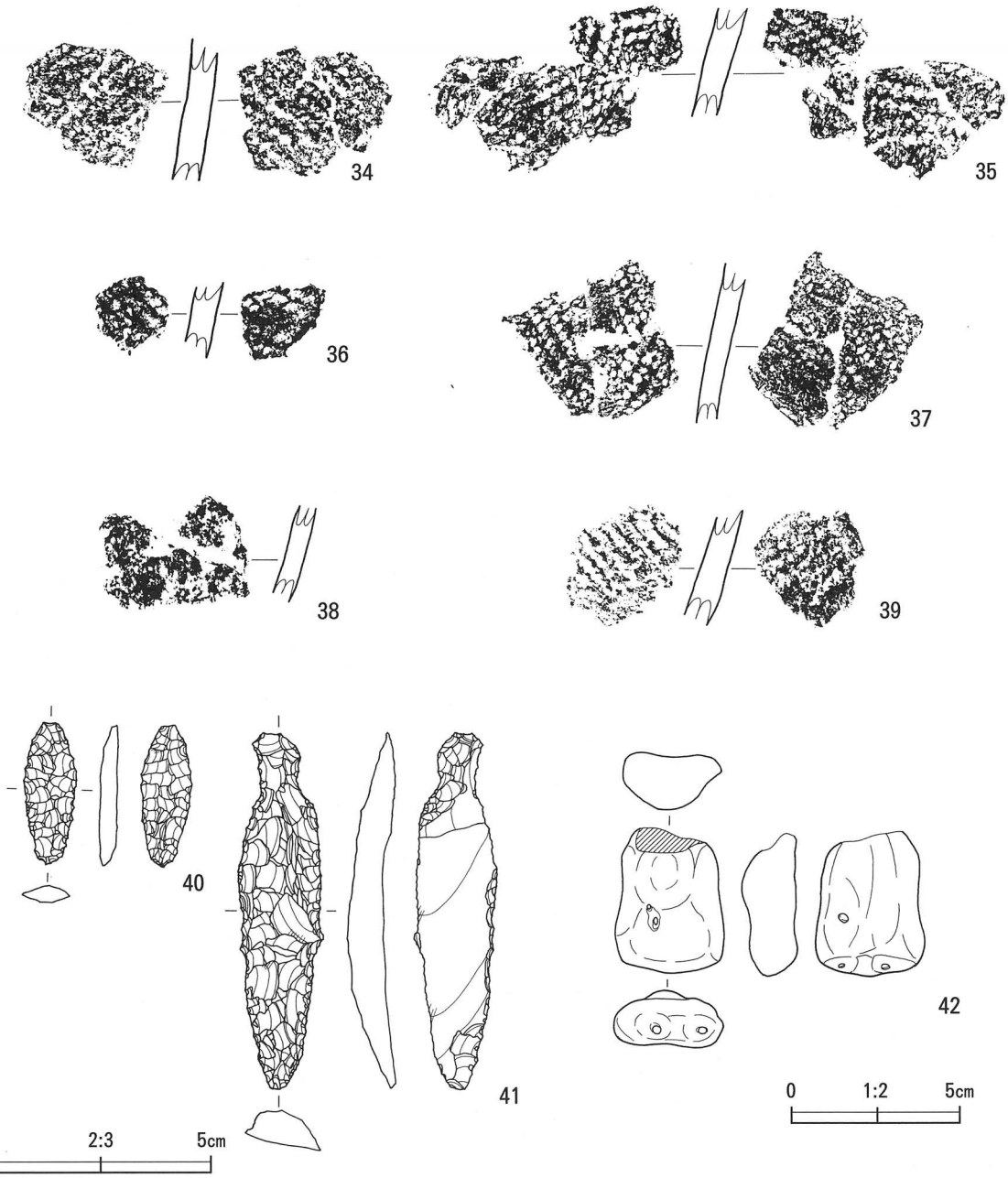

31


33

0 1:2 5cm

No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	繊維	色調 外面	色調 内面	分類	写真図版
29	2号住居	南側床面	深鉢	胴下~底部	縄文（外面：LR）内面：ナデ	なし	灰黄褐色	褐灰色	Ⅰ	19−29
30	2号住居	南側床面	深鉢	胴部	縄文（外面・内面：RL）胎土：砂粒含みやや粗	少量	にぶい黄橙色	褐色	Ⅱ	19−30
31	2号住居	南側床面	深鉢	胴部	縄文（外面：RL？）胎土：砂粒含み粗い	微量	黄橙色	にぶい黄橙色	Ⅱ	19−31
32	2号住居	南側床面	深鉢	胴部	縄文（外面・内面：LR）	なし	黄橙色	にぶい黄橙色	Ⅱ	19−32
33	2号住居	南側床面	深鉢	胴部	縄文（外面・内面：LR）内面炭化物付着	なし	灰黄褐色	灰黄褐色	Ⅱ	19−33

第12図　2号竪穴住居跡柱穴断面図・出土遺物①

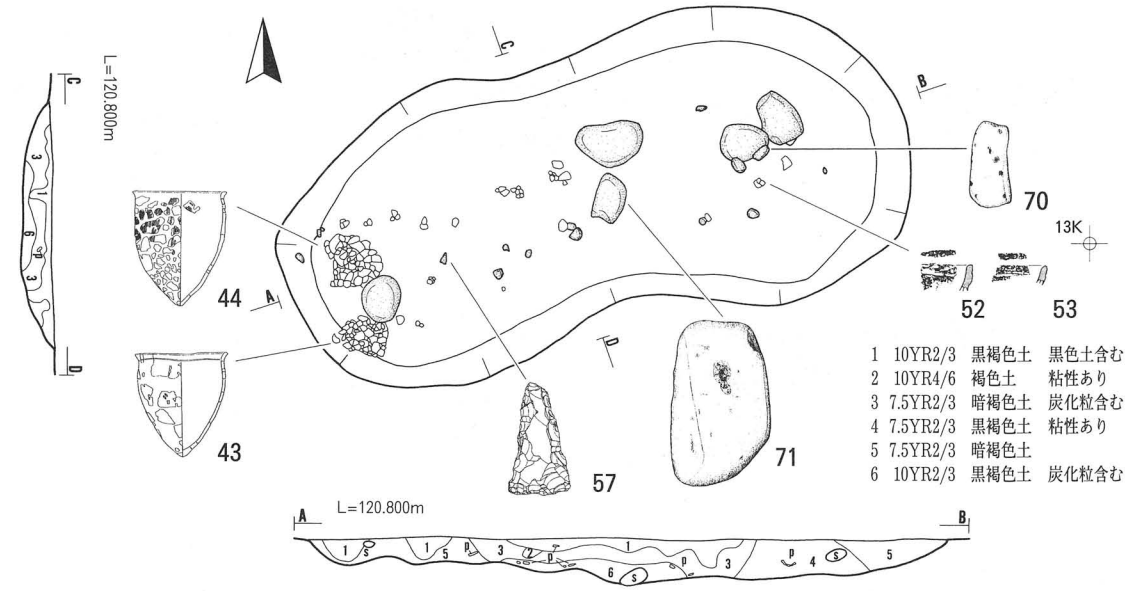


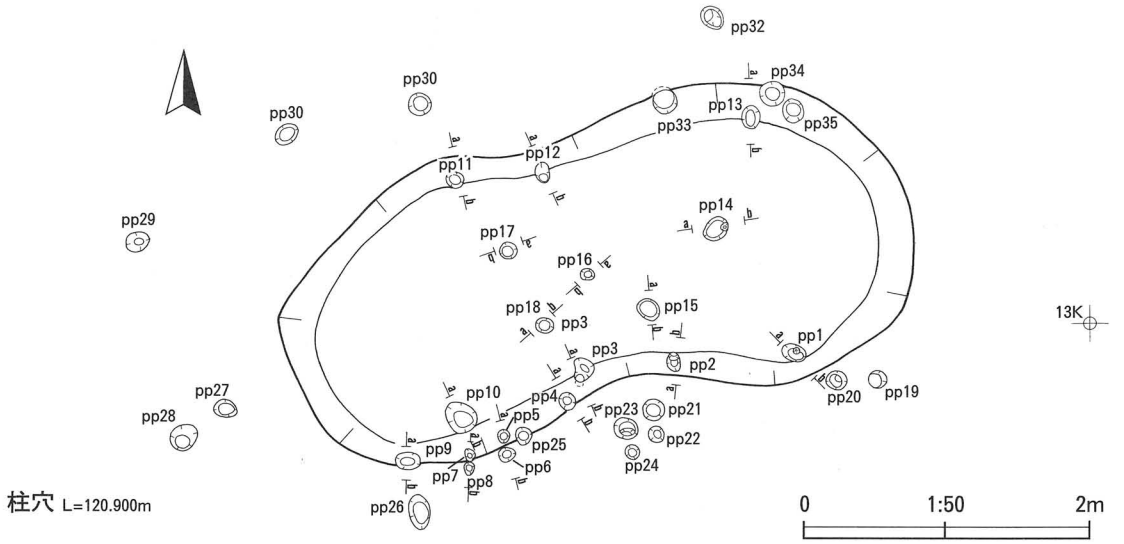
No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	繊維	色調 外面	色調 内面	分類	写真図版
34	2号住居	南側床面	深鉢	胴部	縄文（外面：内面：LR）	なし	灰黄褐色	にぶい黄橙色	Ⅱ	19−34
35	2号住居	南側床面	深鉢	胴部	縄文（外面：内面：LR）	なし	灰黄褐色	灰黄褐色	Ⅱ	19−35
36	2号住居	南側床面	深鉢	胴部	縄文（外面：内面：LR）	なし	褐灰色	褐灰色	Ⅱ	19−36
37	2号住居	南側床面一括	深鉢	胴部	縄文（外面：内面：LR）	なし	明黄褐色	にぶい黄褐色	Ⅱ	19−37
38	2号住居	北側床面一括	深鉢	胴部	内外面磨耗著しい　胎土：砂粒含み粗	なし	明黄褐色	褐灰色	Ⅰ	19−38
39	2号住居	南側一括	深鉢	胴部	縄文（外面：内面：RL？）	なし	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	Ⅱ	19−39

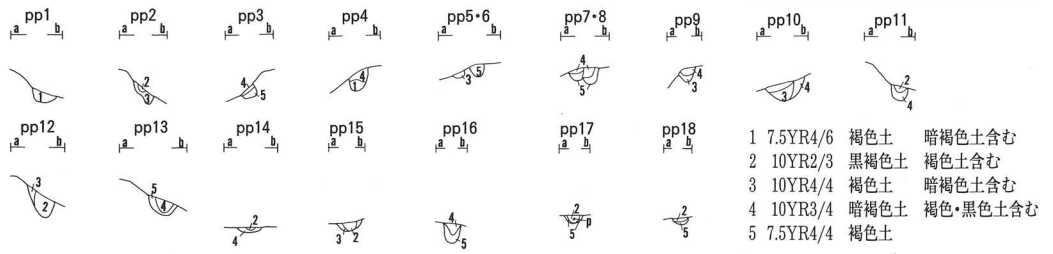
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
40	2号住居	Q4	石鏃	3.2	1.1	0.4	1.5	頁岩	奥羽山脈		19−40
41	2号住居	埋土	石匙	8.0	1.9	1.1	11.5	頁岩	奥羽山脈		19−41

No.	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	写真図版
42	2号住居	北側一括	(4.5)	3.4	1.7	18	中央部に凸状のふくらみを持つ　下面に刺突あり	19−42

第13図　2号竪穴住居跡出土遺物②





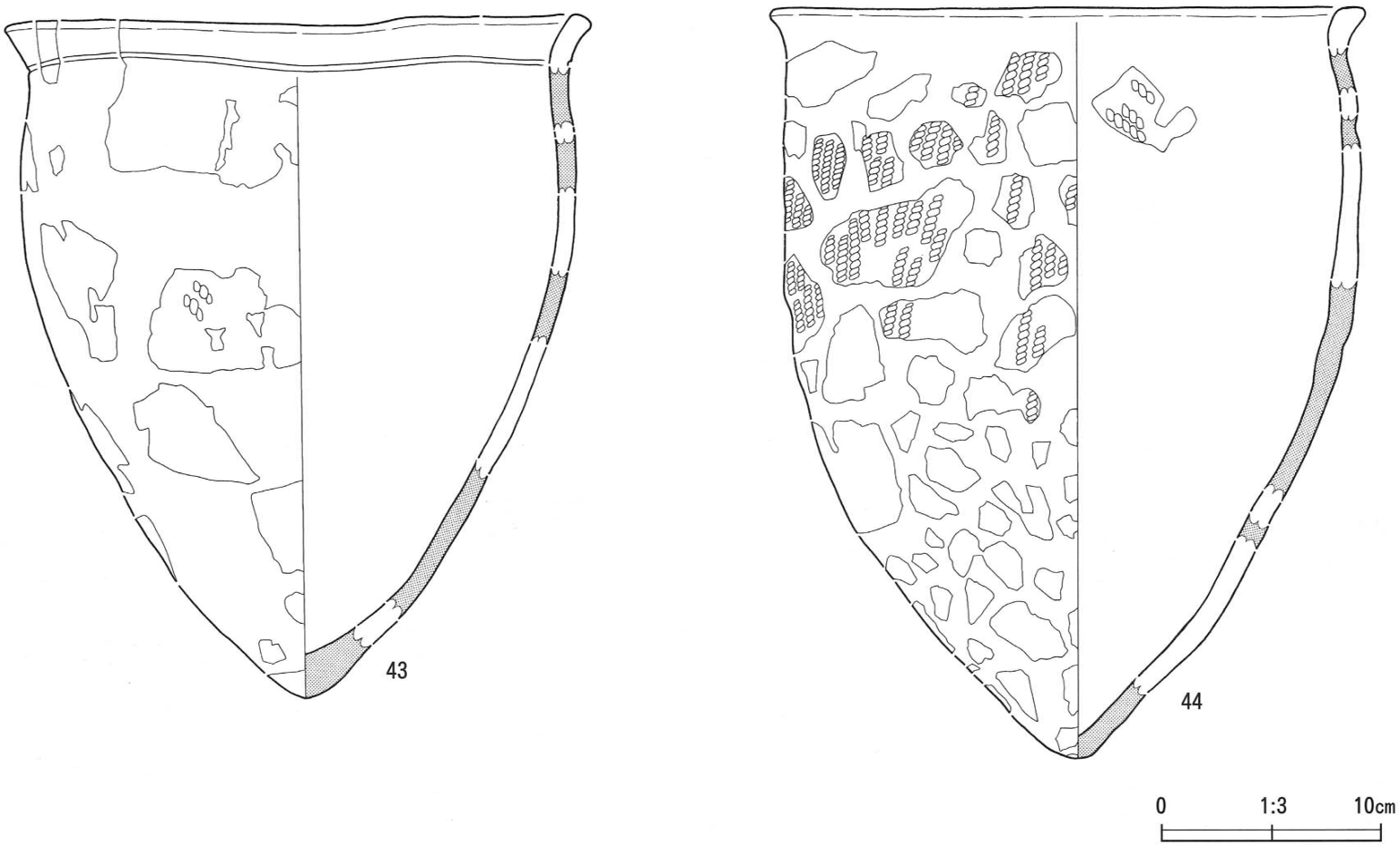


No.	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5	pp6	pp7	pp8	pp9	pp10	pp11	pp12	pp13	pp14	pp15	pp16
径・cm	17×12	14×9	18×12	13×11	10×8	12×10	10×7	9.5×8	17×12	23.5×2	12.5×1	15×9.5	16.5×1	18.5×1	17×14	9×8.5
深さ・cm	4.6	2.5	2.0	16.0	8.8	8.0	8.6	11.4	5.9	7.7	4.2	9.2	2.1	14.3	8.2	14.9

No.	pp17	pp18	pp19	pp20	pp21	pp22	pp23	pp24	pp25	pp26	pp27	pp28	pp29	pp30	pp31	pp32
径・cm	12×11	13×11	13×13	14×13	16×15	12×11	17×16	11×10	12×11	24×15	16×13	21×18	17×14	17×13	16×16	18×15
深さ・cm	6.9	5.5	17.1	20.2	14.3	4.8	41.9	3.6	3.0	25.0	10.1	15.6	7.3	2.5	4.8	12.4

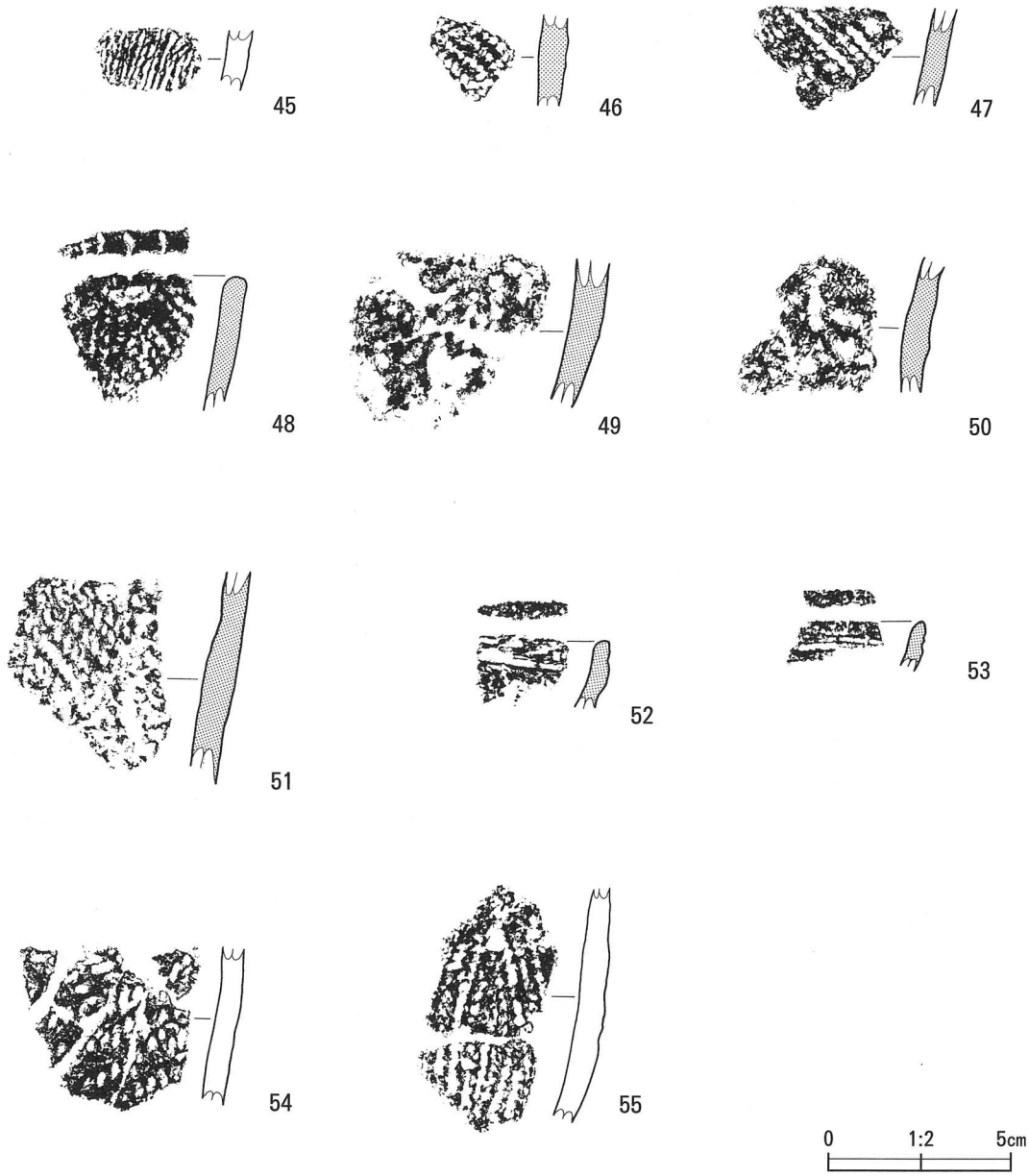
No.	pp33	pp34	pp35
径・cm	18×17	18×16	16×15
深さ・cm	9.0	15.3	8.2

第 14 図　3 号竪穴住居跡①・②



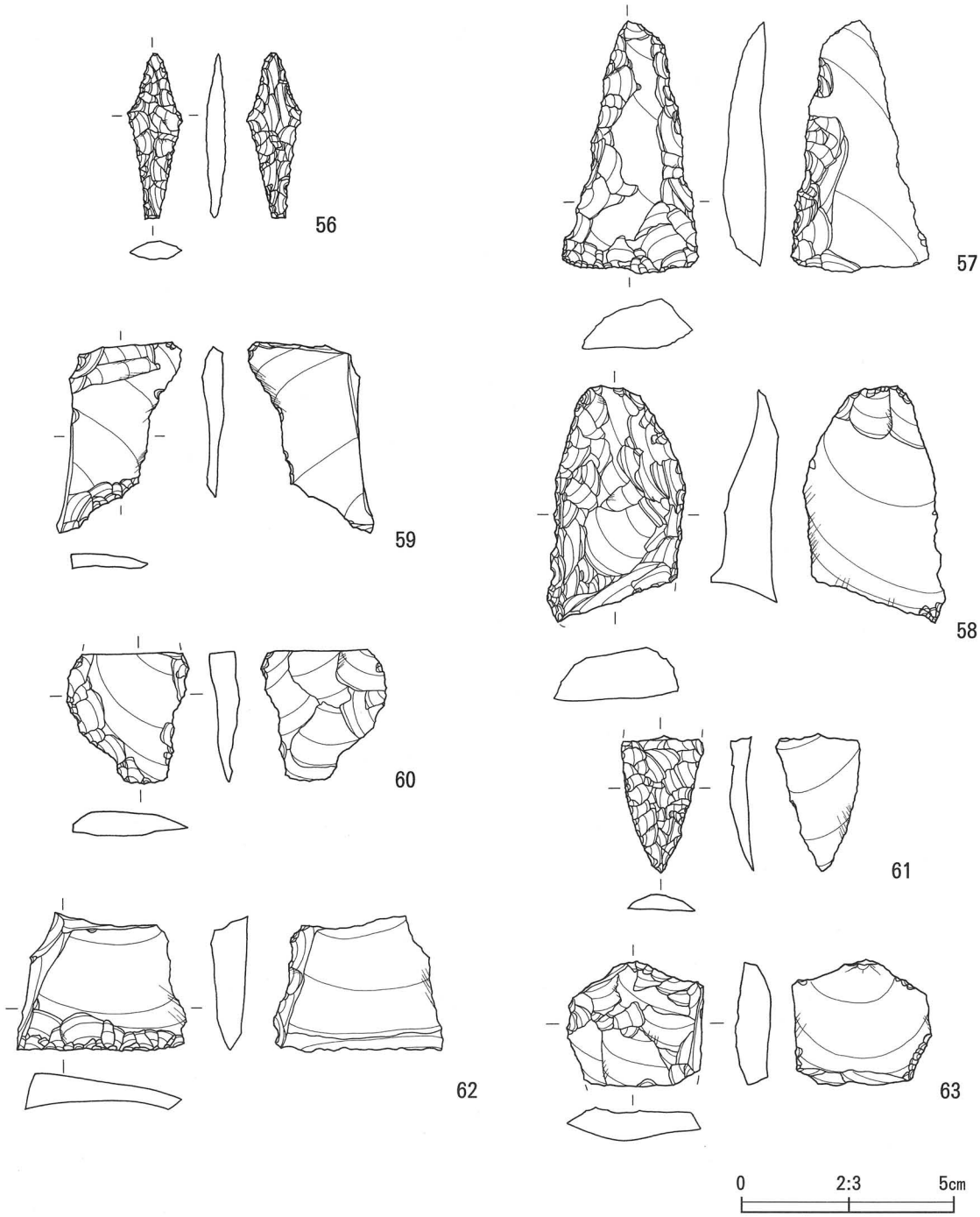
No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	繊維	色調 外面	色調 内面	分類	写真図版
43	3号住居	床面	深鉢		縄文（外面：RL）内面：ナデ　指頭圧痕アリ　胎土：砂粒含む	含む	橙色	にぶい黄褐色	Ⅰ	20－43
44	3号住居	床面	深鉢		縄文（外面：RL　内面：RL）胎土：砂粒含む	少量	橙色	明黄褐色	Ⅱ	20－44

第15図　3号竪穴住居跡出土遺物①



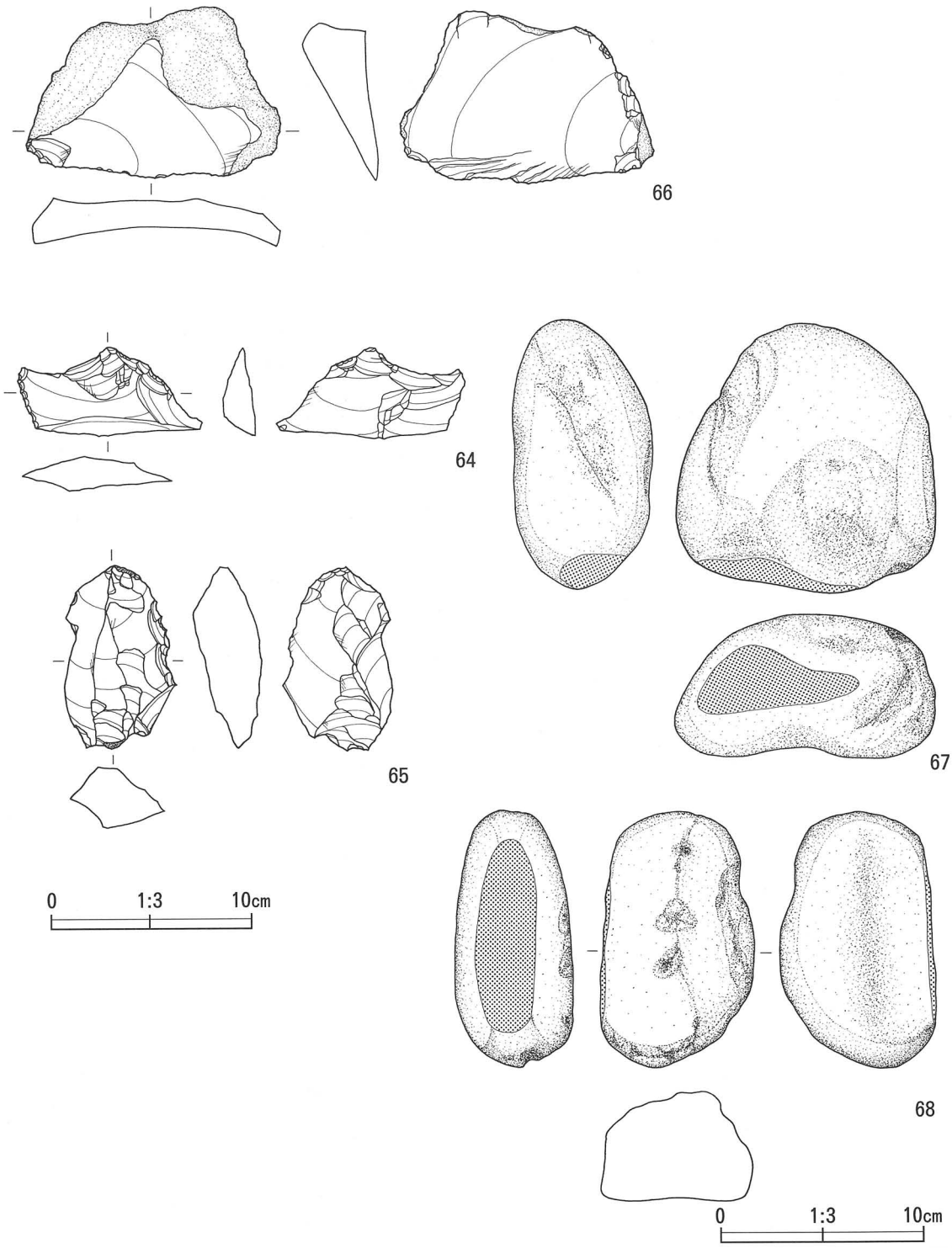
No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	繊維	色調 外面	色調 内面	分類	写真図版
45	3号住居	埋土	深鉢	胴部	縄文（外面：撚糸）内面ナデ　胎土：密	なし	明黄褐色	にぶい黄褐色	V	20−45
46	3号住居	埋土	深鉢	胴部	縄文（外面：LR）内面ナデ　胎土：砂粒含みやや粗	少量	橙色	にぶい黄橙色	I	20−46
47	3号住居	⑧	深鉢	胴部	縄文（外面：RL）	少量	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	I	20−47
48	3号住居	⑱	深鉢	胴部	縄文（外面：LR）内面：ナデ　胎土：密	少量	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	I	20−48
49	3号住居	北　壁際上	深鉢	胴部	外面：磨耗著しい・内面：ナデ　胎土：密	少量	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	I	20−49
50	3号住居	南西エリア埋土	深鉢	胴部	磨耗著しく不明	微量	橙色	にぶい黄褐色	I	20−50
51	3号住居	東側ベルト埋土	深鉢	胴部	縄文（外面：RL）内面：ナデ	含む	にぶい黄橙色	褐灰色	I	20−51
52	3号住居	㉒　東壁際	深鉢	口縁部	縄文（外面：LR）内面：ナデ　地紋の上から太く浅い沈線・沈線下に原体圧痕　口唇部に同一の原体圧痕	含む	にぶい黄橙色	明黄褐色	I	20−52
53	3号住居	㉒　東壁際	深鉢	口縁部	縄文（外面：LR）内面：ナデ　地紋の上から太く浅い沈線　沈線下に圧痕　口唇部に同一の原体圧痕	少量	にぶい黄橙色	明黄褐色	I	20−53
54	3号住居	㉙	深鉢	口縁部	縄文（外面：RL?）内面：ナデ　口縁：工具により口唇部に刻みを施す	なし	明黄褐色	明黄褐色	I	20−54
55	3号住居	①の石の下	深鉢	胴部	縄文（外面：RL）内面：ナデ　胎土：砂粒含みやや粗	なし	にぶい黄橙色	明黄褐色	I	20−55

第16図　3号竪穴住居跡出土遺物②



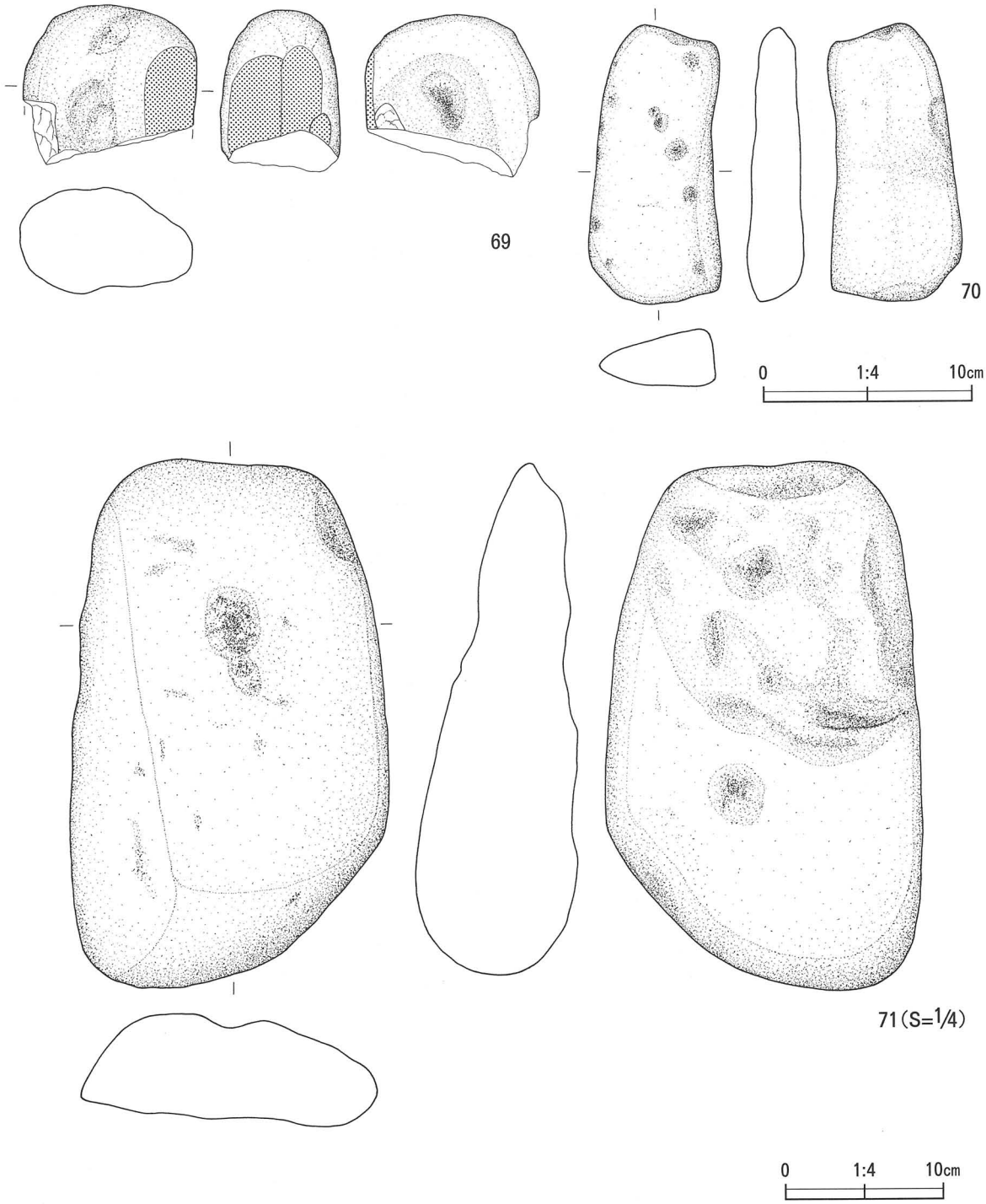
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
56	3号住居	北側壁上部	石鏃	4.0	1.3	0.5	1.7	頁岩	奥羽山脈		21−56
57	3号住居	西側埋土下	石篦	6.1	3.3	1.1	17.6	頁岩	奥羽山脈		21−57
58	3号住居	西側ベルト埋土	石篦	(5.6)	3.3	1.6	25.7	頁岩	奥羽山脈	欠損	21−58
59	3号住居	⑪	削掻器	5.2	2.2	0.6	5.5	頁岩	奥羽山脈		21−59
60	3号住居	北西エリア埋土	削掻器	(3.1)	2.7	0.6	6.0	頁岩	奥羽山脈	欠損	21−60
61	3号住居	南西エリア埋土	削掻器	(3.2)	1.9	0.5	2.2	凝灰岩	奥羽山脈	欠損	21−61
62	3号住居	西側ベルト埋下	削掻器	3.5	3.0	0.9	13.5	頁岩	奥羽山脈		21−62
63	3号住居	南西エリア埋土	剥片	(3.0)	3.2	0.9	9.1	頁岩	奥羽山脈	欠損	21−63

第17図　3号竪穴住居跡出土遺物③



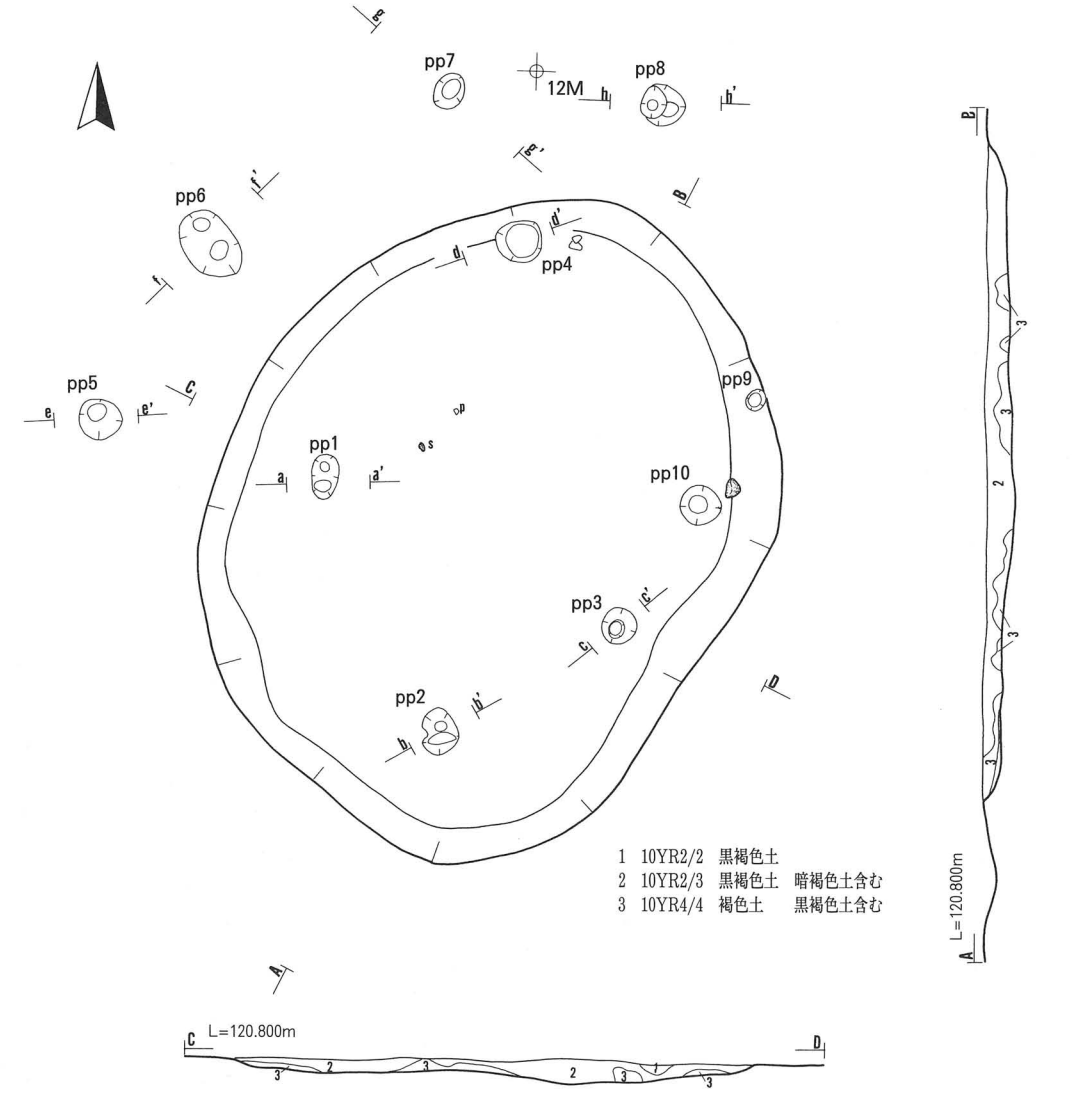
	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
64	3号住居	南西エリア埋土	剥片	2.2	4.6	0.9	5.5	頁岩	奥羽山脈	Rフレ	21−64
65	3号住居	埋土	剥片	4.6	2.7	1.6	17.8	頁岩	奥羽山脈	Rフレ	21−65
66	3号住居	⑩	剥片	6.3	3.9	1.6	35.8	頁岩	奥羽山脈	Uフレ	21−66
67	3号住居	南西エリア埋土	磨石	13.5	13.0	7.1	1750.0	石英安山岩	奥羽山脈		21−67
68	3号住居	南西エリア埋土	磨石	12.6	7.6	5.4	760.0	石英安山岩	奥羽山脈		21−68

第18図　3号竪穴住居跡出土遺物④

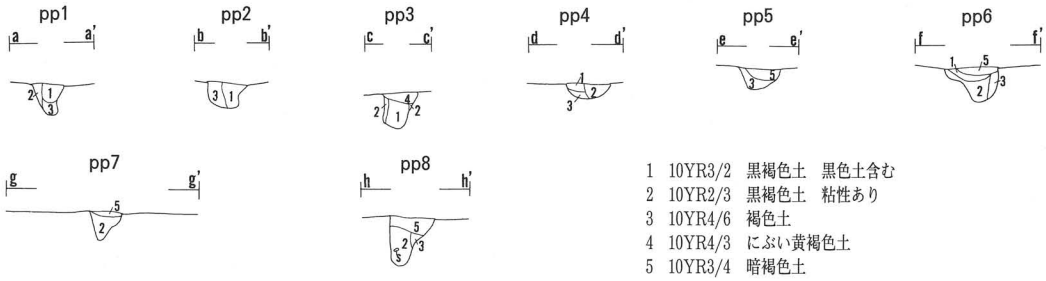


	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
69	3号住居	⑰	磨石	(7.0)	8.3	5.0	490.0	石英安山岩	奥羽山脈	兼凹石	21−69
70	3号住居	⑦	石台	13.4	6.4	2.8	365.0	石英安山岩	奥羽山脈	打痕有	21−70
71	3号住居	③	石台	33.7	20.1	10.1	8.5kg	石英安山岩	奥羽山脈	打痕有	21−71
72	3号住居	①	石台	39.0	31.0	9.0	20kg	石英安山岩	奥羽山脈	写真のみ掲載	21−72
73	3号住居	②	石台	47.0	32.0	12.0	26kg	石英安山岩	奥羽山脈	写真のみ掲載	21−73

第19図　3号竪穴住居跡出土遺物⑤



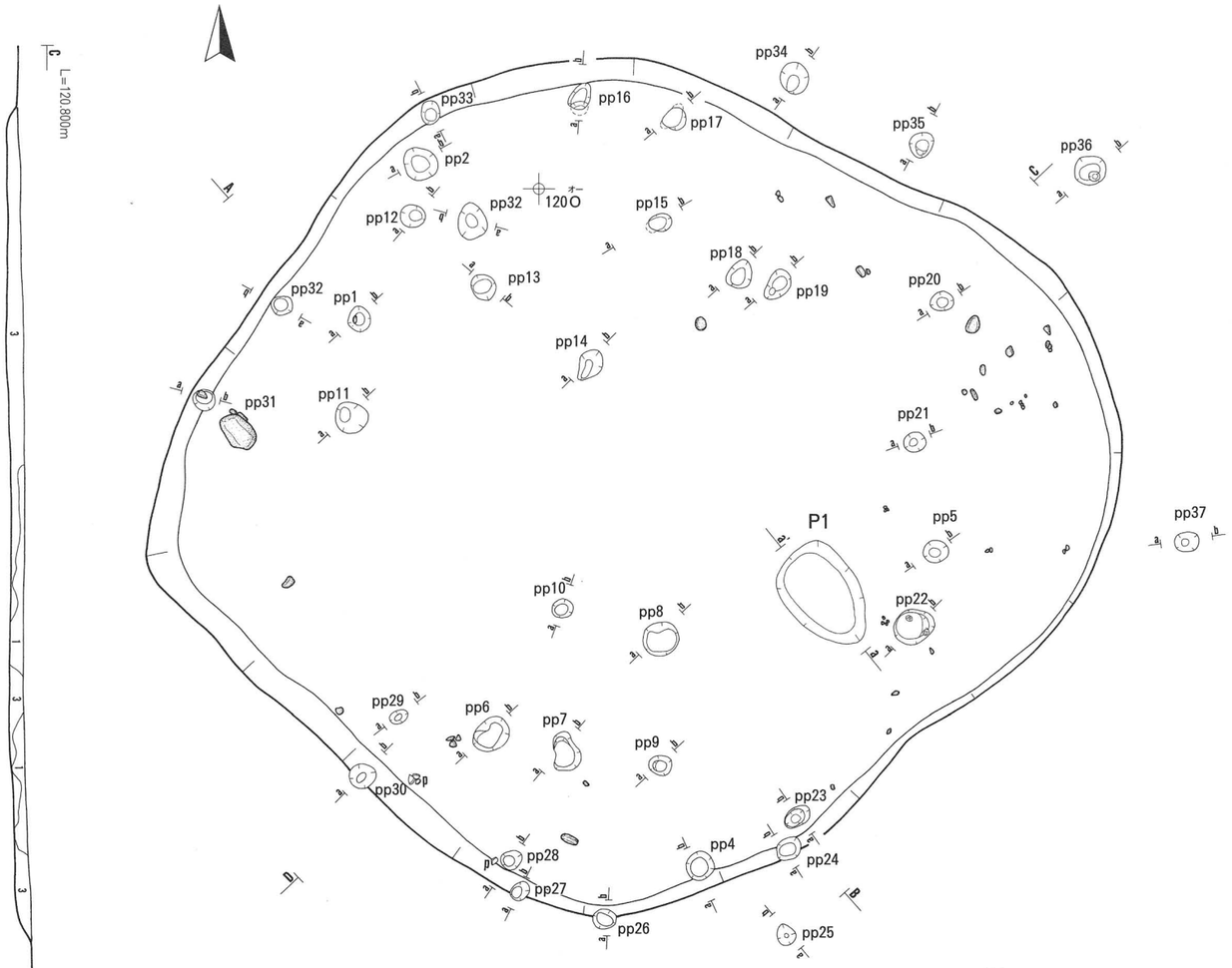
柱穴 L=120.900m



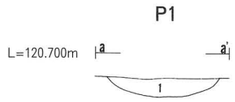
No.	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5	pp6	pp7	pp8	pp9	pp10
径・cm	30×18	21×22	25×24	16×13	29×27	51×36	25×20	30×29	15×12	28×26
深さ・cm	36.5	20.0	30.6	11.8	31.7	26.6	21.7	33.6	8.0	20.5

1 1:50 2m

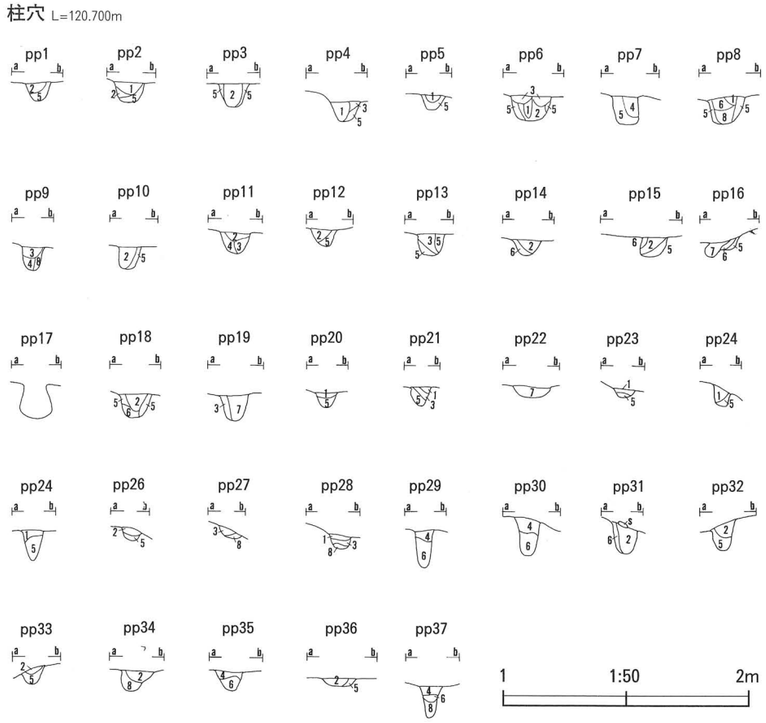
第20図 4号竪穴住居跡



1 10YR3/3 暗褐色土 黒色土の汚れ含む
2 10YR4/4 褐色土 暗褐色土含む
3 10YR4/6 褐色土 粘性あり



1 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒含む



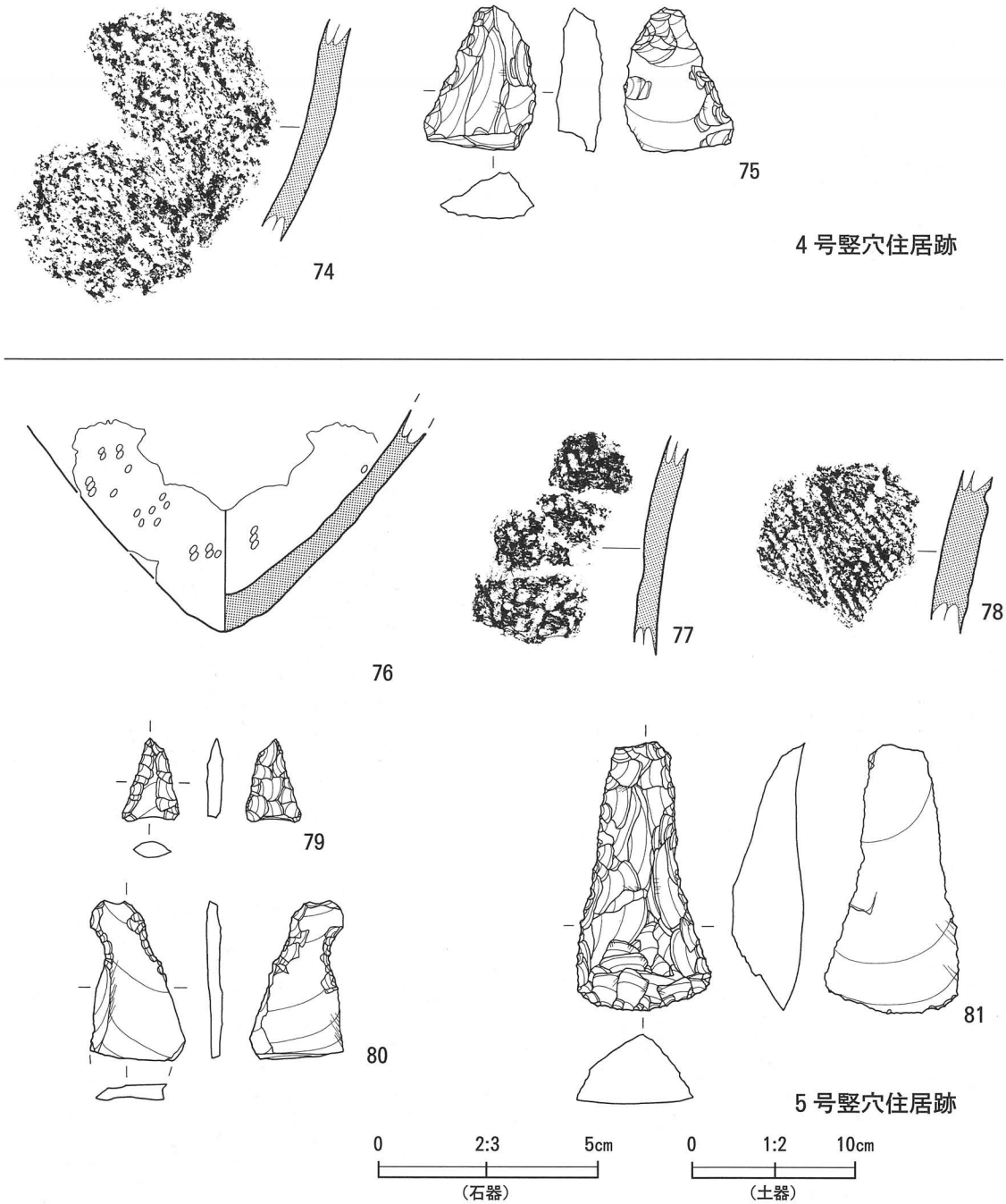
1 10YR2/2 黒褐色土
2 10YR3/3 暗褐色土 黒色土含む
3 10YR4/6 褐色土と黒色土の混合土
4 10YR4/6 褐色土と暗褐色土の混合土
5 10YR4/6 褐色土 粘性・しまりあり
6 10YR3/2 暗褐色土 粘性あり
7 10YR3/2 暗褐色土 粘性なし
8 10YR5/6 黄褐色土

No.	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5	pp6	pp7	pp8	pp9	pp10	pp11	pp12	pp13	pp14	pp15	pp16
径・cm	22×19	29×17	30×24	25×23	21×19	32×25	32×18	30×29	19×16	18×15	28×24	21×19	23×19	28×24	18×15	24×16
深さ・cm	16.2	21.6	19.0	18.9	23.3	26.7	25.3	30.0	28.2	16.9	24.8	18.3	16.9	14.2	9.0	14.3

No.	pp17	pp18	pp19	pp20	pp21	pp22	pp23	pp24	pp25	pp26	pp27	pp28	pp29	pp30	pp31	pp32
径・cm	19×19	24×19	27×18	19×17	17×16	33×29	23×15	23×18	17×14	19×16	17×13	17×15	15×11	22×20	19×17	19×16
深さ・cm	32.2	20.7	28.0	24.2	13.9	11.1	31.2	30.9	25.1	14.8	14.9	16.0	31.7	32.7	28.9	28.7

No.	pp33	pp34	pp35	pp36	pp37
径・cm	19×16	26×23	21×19	25×23	21×17
深さ・cm	22.2	9.3	27.0	25.9	33.7

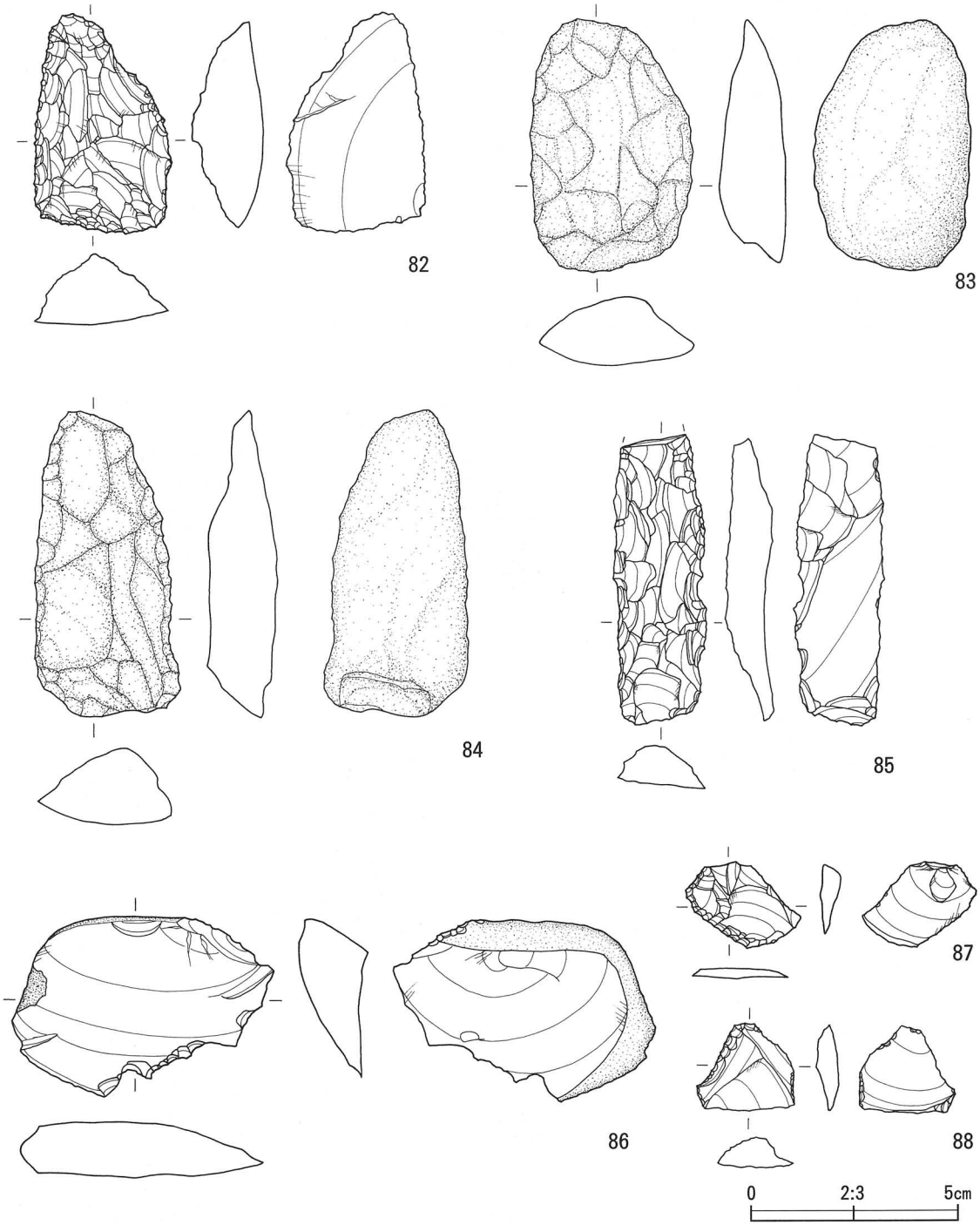
第 21 図 5 号竪穴住居跡



No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	繊維	色調 外面	色調 内面	分類	写真図版
74	4号住居	①	深鉢	胴部	縄文（外面：RL？）胎土：砂粒含み粗い	少量	黄橙～灰黄褐	にぶい黄橙色	Ⅰ	22－74
76	5住上面検出	Ⅱ層上	深鉢	胴部	縄文（外面：RL　内面：ナデ	微量	橙色	にぶい褐色	Ⅱ	22－76
77	5号住居	21	深鉢	胴部	縄文（外面：LR）内面：ナデ　胎土：砂粒含みやや粗	微量	明黄褐色	にぶい黄橙色	Ⅰ	22－77
78	5住上面検出	Ⅱ層上	深鉢	胴部	縄文（外面：LR縦回転・内面：ナデ）胎土：砂粒含むやや粗い	含む	橙色	灰黄褐色	Ⅳ	22－78

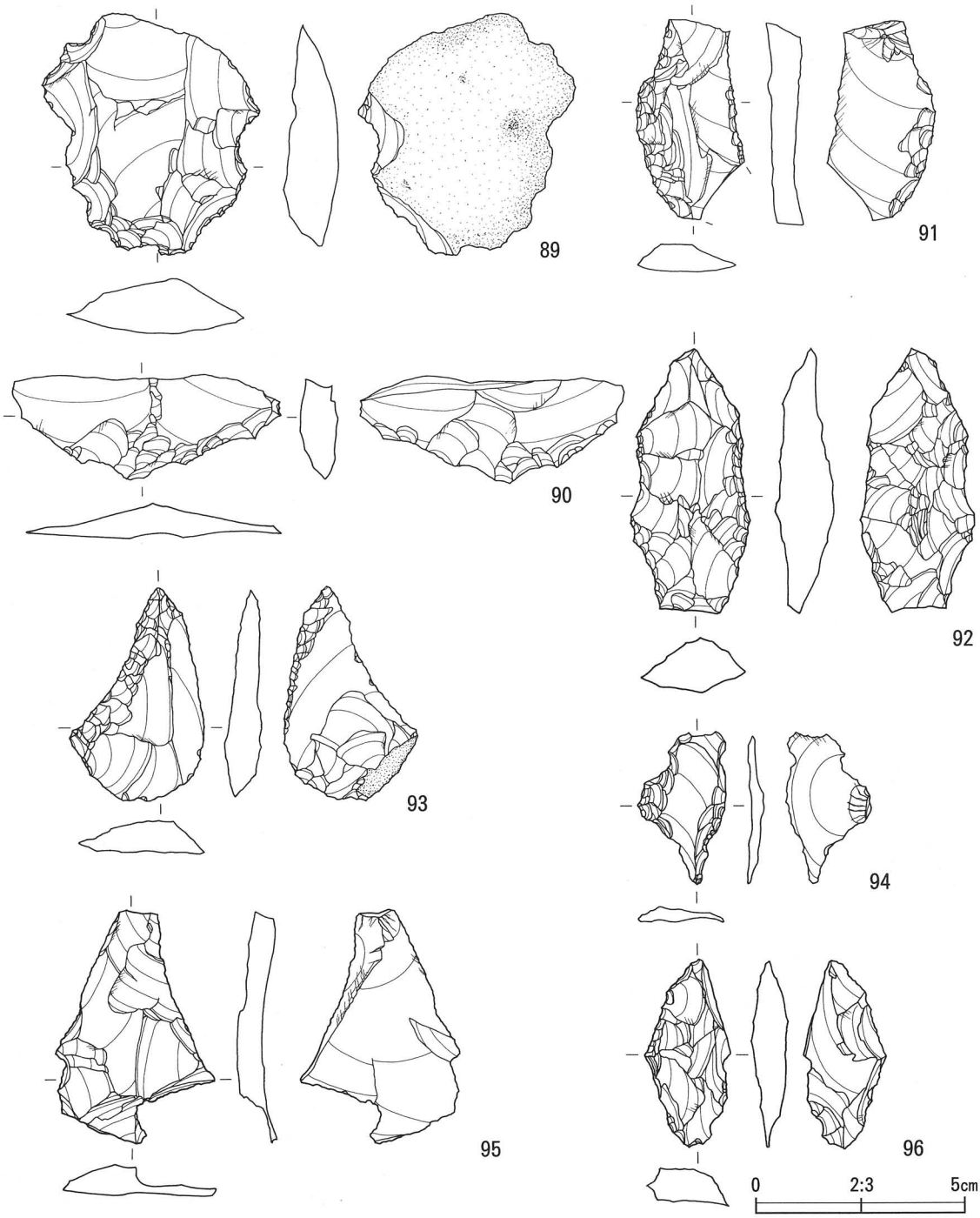
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
75	4号住居	⑤	削掻器	3.3	2.5	1.1	7.9	頁岩	奥羽山脈		22－75
79	5号住居	⑪	石鏃	1.8	1.2	0.4	0.8	頁岩	奥羽山脈		22－79
80	5号住居	埋土上部	石匙	(3.5)	2.1	0.4	3.1	頁岩	奥羽山脈	欠損	22－80
81	5号住居	②	石篦	6.1	3.0	1.6	20.6	頁岩	奥羽山脈		22－81

第22図　4・5号竪穴住居跡出土遺物①



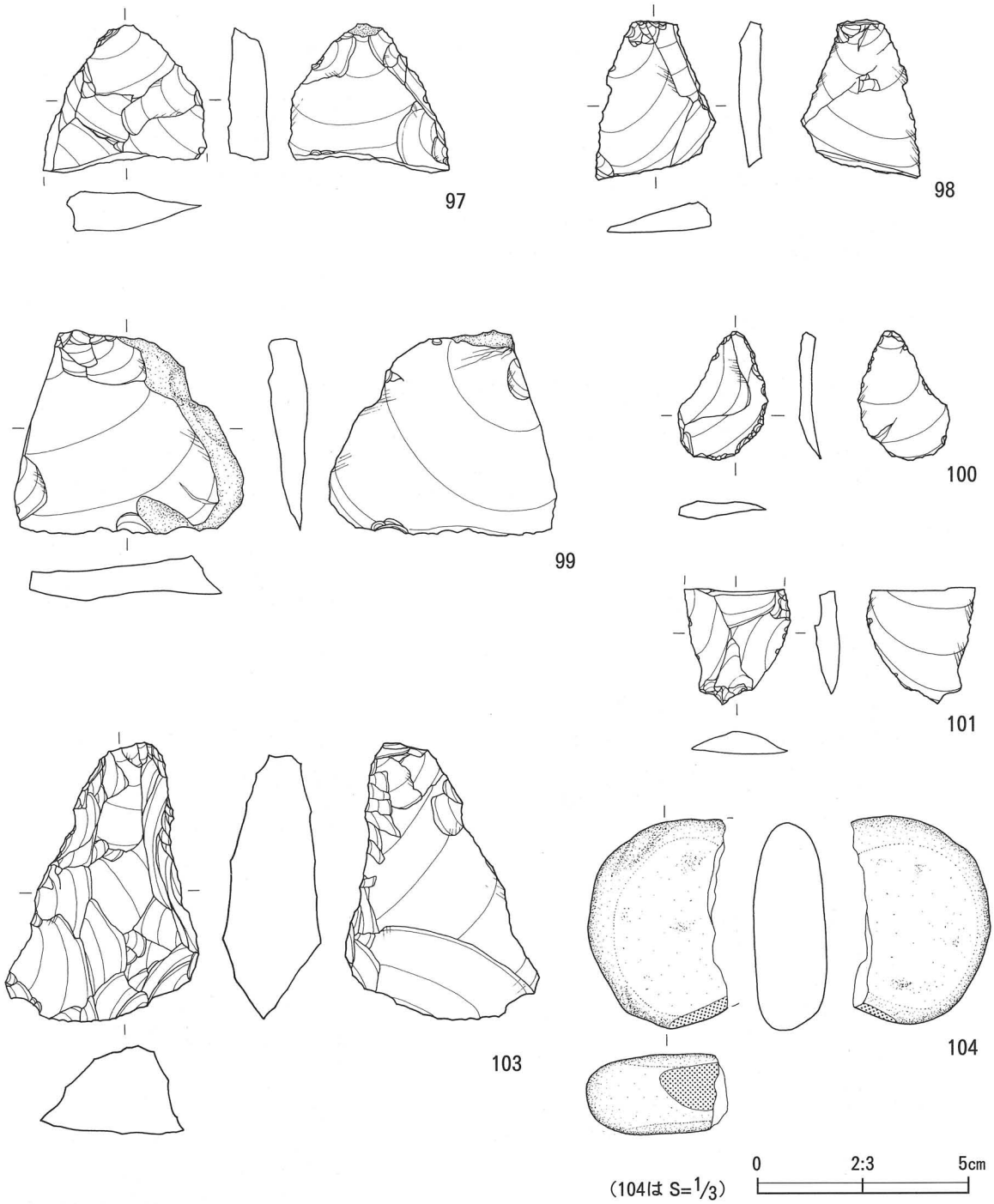
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
82	5号住居	⑨	石篦	5.2	3.3	1.7	20.9	頁岩	奥羽山脈		23－82
83	5号住居	③	石篦	6.1	3.7	1.6	42.3	ホルンフェルス	北上山地	表面摩滅著しい	23－83
84	5号住居	埋土下	石篦	7.3	3.6	1.9	50.6	ホルンフェルス	北上山地	表面摩滅著しい	23－84
85	5号住居	⑤	削掻器	(7.0)	2.2	1.1	15.7	頁岩	奥羽山脈	欠損	23－85
86	5号住居	⑥	削掻器	4.3	6.2	1.6	38.9	頁岩	奥羽山脈	ノッチ状加工あり	23－86
87	5号住居	⑫	削掻器	2.6	1.7	0.5	2.0	頁岩	奥羽山脈	一辺に細かな刃部調整	23－87
88	5号住居	埋土下	削掻器	2.1	2.3	0.6	2.5	頁岩	奥羽山脈		23－88

第23図　5号竪穴住居跡出土遺物②



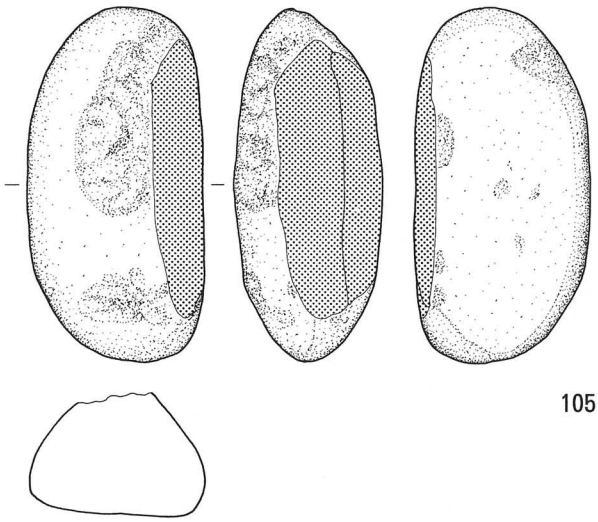
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
89	5号住居	埋土下	削掻器	5.8	5.2	1.3	37.7	頁岩	奥羽山脈	ノッチ状加工あり	23−89
90	5号住居	埋土下	削掻器	2.6	6.4	0.9	11.3	頁岩	奥羽山脈		23−90
91	5号住居	埋土上部	削掻器	4.7	2.4	0.7	9.2	頁岩	奥羽山脈	欠損	23−91
92	5号住居	埋土上部	削掻器	6.3	2.7	1.2	19.9	頁岩	奥羽山脈	両面に深い剥離にて調整	23−92
93	5号住居	埋土下	削掻器	5.1	3.2	10.8	10.8	頁岩	奥羽山脈	一辺から尖頭部に刃部調整	23−93
94	5号住居	⑯	剥片	3.6	2.0	2.1	2.4	頁岩	奥羽山脈	Rフレ	23−94
95	5号住居	⑲	剥片	5.4	3.8	9.2	9.2	頁岩	奥羽山脈	Rフレ	23−95
96	5号住居	埋土下	剥片	4.5	2.0	6.1	6.1	頁岩	奥羽山脈	Rフレ	23−96

第24図　5号竪穴住居跡出土遺物③

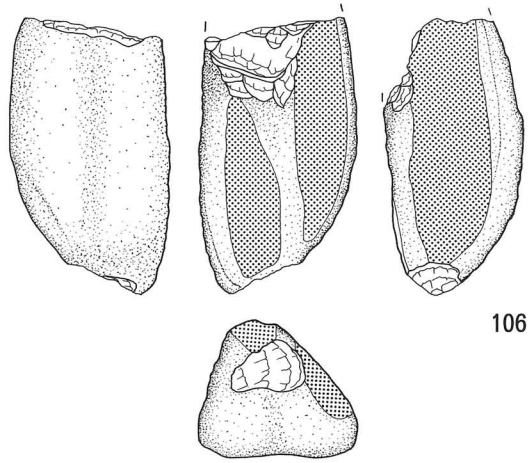


No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
97	5号住居	埋土下	剥片	(3.5)	3.8	1.0	12.0	頁岩	奥羽山脈	Rフレ	24－ 97
98	5号住居	①	剥片	4.1	2.5	0.6	6.2	頁岩	奥羽山脈	Uフレ	24－ 98
99	5号住居	⑧	剥片	5.3	4.9	0.8	22.2	頁岩	奥羽山脈	Uフレ	24－ 99
100	5号住居	埋土上部	剥片	3.1	1.9	0.3	2.0	頁岩	奥羽山脈	Uフレ	24－100
101	5号住居	埋土上部	剥片	(2.8)	2.5	0.6	3.4	頁岩	奥羽山脈	Uフレ	24－101
102	5号住居	P－1埋土	チップ類	－	－	－	24.7	頁岩	奥羽山脈	写真のみ掲載	24－102
103	5号住居	床面	打製石斧	6.6	4.6	2.2	51.5	頁岩	奥羽山脈	欠損	24－103
104	5号住居	埋土下	磨石	9.7	(6.0)	3.5	35.0	石英安山岩	奥羽山脈	欠損	24－104

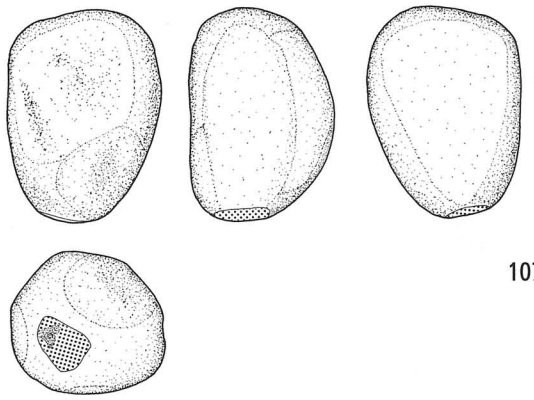
第25図　5号竪穴住居跡出土遺物④



105



106

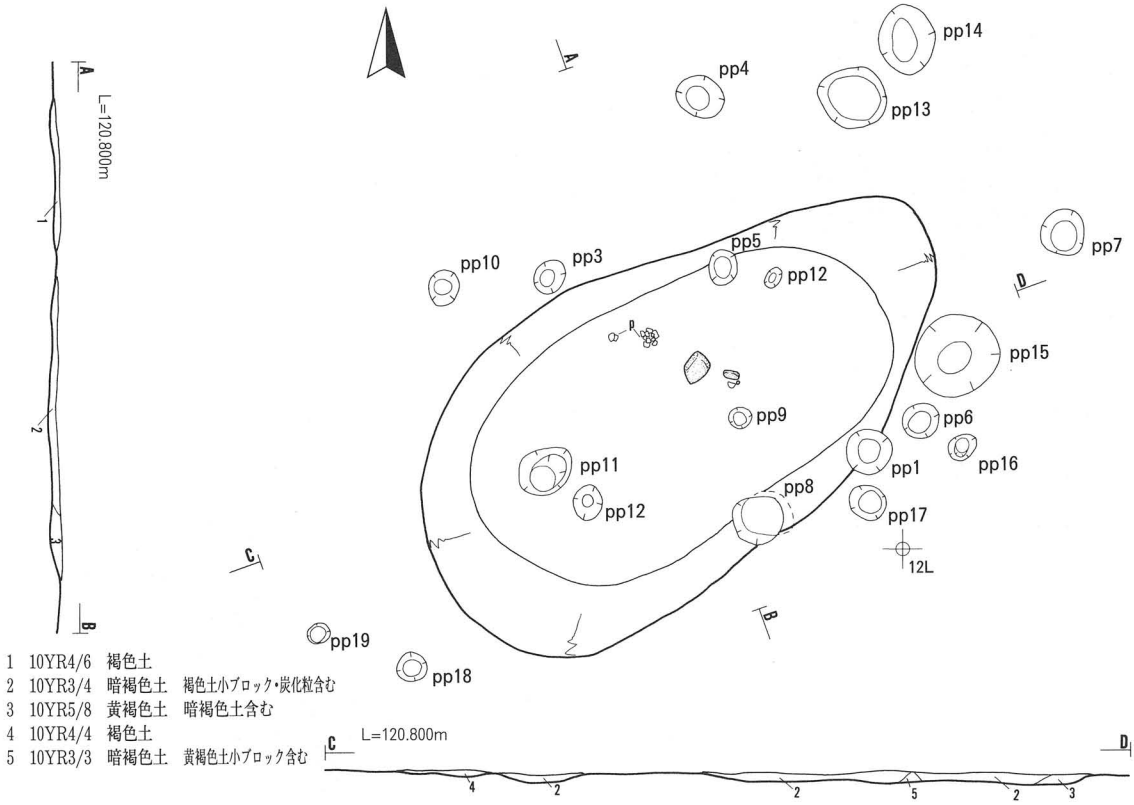


107

0 1:3 10cm

No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
105	5号住居	⑳	磨石	14.2	6.1	5.0	710.0	石英斑岩	奥羽山脈	焼成による表面破損	24−105
106	5号住居	埋土下	磨石	(11.0)	6.3	5.6	510.0	緑色凝灰岩	奥羽山脈	欠損	24−106
107	5号住居	⑦	磨石	12.7	9.4	8.5	1490.0	石英安山岩	奥羽山脈		24−107

第26図　5号竪穴住居跡出土遺物⑤



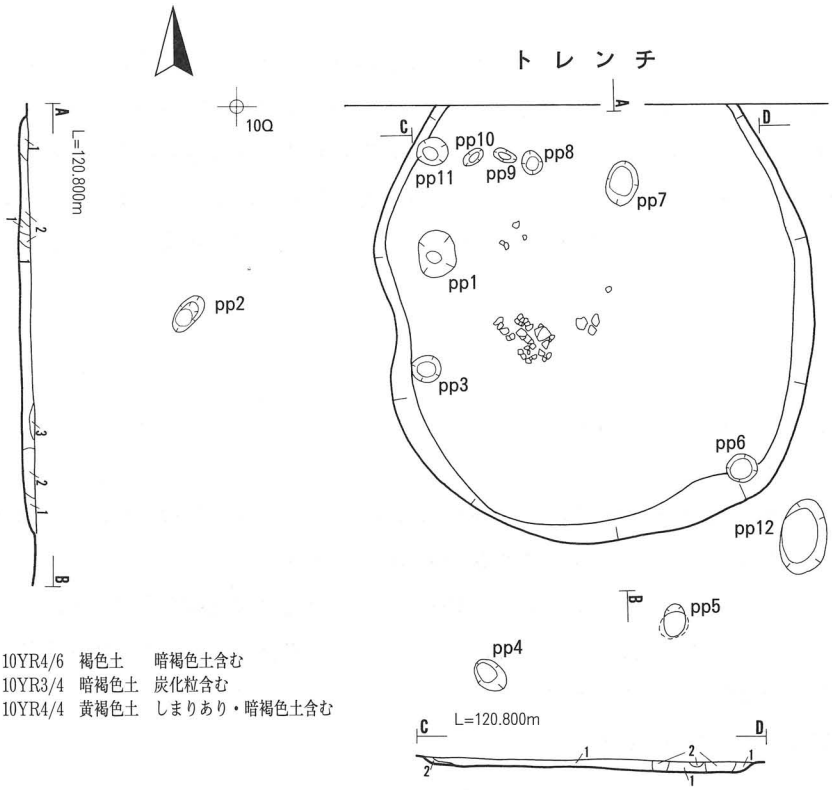
No.	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5	pp6	pp7	pp8	pp9	pp10	pp11	pp12
径・cm	30×30	25×20	24×19	33×28	24×19	25×23	31×29	35×33	16×9	16×9	21×19	50×31
深さ・cm	15.5	14.1	14.8	14.8	15.0	19.7	17.4	14.5	18.0	8.4	21.4	7.0

0 1:50 2m

0 1:2 5cm

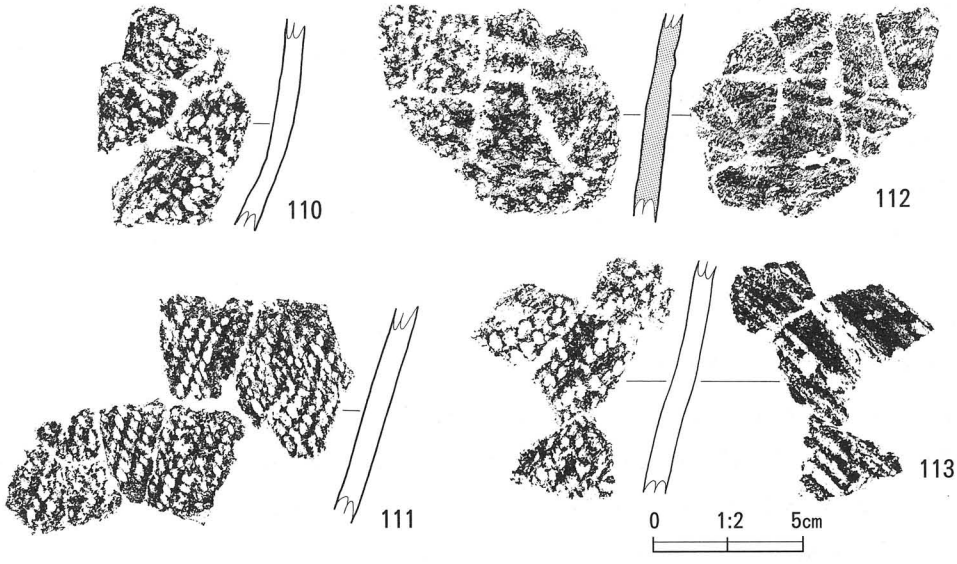
No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	繊維	色調 外面	色調 内面	分類	写真図版
108	6号住居	床面一括	深鉢	胴部	縄文（外面：RL？）内面：ナデ　胎土：砂粒含む	微量	にぶい黄橙色	灰黄褐色	Ⅰ	25－108
109	6号住居	床面一括	深鉢	胴下～底部	縄文（外面：LR）内面：ナデ　胎土：砂粒含みやや粗い	少量	黄橙色	黄橙色	Ⅱ	25－109

第27図　6号竪穴住居跡・出土遺物



No.	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5	pp6	pp7	pp8	pp9	pp10	pp11	pp12
径・cm	32×26	28×14	19×18	24×17	22×15	20×19	30×21	16×14	16×9	16×9	21×19	50×31
深さ・cm	24.0	9.9	9.4	11.5	23.5	15.9	17.4	14.5	18.0	8.4	21.4	7.0

0 1:50 2m



No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	繊維	色調 外面	色調 内面	分類	写真図版
110	7号住居	床面一括	深鉢	胴部	縄文（外面：LR）内面：ナデ　胎土：砂粒含む	なし	灰褐色	灰黄褐色	Ⅰ	25－110
111	7号住居	床面一括	深鉢	胴部	縄文（外面：LR）炭化物付着　内面：ナデ　胎土：砂粒含みやや粗	なし	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	Ⅰ	25－111
112	7号住居	床面一括	深鉢	胴部	縄文（外面：LR？・内面：貝殻条痕）胎土：砂粒含み粗い	含む	明黄褐色	にぶい黄橙色	Ⅲ	25－112
113	7号住居	床面一括	深鉢	胴部	縄文（外面：LR）炭化物付着　内面：貝殻条痕　胎土：砂粒含みやや粗	なし	灰黄褐色	灰黄褐色	Ⅲ	25－113

第28図　7号竪穴住居跡・出土遺物

(2) 土坑

土坑は14基を登録した。分布域は調査区南半部に集中し、住居の分布域と重なる。住居跡との重複は見られず、住居跡の周辺に点在するような在り方を呈する。土坑の平面形は不整形のものが多く、深さも46～10cmと浅い。深さについてはⅠ層の撹乱が激しい為上部を剥ぎ取られている部分もあると思われる。時期としては出土遺物より縄文時代と考えられ、7号土坑からは尖底部の破片が出土している。3・6・7・9・10・12・13・14号土坑内には小ピットが検出されたが、いずれも深さは5cm以内と浅いものである為、副穴と断定するにいたらなかった。

1号土坑（第29図、写真図版9）

＜位置＞　12H区、2号住居の西側約2mに位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

＜形状・規模＞　開口部径103×101cm・底部径106×100cm・深さ45cmで、平面形は不整円形、断面形はビーカー状を呈する。底面は平坦で、壁は開口部よりやや外反気味にたちあがる。

＜埋土＞　暗褐色土と褐色土を主体とする5層からなる。暗褐色土には微量に炭化物が含まれる。

＜出土遺物＞　褐色土中より磨耗の著しい土器片が数点出土した。114は繊維を含み胎土は砂粒を混入し粗い。外面にＬＲ縄文を施し、内面はナデ調整されている。（第31図、写真図版26）

＜時期＞　出土遺物より縄文時代のものと思われる。

2号土坑（第29図、写真図版9）

＜位置＞　13N区北西側に位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

＜形状・規模＞　開口部径105×100cm・底部径55×60cm・深さ26cmで、平面形は不整円形、断面形はⅢ形を呈する。底面はゆるやかに傾斜し立ちあがる。

＜埋土＞　黒褐色土と暗褐色土を主体とする3層からなる。

＜出土遺物＞　出土してない。

＜時期＞　時期不明。

3号土坑（第29図、写真図版9）

＜位置＞　13M区の北東側に位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で4号土坑に切られた状態で検出した。

＜形状・規模＞　開口部径（80）×88cm・底部径53×65cm・深さ30cm、平面形は不整楕円形、断面形はⅢ形を呈する。底面は浅い凹凸があり、壁はゆるやかに立ちあがってゆく。

＜埋土＞　暗褐色土と褐色土を主体とする。

＜出土遺物＞　埋土底部より細かく砕けた土器片と石器が出土した。115・116は上部が欠損している削掻器である。117は刃部が欠損している打製石斧である。118は左側辺に2面磨面をもつ磨石である。（第31図、写真図版26）

＜時期＞　出土遺物より縄文時代のものと思われる。

4号土坑（第29図、写真図版9）

＜位置＞13M区の北東側に位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で3号土坑を切った状態で検出した。

＜形状・規模＞　開口部径（83）×46cm・底部径（64）×36cm・深さ17cm、平面形はだるま形、断面形は皿形を呈する。底面部は平坦でゆるやかに立ちあがってゆく。

＜埋土＞　暗褐色土の単層で上面に黄褐色土ブロックが含まれている。

＜出土遺物＞　出土していない。

＜時期＞　時期不明。

5号土坑（第29図、写真図版9）

＜位置＞　12J・12K区の北側にかけて位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

＜形状・規模＞　開口部径115×114cm・底部径102×57cm・深さ32cm、平面形は不整楕円形、断面形は皿形を呈する。底面は平坦で西側にゆるやかに立ちあがり、東側は外傾する。

＜埋土＞　上層は暗褐色土、下層は褐色土を主体とする5層からなる。

＜出土遺物＞　埋土底部より細かく砕けた土器片が出土した。119は繊維を含み外面はＬＲ縄文？、内面はナデ調整されている。内面に一部炭化物の付着がみられる。120は無茎の石鏃である。（第31図、写真図版26）

＜時期＞　出土遺物より縄文時代のものと思われる。

6号土坑（第29図、写真図版10）

＜位置＞　11L区の南西側に位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

＜形状・規模＞　開口部径128×111cm・底部径67×63cm・深さ46cm、平面形は不整円形、断面形は皿形を呈する。底面は平坦で壁はゆるやかに外傾する。西側と南東側壁面に土坑中央部に向かって斜めに掘られた副穴が2基検出された。

＜埋土＞　黄褐色土と暗褐色土を主体とする7層からなる。中層・下層に褐色土と黒色土をブロック状に含む埋土がある。

＜出土遺物＞　出土していない。

＜時期＞　時期不明。

7号土坑（第30図、写真図版10）

＜位置＞　13L・14M区の南側にかけて位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

＜形状・規模＞　開口部径242×188cm・底部径224×159cm・深さ22cm、平面形は不整楕円形、断面形は皿形を呈する。底面はゆるやかに傾斜してたちあがってゆく。

＜埋土＞　暗褐色土と褐色土の2層からなる。

＜出土遺物＞　土坑北側中層より土器片が出土した。121は尖底部の破片である。明黄褐色から灰褐色を呈し、胎土には繊維の混入は見られない。外面に僅かにＲＬ縄文？が施され、内面はナデ調整されている。123・

124 は他の土器片に比べ砂粒が少なく内面は黄橙色、外面はにぶい黄橙色と色調も似ており、同一個体と思われる。125～127 は胎土に砂粒が含まれ粗い。128 は磨石である。（第 32 図、写真図版 26）
＜時期＞　出土遺物より縄文時代早期末葉から前期前葉のものと思われる。

8 号土坑（第 30 図、写真図版 10）
＜位置＞　10Ｉ区の北東側に位置する。
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で検出された。
＜形状・規模＞　開口部径 59×56cm・底部径 53×50cm・深さ 34cm、平面形は不整円形、断面形はビーカー形を呈する。底面はほぼ平坦で壁は直立する。
＜埋土＞　暗褐色土と褐色土を主体とする 5 層からなる。
＜出土遺物＞　埋土中より細かく破砕した縄文土器が出土した。
＜時期＞　出土遺物より縄文時代のものと思われる。

9 号土坑（第 30 図、写真図版 10）
＜位置＞　6Ｈ・6Ｉ区にかけて位置する。
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で検出された。
＜形状・規模＞　開口部径 84×80cm・底部径 85×45cm・深さ 40cm、平面形は不整楕円形、断面形は皿形を呈する。底面は凹凸があり壁は外傾する。
＜埋土＞　上層は暗褐色土、下層は褐色土を主体とする 4 層からなる。上面に黄褐色土ブロックを含む。
＜出土遺物＞　出土していない。
＜時期＞　時期不明。

10 号土坑（第 30 図、写真図版 11）
＜位置＞　16Ｋ区の北西側に位置する。
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で検出された。
＜形状・規模＞　開口部径 60×57cm・底部径 28×20cm・深さ 19cm、平面形は円形、断面形は皿形を呈する。底面は平坦でゆるやかにたちあがる。底面部北西側の隅に 9×7cm・深さ 5cm の副穴？が 1 基検出された。
＜埋土＞　暗褐色土と褐色土を主体とする 4 層からなる。上面に木根痕が入ってくる。
＜出土遺物＞　出土してない。
＜時期＞　時期不明。

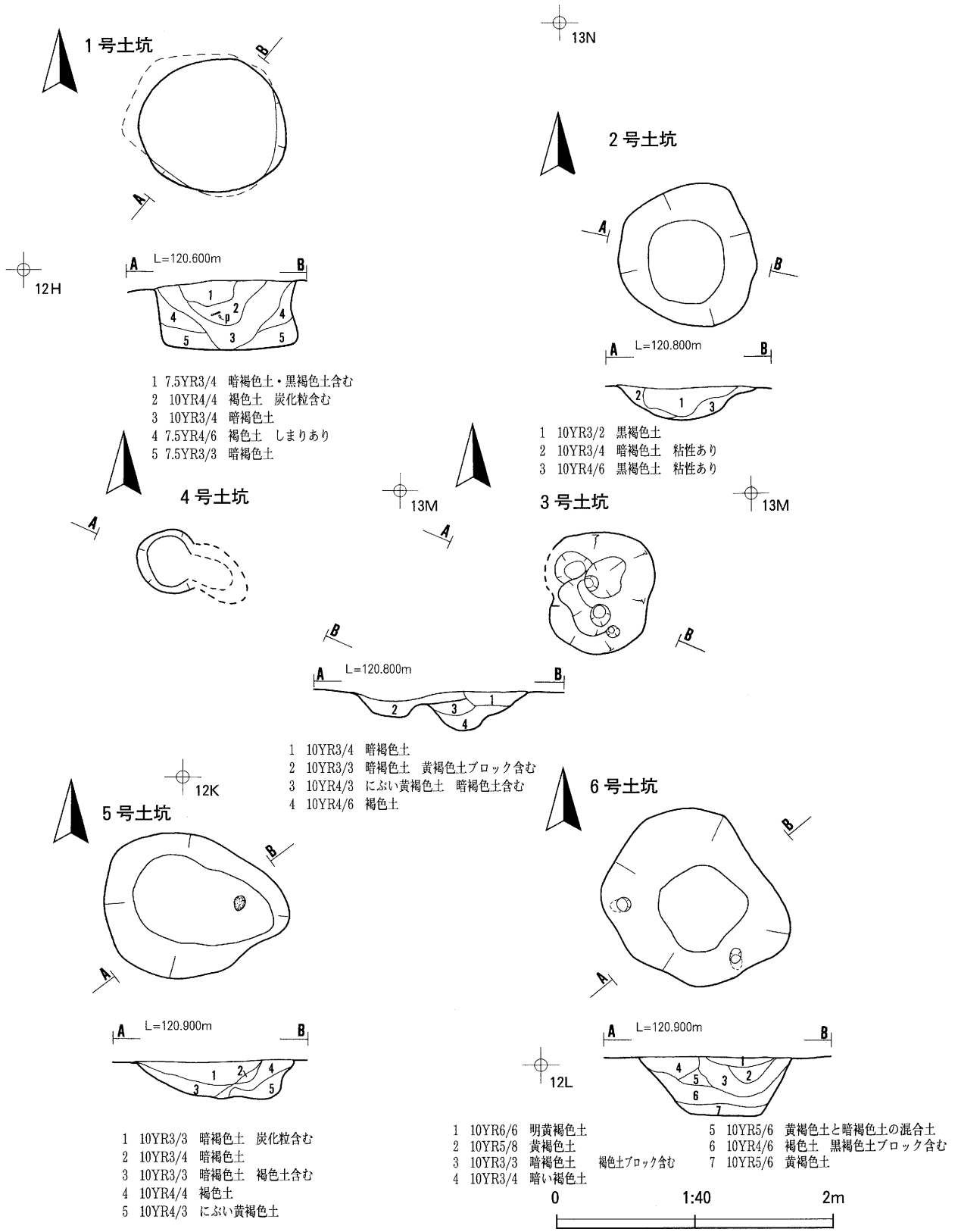
11 号土坑（第 30 図、写真図版 11）
＜位置＞　14Ｋ・15Ｋ区の西側に位置する。
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で検出された。
＜形状・規模＞　開口部径 66×62cm・底部径 80×67cm・深さ 21cm、平面形は隅丸方形、断面形はフラスコ形を呈する。底面は平坦で壁は内傾する。
＜埋土＞　暗褐色土と褐色土の 2 層からなる。褐色土には微量であるが炭化粒が含まれる。

＜出土遺物＞　129 は繊維が混入し外面にＬＲ縄文、内面はナデられている。胎土は非常にもろく磨耗が著しい。130 も同様に磨耗が著しい土器片である。繊維の混入は見られなかった。131 は基部が欠損している石鏃である。（第 32 図、写真図版 26）
＜時期＞　出土遺物より縄文時代前期前葉のものと思われる。

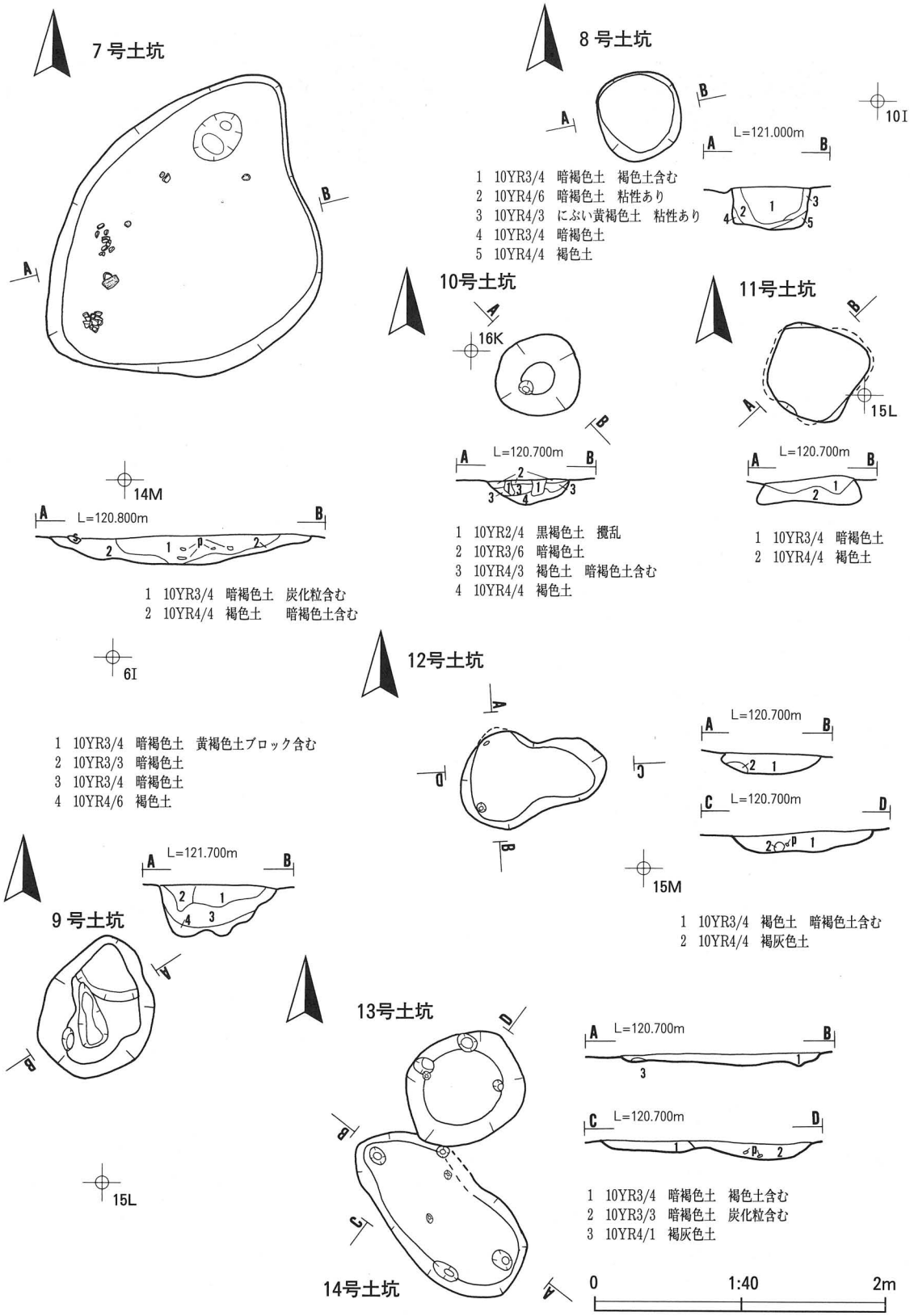
12 号土坑（第 30 図、写真図版 11）
＜位置＞　14Ｇ区の南東側に位置する。
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で検出された。
＜形状・規模＞　開口部径 99×67cm・底部径 84×40cm・深さ 18cm、平面形はだるま形、断面形は皿形を呈する。底面はほぼ平坦で壁は北西側が一部内傾するが、その他は外傾してたちあがる。
＜埋土＞　暗褐色土を含む褐色土を主体とする。下層に褐灰土ブロック含む。
＜出土遺物＞　埋土下層より細かく砕けた土器片が出土した。
＜時期＞　出土遺物より縄文時代のものと思われる。

13 号土坑（第 30 図、写真図版 11）
＜位置＞　14Ｌ区の南東側に位置する。
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で 14 号土坑を切った状態で検出された。
＜形状・規模＞　開口部径 82×77cm・底部径 57×59cm・深さ 15cm、平面形は隅丸方形、断面形は皿形を呈する。底面はほぼ平坦でゆるやかに立ちあがる。底面の隅と壁面に 3 基副穴を検出した。
＜埋土＞　炭化粒を含む暗褐色土の単層である。
＜出土遺物＞　底面より土器片が出土した。132 は胎土が粗く磨耗が著しい。繊維は少量ではあるが含まれ、外面にＲＬと思われる縄文が見られる。（第 32 図、写真図版 26）
＜時期＞　出土遺物より縄文時代前期前葉のものと思われる。

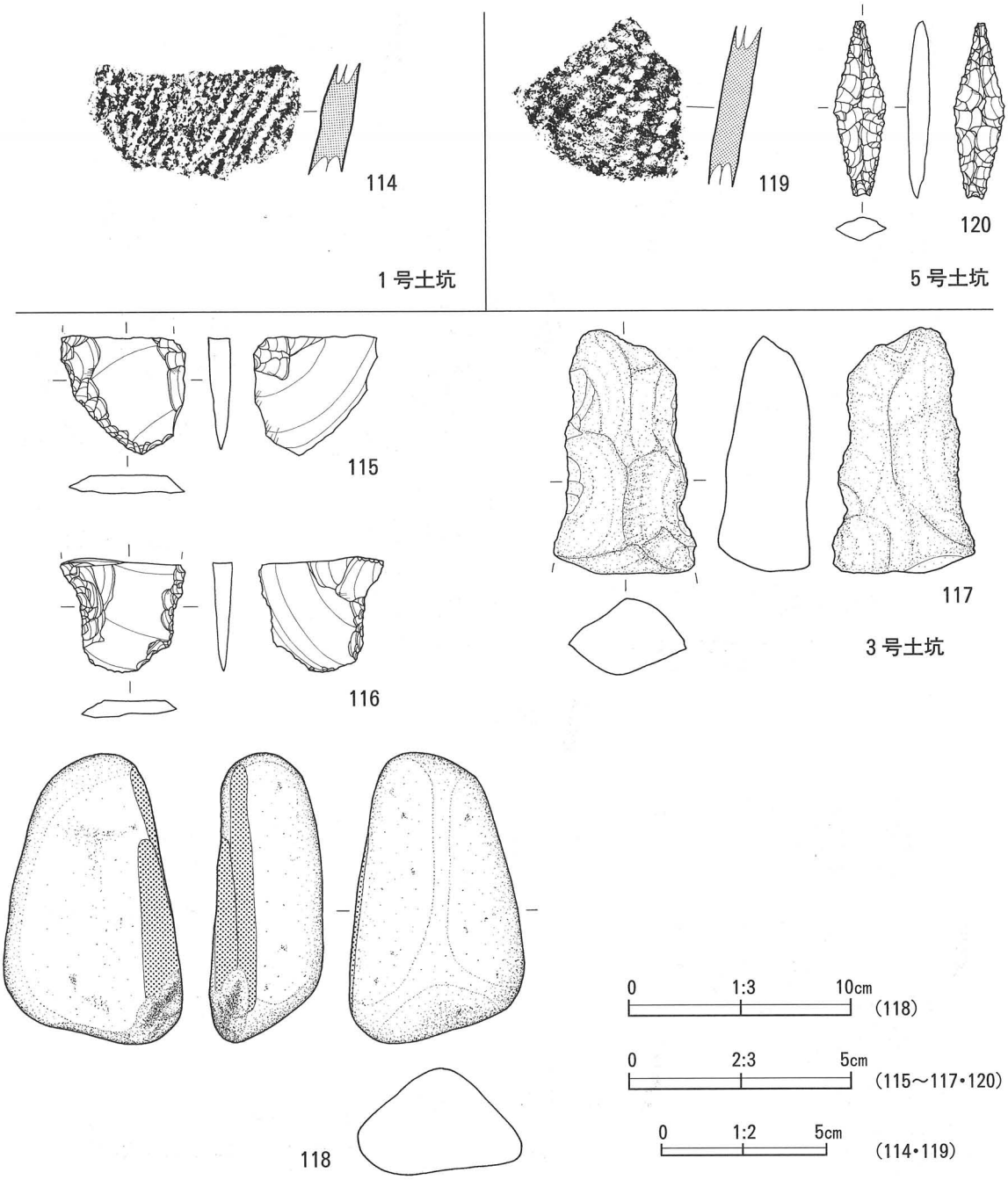
14 号土坑（第 30 図、写真図版 11）
＜位置＞　14Ｌ・15Ｌ区の東側に位置する。
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で 13 号土坑に切られた状態で検出された。
＜形状・規模＞　開口部径 138×73cm・底部径 133×50cm・深さ 10cm、平面形は不整長楕円形、断面形は皿形を呈する。底面はほぼ平坦でゆるやかに外傾する。底面の隅と壁の立ち上がり部分に 4 基副穴？を検出した。
＜埋土＞　暗褐色土を主体とする。下層に褐灰土ブロックを含む。
＜出土遺物＞　底面より磨耗が著しい土器の細片が出土した。133 は 0 段多条のＲＬ縄文が施される。胎土は砂粒を含み密であり、繊維の混入はみられなかった。（第 32 図、写真図版 26）
＜時期＞　出土遺物より縄文時代のものと思われる。


1号土坑
12H
L=120.600m
1 7.5YR3/4 暗褐色土・黒褐色土含む
2 10YR4/4 褐色土 炭化粒含む
3 10YR3/4 暗褐色土
4 7.5YR4/6 褐色土 しまりあり
5 7.5YR3/3 暗褐色土
13N
2号土坑
L=120.800m
1 10YR3/2 黒褐色土
2 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり
3 10YR4/6 黒褐色土 粘性あり
4号土坑
13M
3号土坑
13M
L=120.800m
1 10YR3/4 暗褐色土
2 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土ブロック含む
3 10YR4/3 にぶい黄褐色土 暗褐色土含む
4 10YR4/6 褐色土
12K
5号土坑
L=120.900m
1 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒含む
2 10YR3/4 暗褐色土
3 10YR3/3 暗褐色土 褐色土含む
4 10YR4/4 褐色土
5 10YR4/3 にぶい黄褐色土
6号土坑
L=120.900m
12L
1 10YR6/6 明黄褐色土
2 10YR5/8 黄褐色土
3 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック含む
4 10YR3/4 暗い褐色土
5 10YR5/6 黄褐色土と暗褐色土の混合土
6 10YR4/6 褐色土 黒褐色土ブロック含む
7 10YR5/6 黄褐色土
0 1:40 2m

第29図 1～6号土坑


7号土坑
A
B
14M
L=120.800m
1 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒含む
2 10YR4/4 褐色土 暗褐色土含む
6I
8号土坑
10I
L=121.000m
1 10YR3/4 暗褐色土 褐色土含む
2 10YR4/6 暗褐色土 粘性あり
3 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性あり
4 10YR3/4 暗褐色土
5 10YR4/4 褐色土
10号土坑
16K
L=120.700m
1 10YR2/4 黒褐色土 攪乱
2 10YR3/6 暗褐色土
3 10YR4/3 褐色土 暗褐色土含む
4 10YR4/4 褐色土
11号土坑
15L
L=120.700m
1 10YR3/4 暗褐色土
2 10YR4/4 褐色土
12号土坑
L=120.700m
C
D
15M
1 10YR3/4 褐色土 暗褐色土含む
2 10YR4/4 褐灰色土
1 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色土ブロック含む
2 10YR3/3 暗褐色土
3 10YR3/4 暗褐色土
4 10YR4/6 褐色土
9号土坑
L=121.700m
15L
13号土坑
14号土坑
L=120.700m
1 10YR3/4 暗褐色土 褐色土含む
2 10YR3/3 暗褐色土 炭化粒含む
3 10YR4/1 褐灰色土
0
1:40
2m

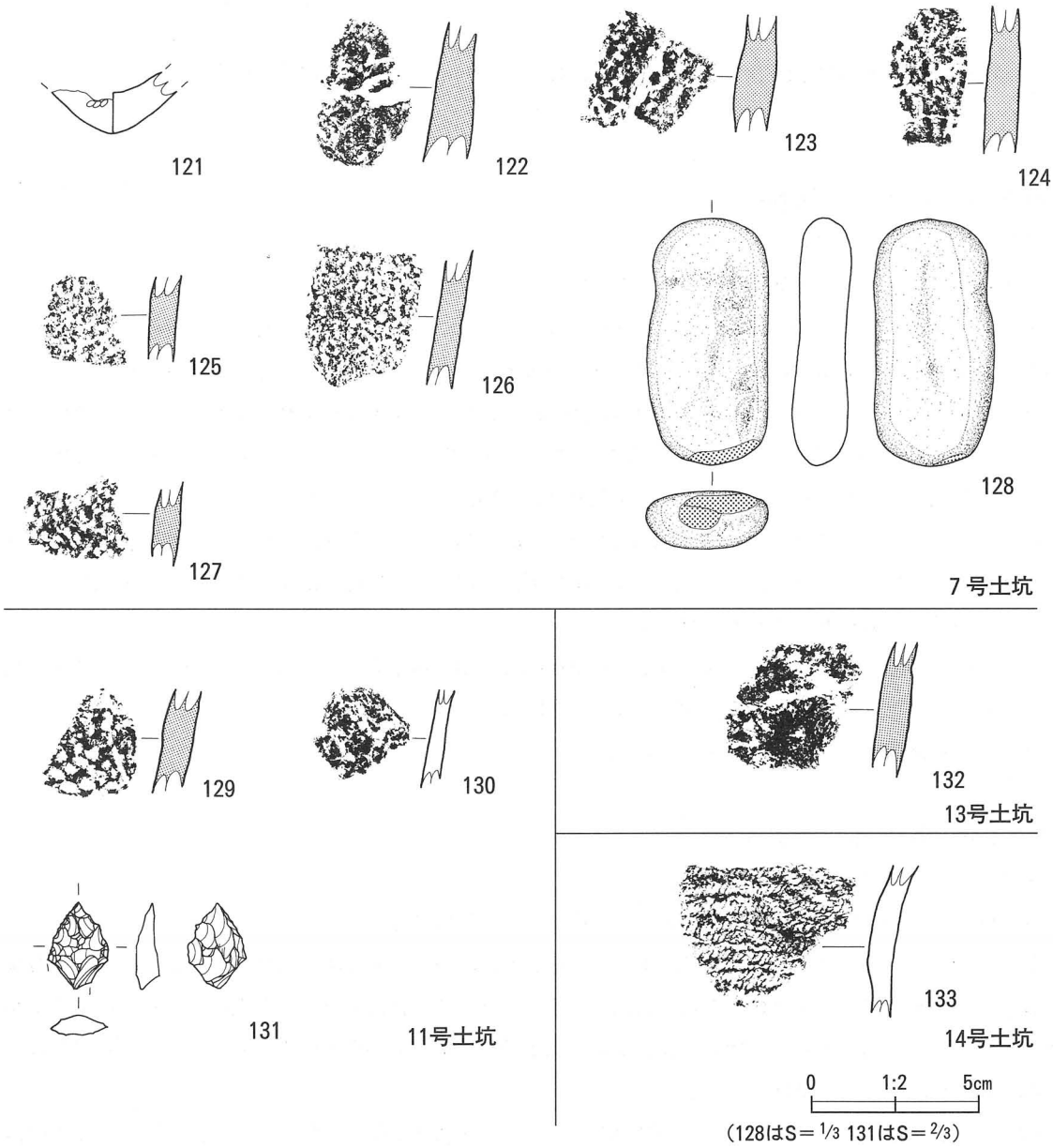
第30図 7～14号土坑



No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	繊維	色調 外面	色調 内面	分類	写真図版
114	1号土坑	埋土上部	深鉢	胴部	縄文（外面：LR）内面：ナデ	含む	明黄褐～褐灰	橙色	I	26－114
119	5号土坑	埋土	深鉢	胴部	縄文（外面：LR?）内面：炭水化物付着	少量	橙色	にぶい黄橙色	I	26－119

No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
115	3号土坑	北側埋土	削掻器	(2.6)	2.8	0.5	3.3	頁岩	奥羽山脈	欠損	26－115
116	3号土坑	南側埋土	削掻器	(3.2)	2.7	0.5	3.8	頁岩	奥羽山脈	欠損	26－116
117	3号土坑	南側埋土	打製石斧	(5.5)	3.3	2.1	32.6	ホルンフェルス	北上山脈	欠損，表面磨滅著しい	26－117
118	3号土坑	埋土	磨石	13.2	8.0	4.8	630.0	砂岩	奥羽山脈		26－118
120	3号土坑	埋土	石鏃	4.0	1.2	0.5	1.5	頁岩	奥羽山脈		26－120

第31図　1・3・5号土坑出土遺物



No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	繊維	色調 外面	色調 内面	分類	写真図版
121	7号土坑	埋土一括	深鉢	胴部	内面・外面：ナデ	なし	明黄褐色	褐灰色	I	26－121
122	7号土坑	南側埋土一括	深鉢	胴部	内面・外面：ナデ	含む	橙色	にぶい黄褐色	I	26－122
123	7号土坑	南側埋土一括	深鉢	胴部	縄文（外面：LR？）内面：ナデ　胎土：砂粒少ない	少量	黄橙色	にぶい黄褐色	I	26－123
124	7号土坑	南側埋土一括	深鉢	胴部	外面：磨耗著しい・内面：ナデ　胎土：砂粒少ない　61と同一個体	少量	黄橙色	にぶい黄褐色	I	26－124
125	7号土坑	北側埋土一括	深鉢	胴部	縄文（外面：RL）内面：ナデ　胎土：やや粗	少量	橙色	明黄褐色	I	26－125
126	7号土坑	北側埋土一括	深鉢	胴部	縄文（外面：RL？）内面：ナデ　胎土：やや粗	含む	明黄褐色	灰黄褐色	I	26－126
127	7号土坑	北側埋土一括	深鉢	胴部	縄文（外面：RL）内面：ナデ　胎土：砂粒少ない	少量	橙色	明黄褐色	I	26－127
129	11号土坑	埋土一括	深鉢	胴部	縄文（外面：RL）内面：ナデ　胎土：やや粗	少量	黄橙色	にぶい黄橙色	I	26－129
130	11号土坑	埋土	深鉢	胴部	内外面磨耗著しい	なし	橙色	橙色	I	26－130
132	13号土坑	埋土	深鉢	胴部	縄文（外面：RL？）内面：磨耗著しい　胎土：粗い	少量	橙色	褐灰色	I	26－132
133	14号土坑	埋土	深鉢	胴部	縄文（外面：0段多条RL・巻つけ？）内面：ナデ　胎土：砂粒含む・みっ	なし	明黄橙色	褐灰色	V	26－133

No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
128	7号土坑	埋土	磨石	11.1	5.5	2.6	235.0	石英安山岩	奥羽山脈		26－128
131	11号土坑	埋土下	石鏃	(1.9)	1.4	0.5	0.9	凝灰岩	奥羽山脈	基部欠損	26－131

第32図　7・11・13・14号土坑出土遺物

(3) 陥し穴

11基検出した。時期を決定する遺物の出土はなかったが、1～3号陥し穴の埋土上層には十和田中掫浮石が含まれている。

1号陥し穴（第33図、写真図版12）

＜位置＞　15J区の北側に位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で黒色土の広がりにより確認した。

＜形状・規模＞　規模は開口部径267×205cm・底部径195×106cm・深さ175cm、平面形は楕円形で長軸方向は北西―南東である。短軸の断面形は底部から80cm位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後ゆるやかに外傾するビーカー形である。長軸の断面形は開口部が僅かに広がる逆台形状を呈している。底部には深さ18～10cmの副穴が8基見られる。配置はほぼ4隅によるもの7基、中心に1基である。逆木痕を確認できたレベルは底部より110cm上部である。（写真図版12参照）

＜埋土＞　17層からなりレンズ状の自然堆積を呈する。全体的に粘性のある埋土で、上位は十和田中掫浮石の層を含む暗褐色土・黄褐色土を主体とし、中～下位は褐色・黄褐色土が主体で下位には炭化粒を含む層もある。底部まで掘り下げると水が湧いてくる。

＜出土遺物＞　埋土上位より削掻器1点と、調整痕のある剥片が1点出土した。出土層からみて埋土の堆積の際に入りこんだものと思われる。（第36図、写真図版27）

＜時期＞　堆積層からみて縄文時代のものと思われる。

2号陥し穴（第33図、写真図版12）

＜位置＞　14L区の北西側に位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で黒色土の広がりにより確認した。

＜形状・規模＞　規模は開口部径285×200cm・底部径195×80cm・深さ176cm、平面形は楕円形で長軸方向は北西―南東である。短軸の断面形は底部から95cm位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後ゆるやかに外傾するビーカー形である。長軸の断面形は開口部が僅かに広がる逆台形状を呈している。底部はほぼ平坦で副穴と思われる柱穴痕はみられなかった。

＜埋土＞　15層からなりレンズ状の自然堆積を呈する。全体的に粘性のある埋土で、上位は十和田中掫浮石の層を含む暗褐色土・黄褐色土を主体とし、中～下位は褐色・黄褐色土が主体である。底面付近は湧き水が著しい。

＜出土遺物＞　埋土上～中位より片面加工の石篦が2点出土した。1点は基部が欠損している。出土層からみて埋土の堆積の際に入りこんだものと思われる。（第36図、写真図版27）

＜時期＞　堆積層からみて縄文時代のものと思われる。

3号陥し穴（第33図、写真図版12）

＜位置＞　16H区の南東側に位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で黒色土の広がりにより確認した。

＜形状・規模＞　規模は開口部径310×160cm・底部径178×76cm・深さ190cm、平面形は長楕円形で長軸方向は北西―南東である。短軸の断面形は底部から90cm位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後ゆるやか

に外傾するビーカー形である。長軸の断面形は開口部の北西側が強く外傾する不整逆台形状を呈している。底部には深さ 30～15cm の副穴が 5 基みられる。配置はほぼ四隅によっている。上面からの逆木の確認はできなかった。

＜埋土＞　12 層からなりレンズ状の自然堆積を呈する。全体的に粘性のある埋土で、上位は十和田中掫浮石の層を含む暗褐色土・黄褐色土を主体とし、中～下位は褐色・黄褐色土が主体である。底部まで掘り下げると水が湧いてくる。

＜出土遺物＞　埋土上～中位より欠損した石鏃・削掻器が 5 点出土した。出土層位からみて、埋土の堆積の際に入り込んだものと思われる。（第 36 図、写真図版 27）

＜時期＞　検出面、堆積層からみて縄文時代のものと思われる。

4 号陥し穴（第 34 図、写真図版 13）

＜位置＞　12 J 区の北側に位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにより確認した。

＜形状・規模＞　規模は開口部径 293×50cm・底部径 292×10cm・深さ 100cm、平面形は溝形を呈し長軸方向は東―西である。短軸の断面形は底部から 65cm 位まで立ち上がり、開口部に向かって外傾するＹ字形である。長軸の断面形は両端底部が内傾するフラスコ型を呈し、底部は東側に傾斜気味であるがほぼ平坦である。両端での高低差は約 12cm である。

＜埋土＞　黄褐色土、暗褐色土を含む 5 層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。

＜出土遺物＞　出土していない。

＜時期＞　縄文時代のものと思われる。

5 号陥し穴（第 34 図、写真図版 13）

＜位置＞　9Ｆ区の北西側に位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりにより確認した。

＜形状・規模＞　規模は開口部径 293×50cm・底部径 292×10cm・深さ 100cm、平面形は溝形を呈し長軸方向は東―西である。短軸の断面形は底部から 80cm 位までほぼ垂直に立ち上がり、その後開口部に向かって外傾するＹ字形である。長軸の断面形は西側底部が内傾する不整台形型を呈し、底部は東側に傾斜気味であるがほぼ平坦である。両端での高低差は約 10cm である。

＜埋土＞　黄褐色土、黒褐色土を主体とする 5 層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。

＜出土遺物＞　出土していない。

＜時期＞　縄文時代のものと思われる。

6 号陥し穴（第 34 図、写真図版 13）

＜位置＞　10Ｈ・10Ｉ区の南側に位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにより確認した。

＜形状・規模＞　規模は開口部径 265×70cm・底部径 290×20cm・深さ 113cm、平面形は溝形を呈し長軸方向は東―西である。短軸の断面形は底部から 80cm 位までほぼ垂直に立ち上がり、その後開口部に向かっ

て外傾するＹ字形である。長軸の断面形は底部の両端が内傾する不整フラスコ形を呈している。底部はほぼ平坦で、東側に深さ 19cm の小ピットが１基ある。
＜埋土＞　暗褐色土、褐色土等９層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。
＜出土遺物＞　出土していない。
＜時期＞　縄文時代のものと思われる。

7 号陥し穴（第 34 図、写真図版 13）
＜位置＞　9Ｈ・9Ｉ区の南側に位置する。
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりにより確認した。
＜形状・規模＞　規模は開口部径 265×75cm・底部径 250×18cm・深さ 97cm、平面形は溝形を呈し長軸方向はほぼ東―西である。短軸の断面形は底部から 50cm 位までほぼ垂直に立ち上がり、その後開口部に向かって外傾するＹ字形である。長軸の断面形は西側底部が内傾する不整台形を呈し、底部は中央部が僅かに低くなるがほぼ平坦である。両端での高低差は約 10cm である。
＜埋土＞　暗褐色土、褐色土を主体とする５層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。
＜出土遺物＞　出土していない。
＜時期＞　縄文時代のものと思われる。

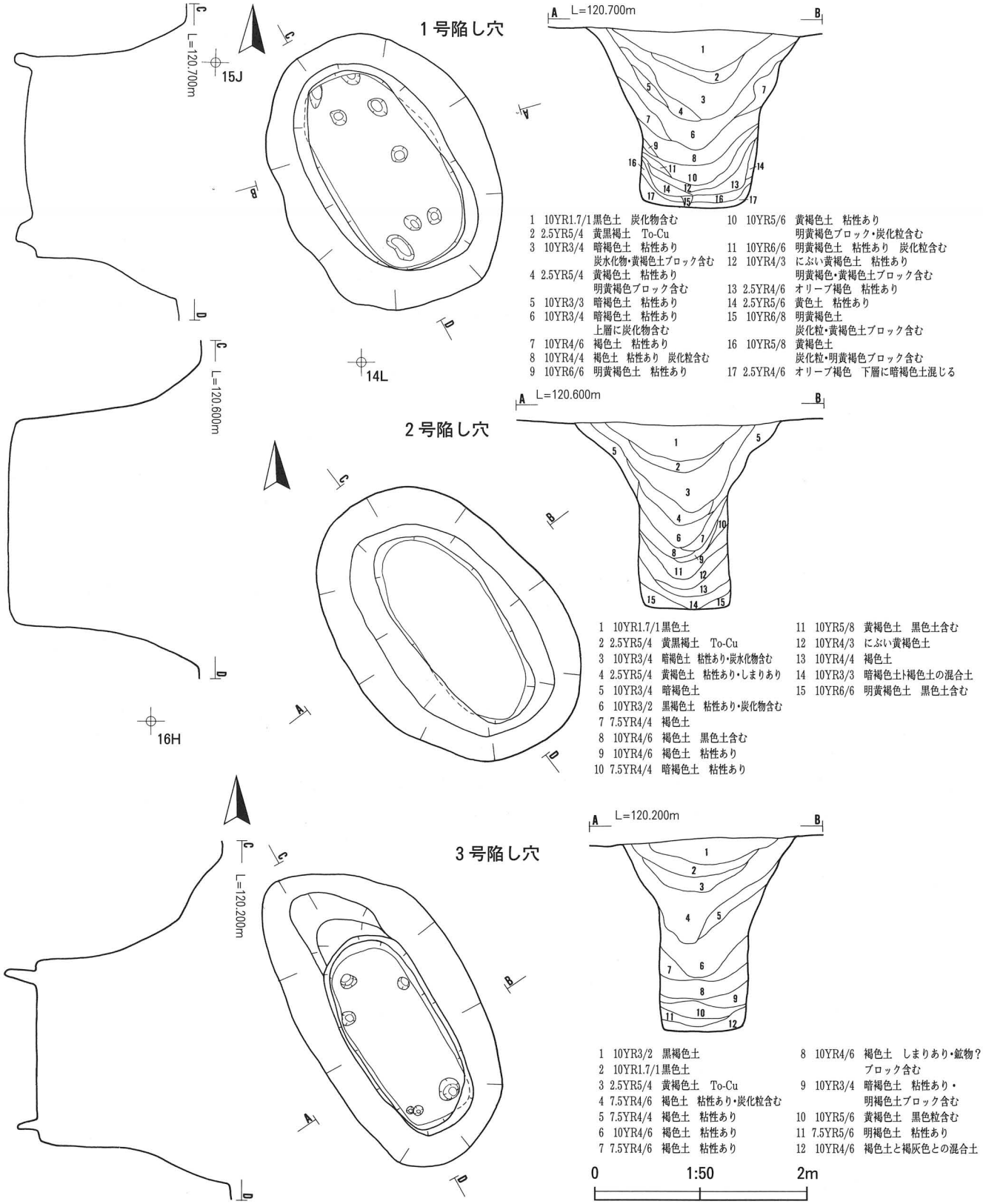
8 号陥し穴（第 35 図、写真図版 13）
＜位置＞　3Ｈ区の南側に位置する。
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにより確認した。
＜形状・規模＞　規模は開口部径 265×60cm・底部径 270×16cm・深さ 92cm、平面形は溝形を呈し長軸方向はほぼ東―西である。短軸の断面形は底部から 60cm 位までほぼ垂直に立ち上がり、その後開口部に向かって外傾するＹ字形である。長軸の断面形は底部の両端が内傾するフラスコ形を呈し、底部は東側に傾斜気味であるがほぼ平坦である。両端での高低差は約 10cm である。
＜埋土＞　暗褐色土、褐色土を主体とする７層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。
＜出土遺物＞　出土していない。
＜時期＞　縄文時代のものと思われる。

9 号陥し穴（第 35 図、写真図版 14）
＜位置＞　8Ｈ・8Ｉ区の南側に位置する。
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにより確認した。
＜形状・規模＞　規模は開口部径 285×63cm・底部径 300×25cm・深さ 107cm、平面形は溝形を呈し長軸方向はほぼ東―西である。短軸の断面形は底部から 50cm 位までほぼ垂直に立ち上がり、その後開口部に向かって外傾するＹ字形である。長軸の断面形は底部の両端が強く内傾する不整フラスコ形を呈し、底部は東側に傾斜気味であるがほぼ平坦である。両端での高低差は約 10cm である。
＜埋土＞　上位は暗褐色土、中位は褐色土、下位は黄褐色土を主体とする 10 層からなる。上層はレンズ状

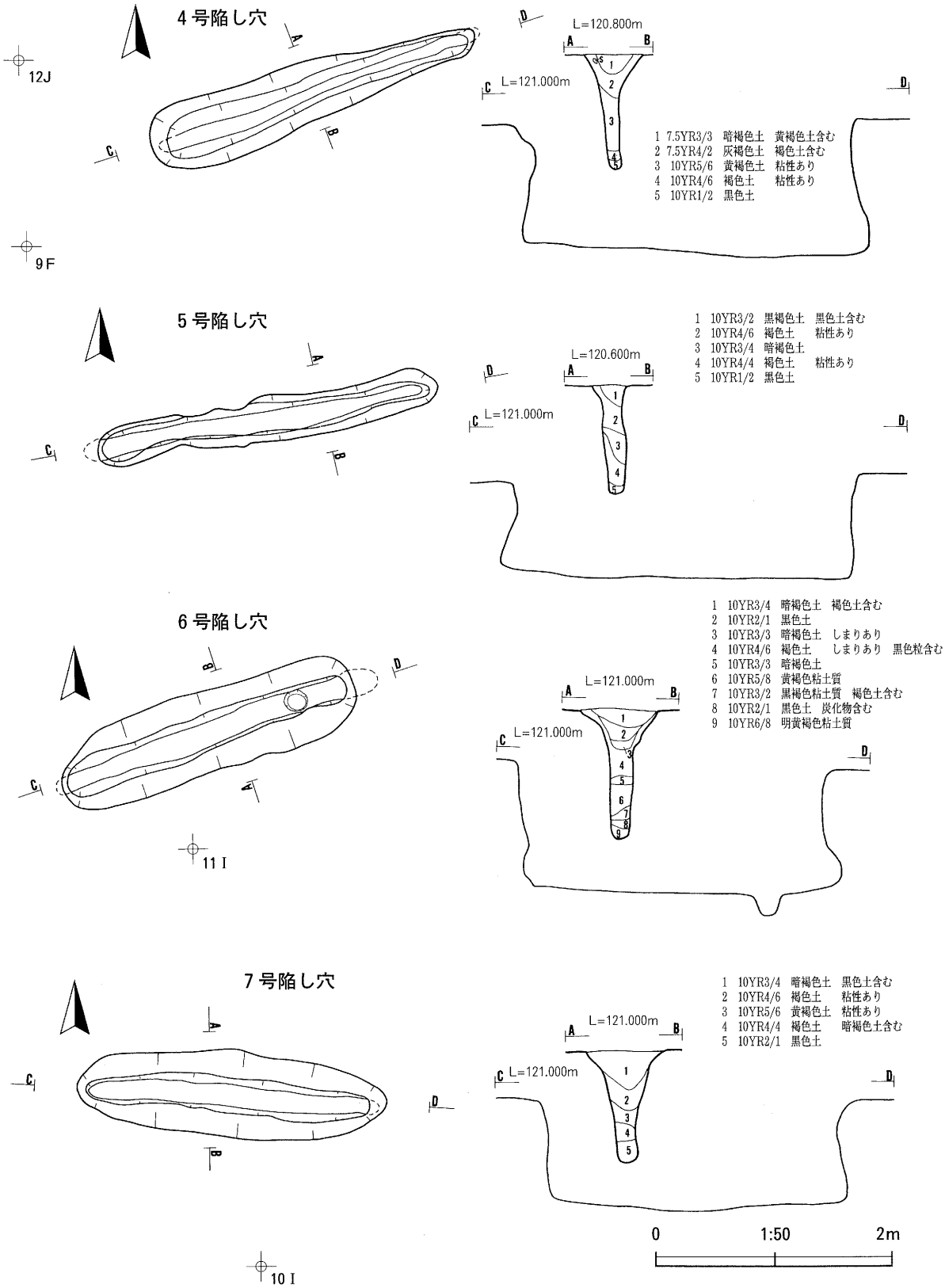
に堆積し、自然堆積の様相を呈する。
＜出土遺物＞　出土していない。
＜時期＞　縄文時代のものと思われる。

10 号陥し穴（第 35 図、写真図版 14）
＜位置＞　5K区の南側に位置する。
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにより確認した。
＜形状・規模＞　規模は開口部径 295×63cm・底部径 325×30cm・深さ 100cm、平面形は溝形を呈し長軸方向はほぼ東―西である。短軸の断面形は底部から 70cm 位までほぼ垂直に立ち上がり、その後開口部に向かって外傾するＹ字形である。長軸の断面形は底部の両端が強く内傾する不整フラスコ形を呈する。底部は中央部が低くなっており、両端と中央部の高低差は約 20～25cm である。
＜埋土＞　上位は暗褐色土、中位は褐色土、下位は黄褐色土を主体とする 10 層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。
＜出土遺物＞　出土していない。
＜時期＞　縄文時代のものと思われる。

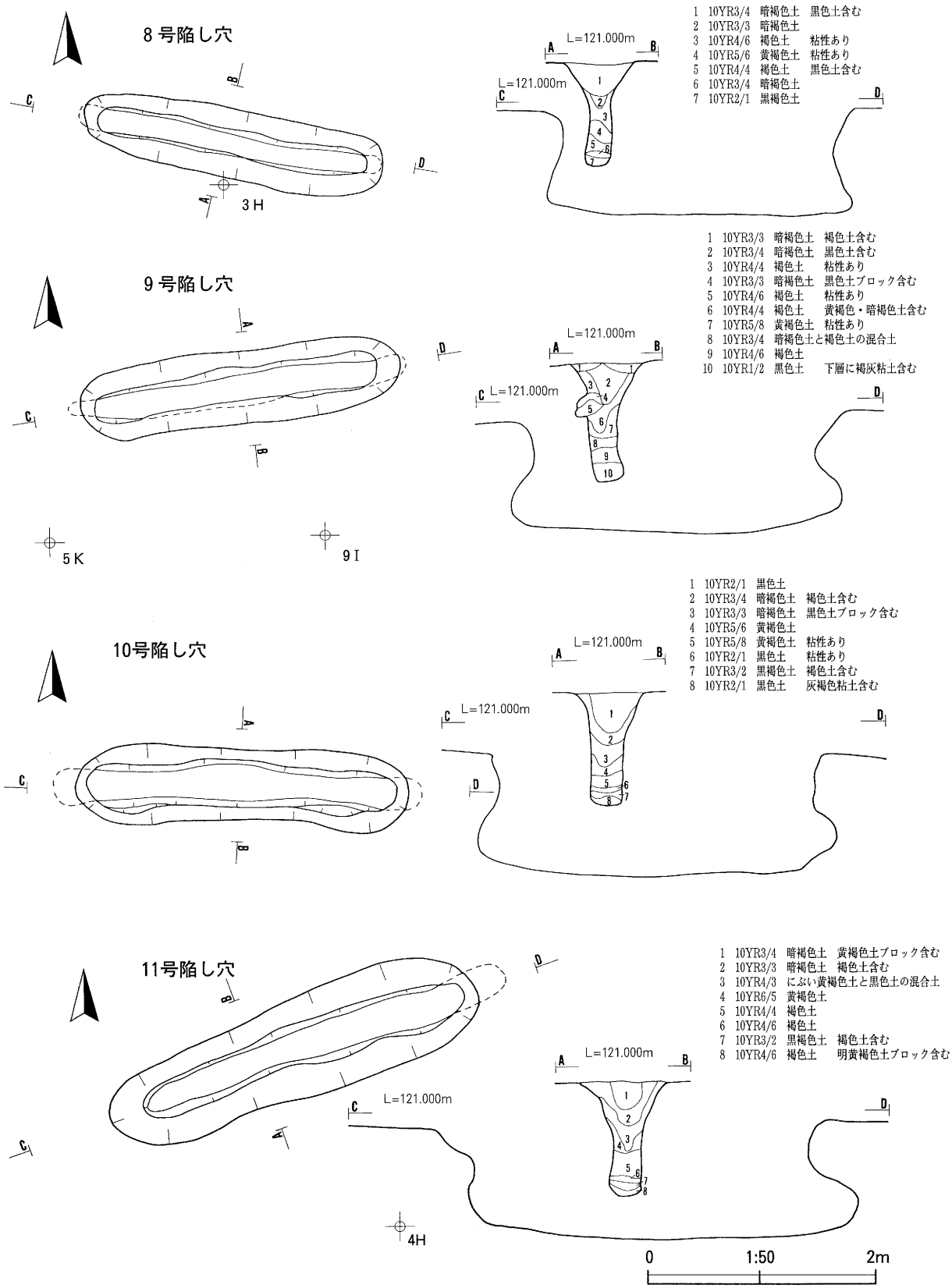
11 号陥し穴（第 35 図、写真図版 14）
＜位置＞　3Ｉ区の南東側に位置する。
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにより確認した。
＜形状・規模＞　規模は開口部径 340×90cm・底部径 335×27cm・深さ 105cm を測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はほぼ東―西である。短軸の断面形は底部から 50cm 位までほぼ平行に立ち上がり、その後開口部に向かって外傾するＹ字形である。長軸の断面形は東側の底部が強く内傾する不整平行四辺形を呈する。底部は中央部が低くなっており、両端と中央部の高低差は約 14cm である。
＜埋土＞　上位は暗褐色土、下位は黄褐色土を主体とする 8 層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。
＜出土遺物＞　出土していない。
＜時期＞　縄文時代のものと思われる。


1号陥し穴
L=120.700m
15J
14L
A
B
C
D
1 10YR1.7/1 黒色土 炭化物含む
2 2.5YR5/4 黄黒褐土 To-Cu
3 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり 炭水化物・黄褐色土ブロック含む
4 2.5YR5/4 黄褐色土 粘性あり 明黄褐色ブロック含む
5 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり
6 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり 上層に炭化物含む
7 10YR4/6 褐色土 粘性あり
8 10YR4/4 褐色土 粘性あり 炭化粒含む
9 10YR6/6 明黄褐色土 粘性あり
10 10YR5/6 黄褐色土 粘性あり 明黄褐色ブロック・炭化粒含む
11 10YR6/6 明黄褐色土 粘性あり 炭化粒含む
12 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性あり 明黄褐色・黄褐色土ブロック含む
13 2.5YR4/6 オリーブ褐色 粘性あり
14 2.5YR5/6 黄色土 粘性あり
15 10YR6/8 明黄褐色土 炭化粒・黄褐色土ブロック含む
16 10YR5/8 黄褐色土 炭化粒・明黄褐色ブロック含む
17 2.5YR4/6 オリーブ褐色 下層に暗褐色土混じる
2号陥し穴
L=120.600m
16H
1 10YR1.7/1 黒色土
2 2.5YR5/4 黄黒褐土 To-Cu
3 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり・炭水化物含む
4 2.5YR5/4 黄褐色土 粘性あり・しまりあり
5 10YR3/4 暗褐色土
6 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり・炭化物含む
7 7.5YR4/4 褐色土
8 10YR4/6 褐色土 黒色土含む
9 10YR4/6 褐色土 粘性あり
10 7.5YR4/4 暗褐色土 粘性あり
11 10YR5/8 黄褐色土 黒色土含む
12 10YR4/3 にぶい黄褐色土
13 10YR4/4 褐色土
14 10YR3/3 暗褐色土ト褐色土の混合土
15 10YR6/6 明黄褐色土 黒色土含む
3号陥し穴
L=120.200m
1 10YR3/2 黒褐色土
2 10YR1.7/1 黒色土
3 2.5YR5/4 黄褐色土 To-Cu
4 7.5YR4/6 褐色土 粘性あり・炭化粒含む
5 7.5YR4/4 褐色土 粘性あり
6 10YR4/6 褐色土 粘性あり
7 7.5YR4/6 褐色土 粘性あり
8 10YR4/6 褐色土 しまりあり・鉱物？ブロック含む
9 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり・明褐色土ブロック含む
10 10YR5/6 黄褐色土 黒色粒含む
11 7.5YR5/6 明褐色土 粘性あり
12 10YR4/6 褐色土と褐灰色との混合土
0 1:50 2m

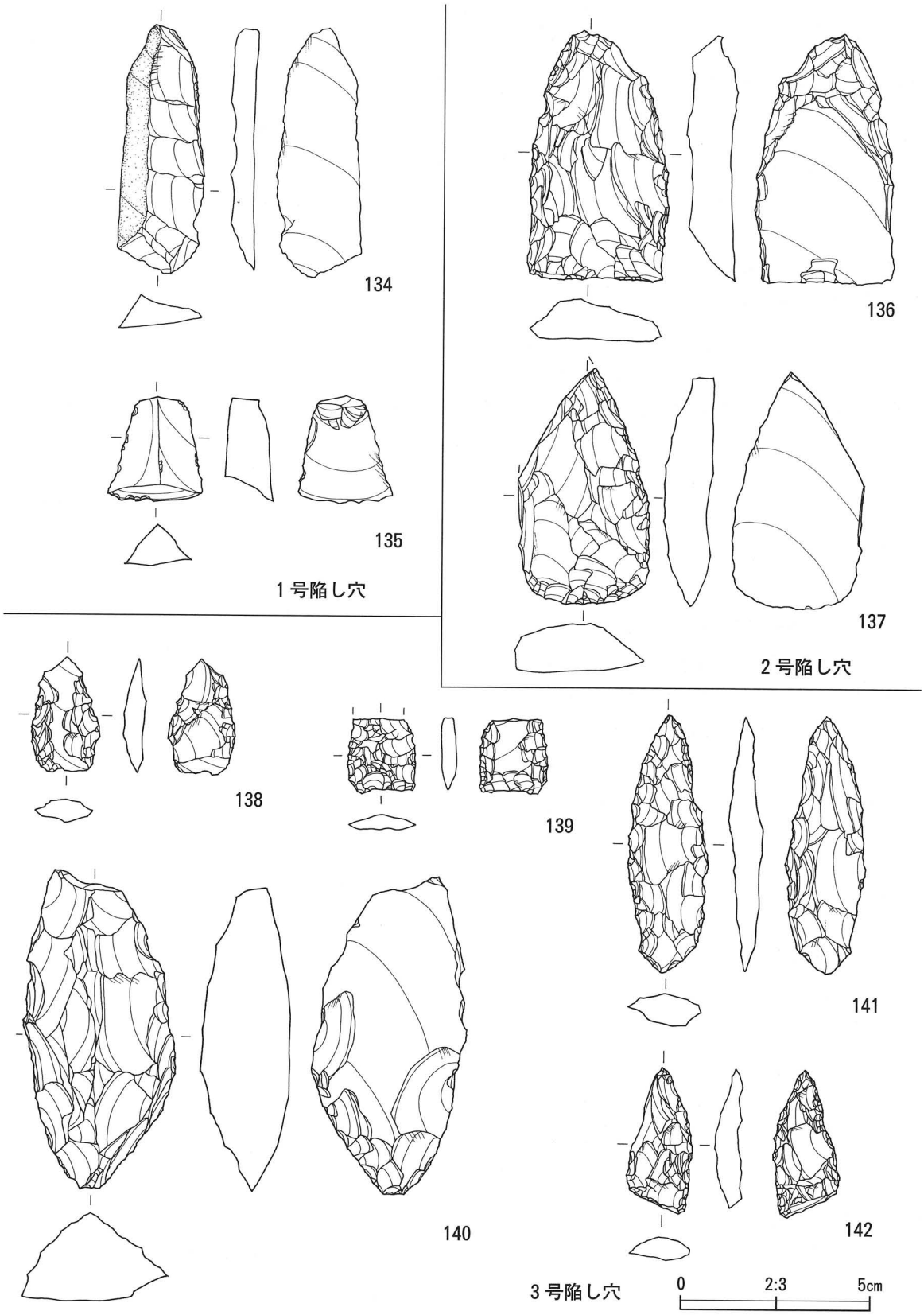
第33図　1～3号陥し穴


4号陥し穴
12J
9F
L=120.800m
L=121.000m
1 7.5YR3/3 暗褐色土 黄褐色土含む
2 7.5YR4/2 灰褐色土 褐色土含む
3 10YR5/6 黄褐色土 粘性あり
4 10YR4/6 褐色土 粘性あり
5 10YR1/2 黒色土
5号陥し穴
L=120.600m
L=121.000m
1 10YR3/2 黒褐色土 黒色土含む
2 10YR4/6 褐色土 粘性あり
3 10YR3/4 暗褐色土
4 10YR4/4 褐色土 粘性あり
5 10YR1/2 黒色土
6号陥し穴
11I
L=121.000m
L=121.000m
1 10YR3/4 暗褐色土 褐色土含む
2 10YR2/1 黒色土
3 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり
4 10YR4/6 褐色土 しまりあり 黒色粒含む
5 10YR3/3 暗褐色土
6 10YR5/8 黄褐色粘土質
7 10YR3/2 黒褐色粘土質 褐色土含む
8 10YR2/1 黒色土 炭化物含む
9 10YR6/8 明黄褐色粘土質
7号陥し穴
10I
L=121.000m
L=121.000m
1 10YR3/4 暗褐色土 黒色土含む
2 10YR4/6 褐色土 粘性あり
3 10YR5/6 黄褐色土 粘性あり
4 10YR4/4 褐色土 暗褐色土含む
5 10YR2/1 黒色土
0 1:50 2m

第34図 4～7号陥し穴



第35図 8～11号陥し穴



第 36 図　1～3 号陥し穴出土遺物

No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
134	1号陥し穴	北側埋土	削掻器	6.5	2.2	0.8	11.2	砂岩	奥羽山脈		27－134
135	1号陥し穴	北側埋土	剥片	2.7	2.5	1.3	6.6	頁岩	奥羽山脈		27－135
136	2号陥し穴	黒色土Ⅰ層	石篦	6.5	3.6	1.3	30.6	頁岩	奥羽山脈		27－136
137	2号陥し穴	南側埋土	石篦	(6.2)	3.4	1.2	27.0	頁岩	奥羽山脈	欠損	27－137
138	3号陥し穴	北側埋土	石鏃	3.0	1.8	0.6	2.8	頁岩	奥羽山脈		27－138
139	3号陥し穴	北側埋土	石鏃	(2.0)	1.8	0.4	2.0	頁岩	奥羽山脈	先端部欠損	27－139
140	3号陥し穴	北側埋土	削掻器	8.4	4.1	2.4	66.2	頁岩	奥羽山脈	未製品？	27－140
141	3号陥し穴	北側埋土	削掻器	6.7	2.1	0.9	10.5	頁岩	奥羽山脈		27－141
142	3号陥し穴	北側埋土	削掻器	3.8	1.7	0.7	4.1	頁岩	奥羽山脈		27－142

(4) 陥し穴状遺構

1号陥し穴状遺構（第37図、写真図版14）

＜位置＞　12J区の南東側に位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりをもって確認した。

＜形状・規模＞　規模は開口部径210×40cm・底部径177×10cm・深さ27cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向は東－西である。断面形は長軸が逆台形、短軸が椀形を呈し底面はほぼ平坦である。

＜埋土＞　黄褐色土、暗褐色土の2層からなり、レンズ状に堆積する。

＜出土遺物＞　出土してない。

＜時期＞　縄文時代のものと思われる。

2号陥し穴状遺構（第37図、写真図版14）

＜位置＞　5K・6K区の東側に位置する。

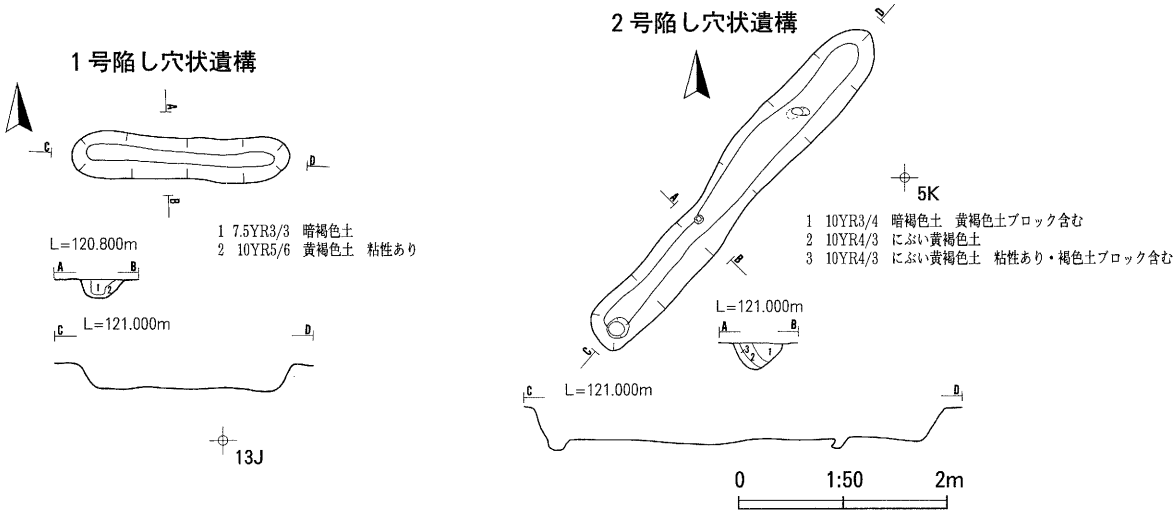
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりをもって確認した。

＜形状・規模＞　規模は開口部径392×55cm・底部径360×30cm・深さ27cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向は北東－南西である。断面形は長軸が逆台形、短軸が椀形を呈し底部は平坦である。

＜埋土＞　暗褐色土、にぶい黄褐色土の3層からなり、半レンズ状に堆積する。

＜出土遺物＞　出土してない。

＜時期＞　縄文時代のものと思われる。



第37図　1・2号陥し穴状遺構

(5) 焼土遺構

1号焼土遺構（第38図、写真図版15）

＜位置＞　13K・14K区の西側に位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で確認した。

＜形状・規模＞　112×49cmの長楕円形。

＜厚さ＞　最も厚い部分で6cm。

＜出土遺物＞　出土してない。

＜時期＞　不明であるが、検出面からみて縄文時代に属する可能性がある。

2号焼土遺構（第38図、写真図版15）

＜位置＞　13I区の北西側に位置する。

＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で確認した。

＜形状・規模＞　34×30cmでほぼ円形を呈する。

＜厚さ＞　最も厚い部分で7cm。

＜出土遺物＞　出土してない。

＜時期＞　不明であるが、検出面からみて縄文時代に属する可能性がある。

3号焼土遺構（第38図、写真図版15）

＜位置＞　11I・11J区の北側に位置する。

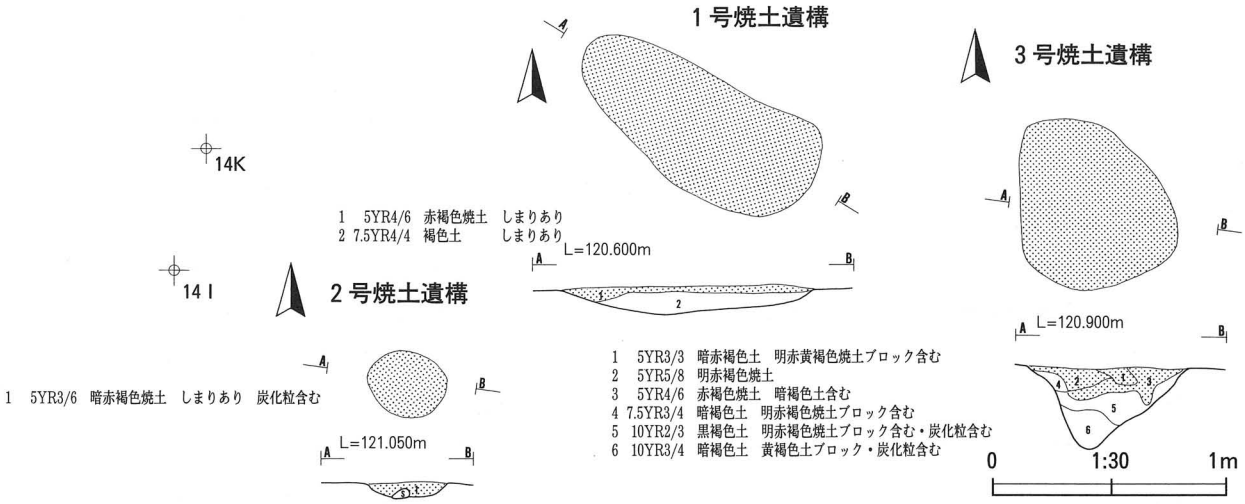
＜検出状況＞　表土除去後Ⅲ層上面で確認した。

＜形状・規模＞　73×66cmでほぼ円形を呈する。

＜厚さ＞　最も厚い部分で16cm。

＜出土遺物＞　出土してない。

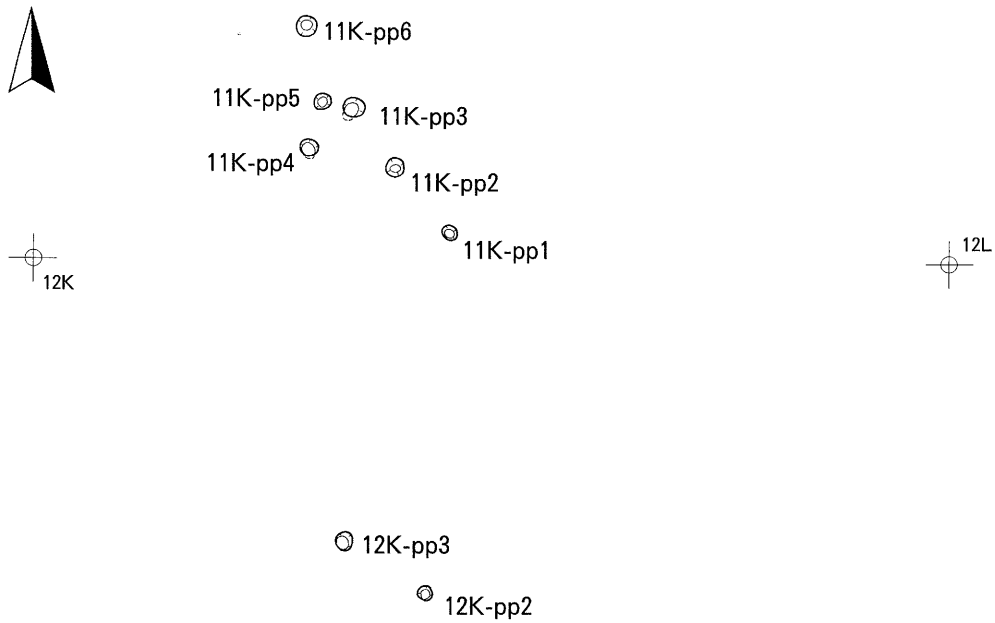
＜時期＞　不明であるが、検出面からみて縄文時代に属する可能性がある。



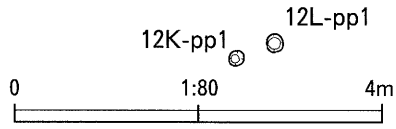
第38図　1～3号焼土遺構

(6) 柱穴状小ピット（第39図）

調査区南部に集中し、11K区より6基、12Kより2基、12L区より2基検出した。個々の柱穴は径15～23cm、深さ12～31.2cmを測り、平均すると径17.5cm前後、深さは20cm前後の規模である。埋土は暗褐色～黒褐色土を主体とし、柱あたりは確認できなかった。出土遺物は11K－pp3より磨耗した土器の細片と11K－pp2からフレイクが出土した。配置プランに関しては想定できなかった。



No.	12L-pp1	12K-pp1	12K-pp2	12K-pp3	11K-pp1
径・cm	18×17.5	17.5×15	15×14	19×18	16.5×13
深さ・cm	12.0	16.9	17.4	18.3	17.2
No.	11K-pp2	11K-pp3	11K-pp4	11K-pp5	11K-pp6
径・cm	19×17	23×21	15×12.5	19×17.5	21×21
深さ・cm	26.0	31.2	25.2	18.3	20.1

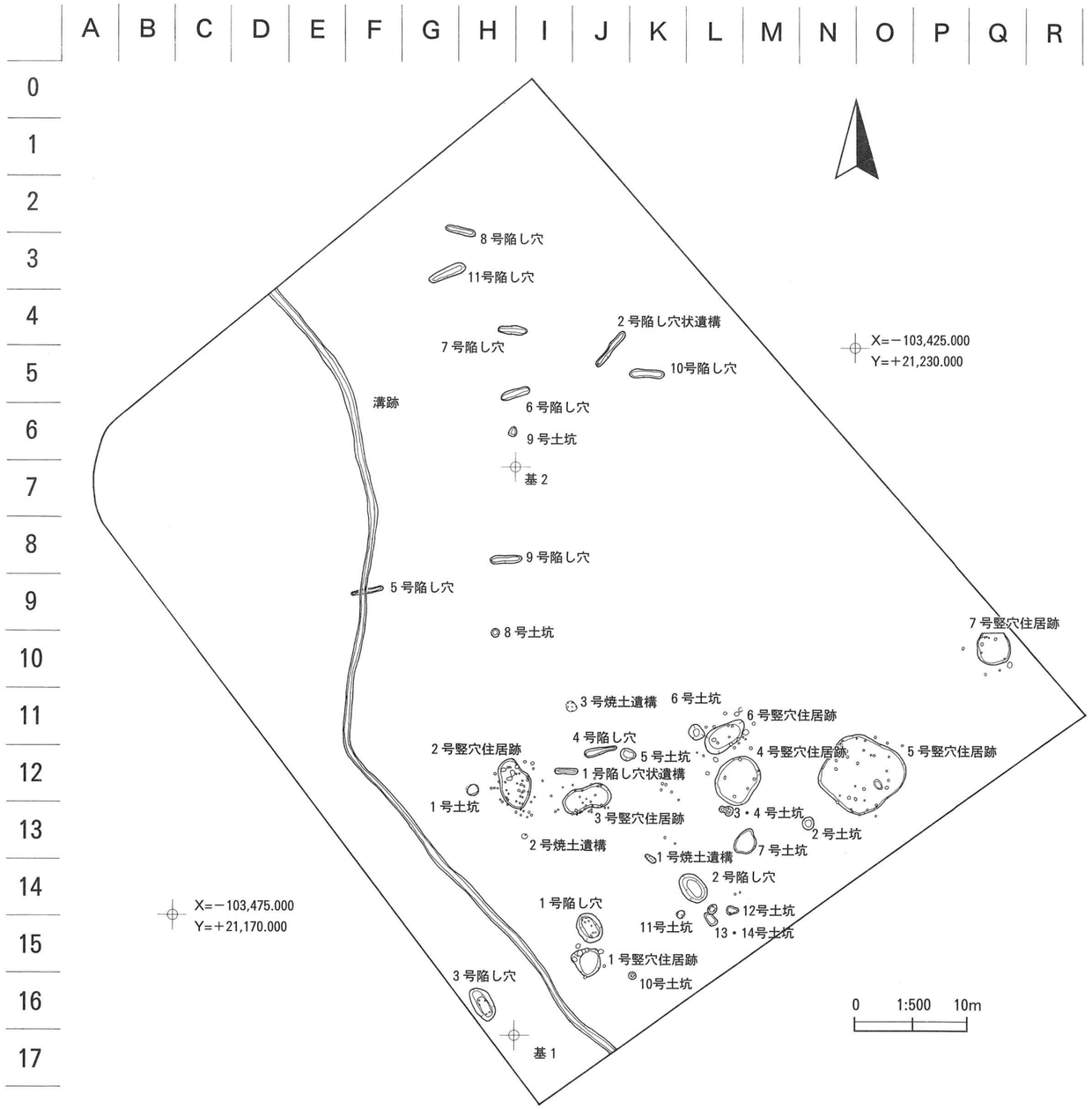


第39図　柱穴状小ピット

(7) 溝跡（第40図、写真図版16）

調査区西側で1条を検出した。全長72m、上端幅平均70cm、下端幅平均40cmで南北を蛇行するようにある。この地に詳しい方の話によると、この溝は胆沢川から水を引くための前沢堰の支流であるらしい。この堰は、昭和3年頃から38年頃まで使われ、当時前沢町には千代治・出口・清作開墾地があり、本流の馬留～万内堤を経て各支流から開墾地に水を送っていた。なお、先の開墾地は現在の前沢町日除松地区にあたり、この地区には現在でも千代治・出口・清作・半蔵堤等の貯水施設がある。

出土遺物は、埋土から磨耗した土器片・石器が出土した。これらの遺物は溝の埋め立て時に入りこんだものと思われ、遺構の時期も明確なため遺構外出土遺物の欄にて掲載している。


A B C D E F G H I J K L M N O P Q R
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17
8 号陥し穴
11号陥し穴
2 号陥し穴状遺構
7 号陥し穴
10号陥し穴
X=－103,425.000
Y=＋21,230.000
溝跡
6 号陥し穴
9 号土坑
基 2
9 号陥し穴
5 号陥し穴
8 号土坑
7 号竪穴住居跡
3 号焼土遺構
6 号土坑
6 号竪穴住居跡
4 号陥し穴
2 号竪穴住居跡
5 号土坑
4 号竪穴住居跡
5 号竪穴住居跡
1 号陥し穴状遺構
1 号土坑
3 号竪穴住居跡
3・4 号土坑
2 号土坑
2 号焼土遺構
7 号土坑
1 号焼土遺構
2 号陥し穴
X=－103,475.000
Y=＋21,170.000
1 号陥し穴
12号土坑
11号土坑
13・14号土坑
1 号竪穴住居跡
10号土坑
3 号陥し穴
基 1
0 1:500 10m

第 40 図　遺構配置図

2　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、土器・石器である。土器は縄文土器の砕片で、その総量は小コンテナ（30×40×10cm）1箱にも満たない。石器は104点で使用の痕跡が認められない剥片類及びチップ、破損の著しい礫石器を除く、29点を掲載した。出土の層位はⅡ・Ⅲ層上面である。また、1号溝より出土した遺物についても遺構外として扱った。

(1) 土器

縄文土器は単節縄文の地文のみの胴部破片が多く、時期や特徴を明記できるものは極僅かであったため、ここでは特徴をもつ土器のみを取り上げた。

143～149は胴部破片である。143・144は繊維を含み胎土は粗い。器面磨耗が激しく調整を読み取ることは不可能であった。145・146・147・149は外面ＲＬの縄文・内面はナデを呈し、145の内面には炭化物の付着が見られる。146は繊維が含まれず砂粒を含み粗い胎土である。148は内外面ともRの縄目文が施される。150は口縁部破片である。口縁にいたって緩やかに外反し口縁部には貝殻条痕が施され、口縁部から縦位と口唇部に原体圧痕が加えられる。胴部地文はＲＬの縄文が施される。

(2) 石器

石鏃（151）…1点のみの出土である。無茎鏃で基部は円基状である。

石匙（152～159）…全て縦型の石匙である。154～157は刃部、156・159はつまみ部を欠損している。152～156は両側辺に刃部を持ち、先端にいくにしたがって幅は狭くなる。153・155は裏面からも調整を施している。158は両側辺と末端（つまみの反対側）の三辺に刃部をもつ。刃部の形状は比較的丸みを帯びている。

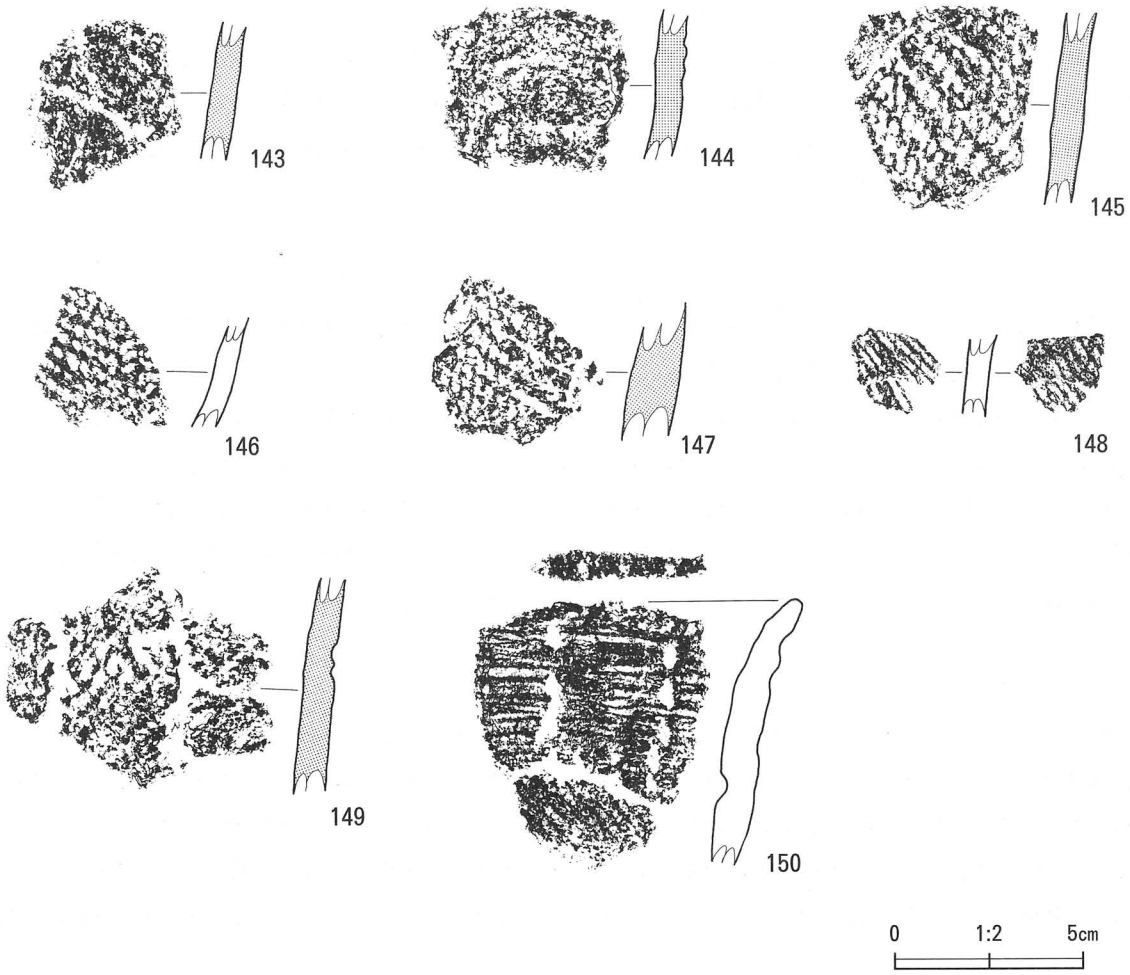
石箆（160～162）…3点とも片面加工である。160・162は基部が欠損している。162は左側面が鋸歯状に加工されている。

石錐（163）…1号溝埋土上層中より出土。扁平で隅丸方形状のつまみを持ち、先端部は短く太い。

削掻器（164～173）…165・166・167・171・172は欠損しているが1辺ないし2辺の刃部を形成している。169は両縁辺に刃部加工が施されるが、左側面には歯つぶし加工と思われる調整が入り末端は尖っている。170は3辺に刃部が施され裏面には一辺に加工を施している。173は両側辺に刃部加工が施され、裏面の左側面に調整が入っている。

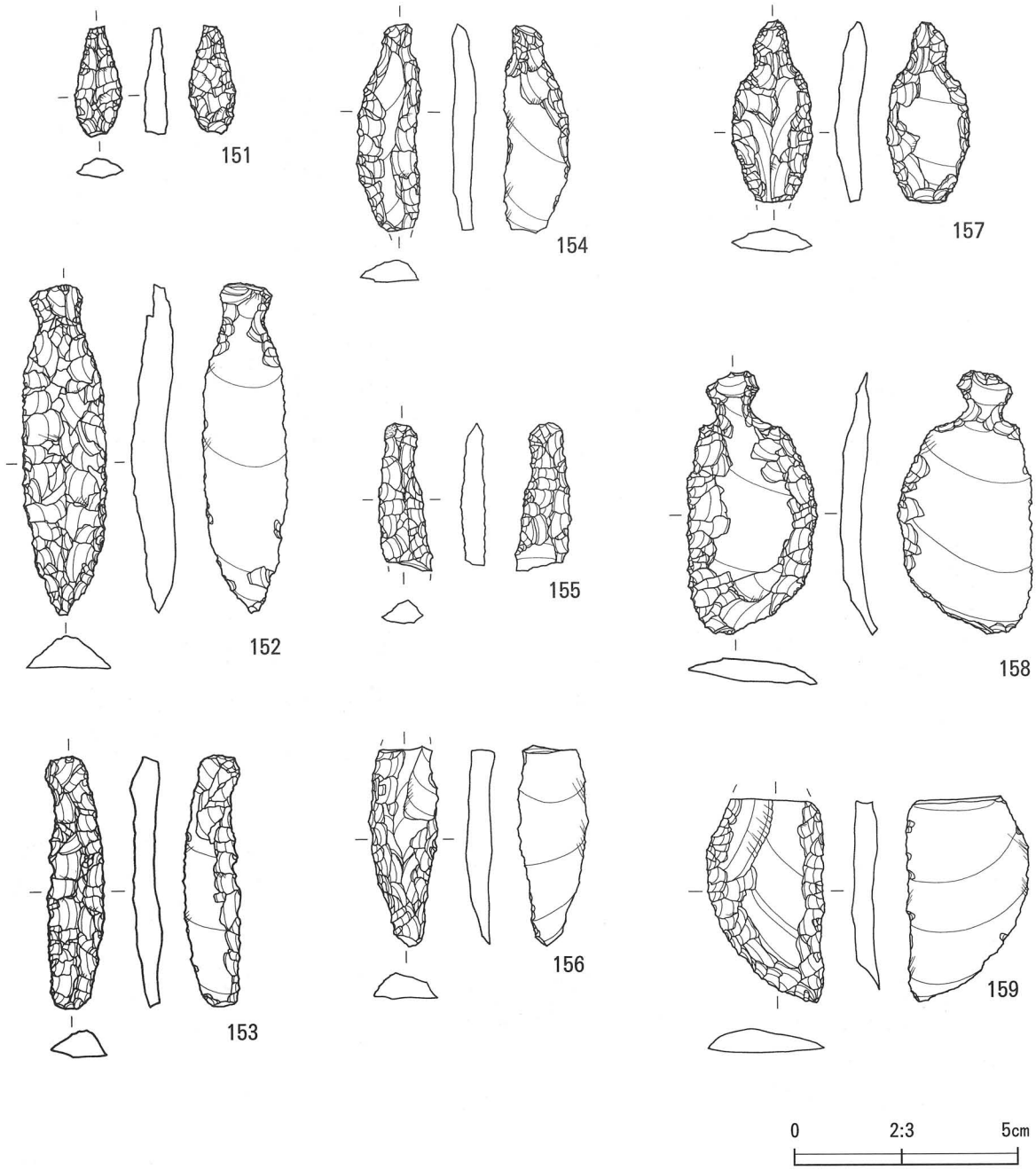
フレイク…調査区の南半部にて検出されている。ここでは調整が見られるものＲフレ（174）と、使用痕が見られるものＵフレ（175～178）である。

打製石斧（179）…自然礫を利用し右側面と刃部に加工している。



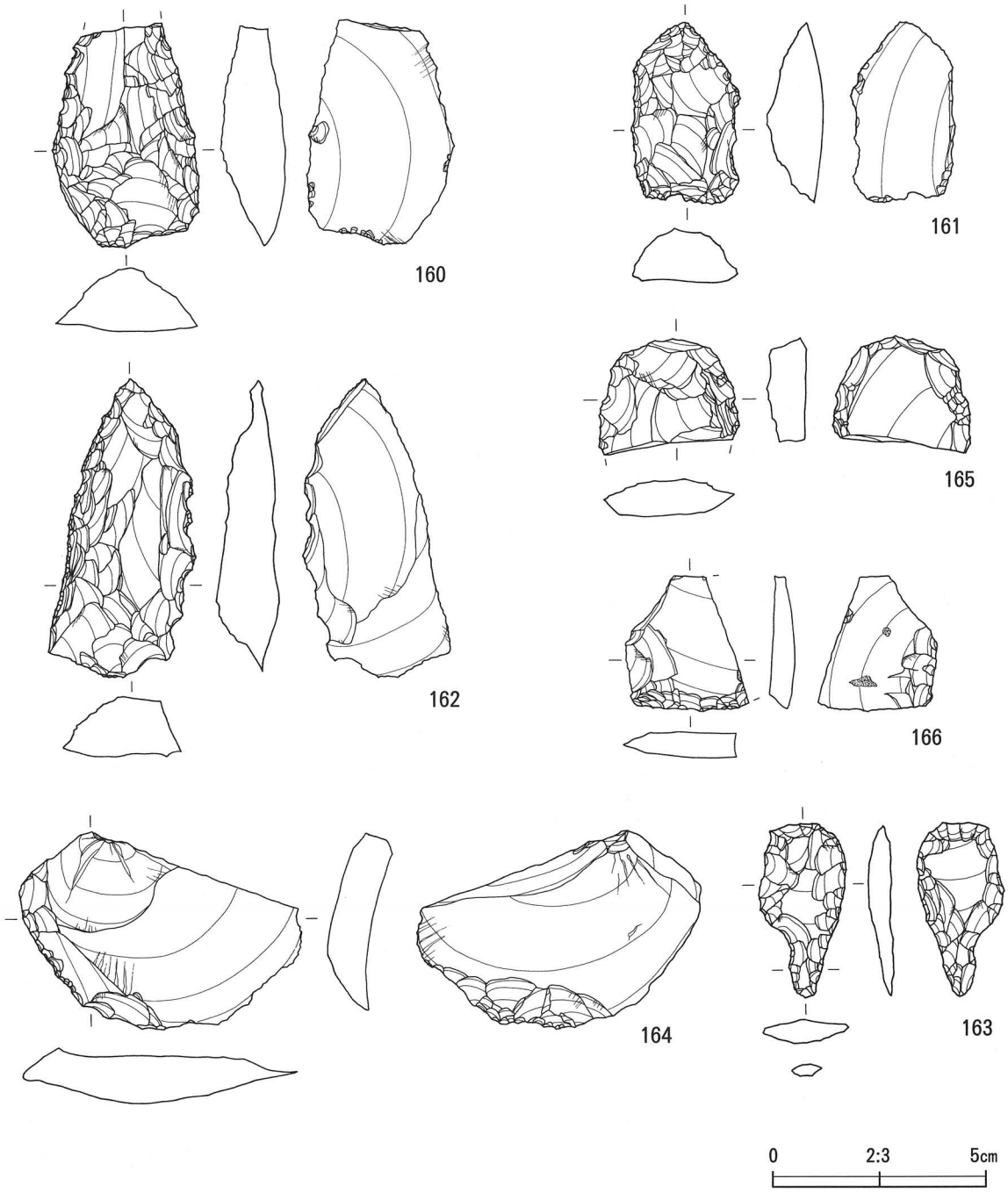
No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	繊維	色調 外面	色調 内面	分類	写真図版
143	10I	表土下	深鉢	胴部	内外面磨耗著しい　胎土：やや粗	少量	明黄褐色	明黄褐色	I	28－143
144	10H	表土下	深鉢	胴部	内外面磨耗著しい　胎土：やや粗	含む	黄橙色	にぶい黄橙色	I	28－144
145	11L	表土下	深鉢	胴部	縄文（外面：RL）内面：ナデ・炭水化物付着	少量	黄橙色	にぶい黄橙色	I	28－145
146	11L	表土下	深鉢	胴部	縄文（外面：RL）内面：ナデ　胎土：やや粗	なし		にぶい黄褐色	I	28－146
147	13L	表土下	深鉢	胴部	縄文（外面：RL）内面：ナデ	含む	黄橙色	黒褐色	I	28－147
148	13L	Ⅱ層上	深鉢	胴部	縄文（外面：内面：Rの縄）	なし	明黄褐色	にぶい黄褐色	I	28－148
149	16H	Ⅱ層上	深鉢	胴部	縄文（外面：RL）内面：ナデ	多量	にぶい黄褐色	橙色	V	28－149
150	調査区南側	Ⅲ層上	深鉢	口縁部	口縁部文様体に貝殻背面条痕を施し縦位と口唇部に原体圧痕加える	なし	にぶい黄橙色		I	28－150

第41図　遺構外出土遺物①



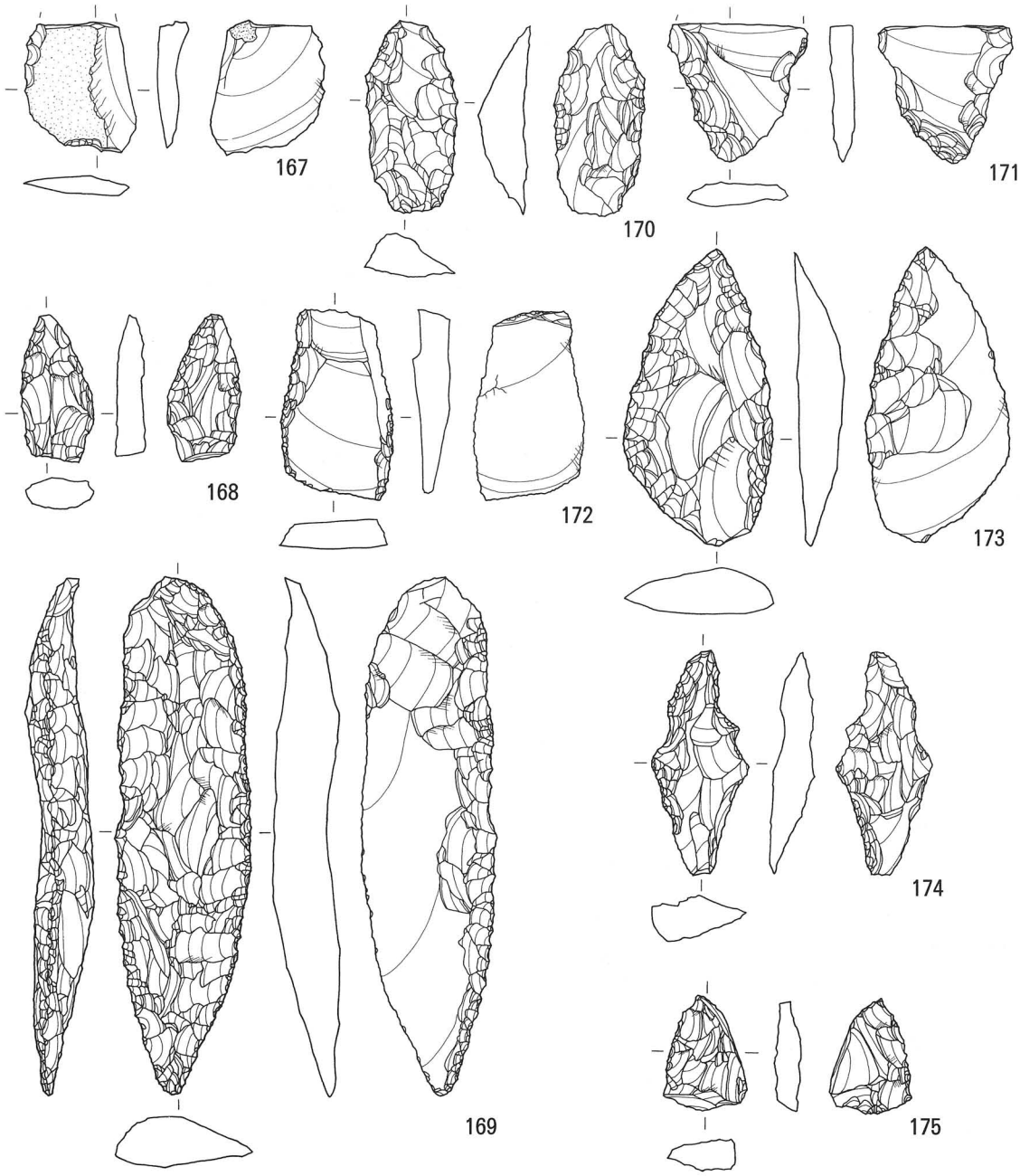
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
151	14L	Ⅱ層上層	石鏃	2.5	1.1	0.5	1.0	頁岩	奥羽山脈		28－151
152	南側試掘	Ⅰ層下層	石匙	7.4	1.8	0.9	11.1	頁岩	奥羽山脈		28－152
153	11K	Ⅱ層上層	石匙	5.6	1.3	0.7	4.8	頁岩	奥羽山脈		28－153
154	南側試掘	Ⅰ層下層	石匙	(4.7)	1.4	0.5	3.0	頁岩	奥羽山脈	欠損	28－154
155	1号溝中央～北側	埋土一括	石匙	(3.3)	1.2	0.5	1.9	頁岩	奥羽山脈	欠損	28－155
156	16H	風倒木埋土	石匙	(4.5)	1.6	0.6	4.5	頁岩	奥羽山脈	欠損	28－156
157	15J	Ⅱ層上層	石匙	(4.1)	1.8	0.7	3.9	頁岩	奥羽山脈	欠損	28－157
158	16H	Ⅰ層下層	石匙	5.9	2.9	0.8	9.7	頁岩	奥羽山脈		28－158
159	南側試掘	Ⅰ層下層	石匙	(4.5)	2.6	0.6	8.0	頁岩	奥羽山脈	欠損	28－159

第42図　遺構外出土遺物②



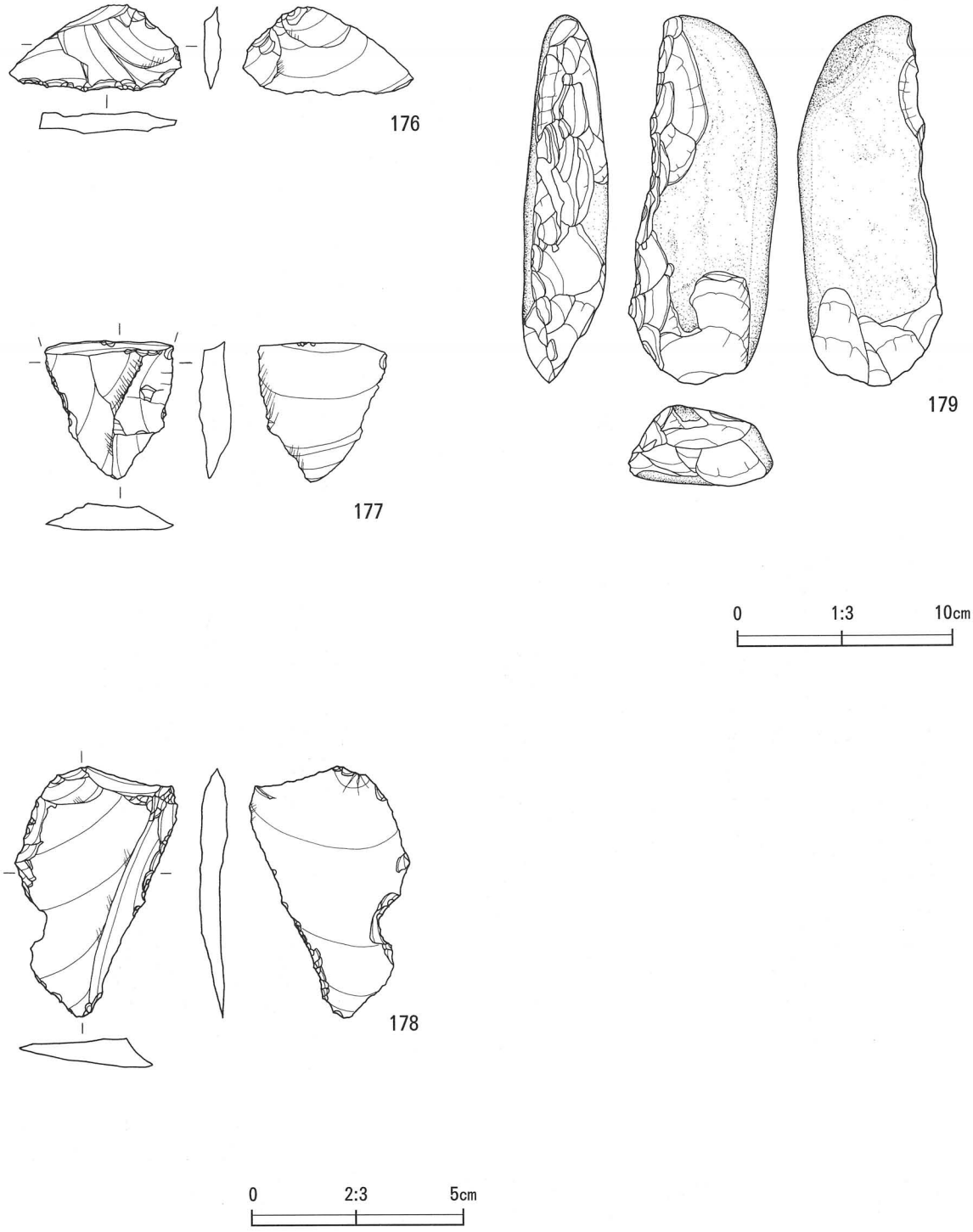
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
160	14H	Ⅱ層上層	石篦	(5.3)	3.4	1.5	23.7	頁岩	奥羽山脈	欠損	29－160
161	9C	Ⅱ層上層	石篦	4.2	2.5	1.3	15.4	頁岩	奥羽山脈		29－161
162	10G	Ⅱ層上層	石篦	7.0	3.4	2.0	26.3	頁岩	奥羽山脈	一辺に据歯状加工	29－162
163	1号溝中央~北側	埋土一括	石錐	4.1	2.0	0.5	4.3	頁岩	奥羽山脈		29－163
164	1号溝中央~北側	埋土一括	削掻器	6.6	4.1	1.0	30.4	頁岩	奥羽山脈		29－164
165	1号溝中央~北側	埋土一括	削掻器	(2.7)	3.2	0.9	8.9	頁岩	奥羽山脈	欠損	29－165
166	12G	Ⅱ層上層	削掻器	3.2	(2.8)	0.6	6.1	頁岩	奥羽山脈	欠損	29－166

第43図　遺構外出土遺物③



No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
167	1号溝中央~北側	埋土一括	削掻器	(3.1)	2.6	0.7	4.4	頁岩	奥羽山脈	欠損	29−167
168	1号溝中央~北側	埋土一括	削掻器	3.4	1.7	0.7	4.3	頁岩	奥羽山脈		29−168
169	12P	Ⅱ層上層	削掻器	12.0	3.2	1.5	47.8	頁岩	奥羽山脈		29−169
170	15H	Ⅱ層上層	削掻器	4.5	3.1	1.2	1.0	珪質頁岩	奥羽山脈		29−170
171	15J	Ⅱ層上層	削掻器	(3.2)	3.2	0.6	6.0	頁岩	奥羽山脈	欠損	29−171
172	15J	Ⅱ層上層	削掻器	4.4	2.5	0.9	10.9	頁岩	奥羽山脈		29−172
173	表採		削掻器	6.9	3.4	1.1	22.6	頁岩	奥羽山脈		29−173
174	1号溝中央~北側	埋土一括	剥片	5.2	2.2	1.0	7.4	頁岩	奥羽山脈		29−174
175	1号溝中央~北側	埋土一括	剥片	2.7	1.6	0.6	2.7	頁岩	奥羽山脈		29−175

第44図　遺構外出土遺物④



No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
176	1号溝中央~北側	埋土一括	剥片	2.1	4.0	0.5	3.5	頁岩	奥羽山脈		30−176
177	15G	Ⅰ層上層	剥片	(3.2)	3.0	0.8	6.4	頁岩	奥羽山脈	欠損	30−177
178	8F	Ⅱ層上層	剥片	5.9	3.8	0.7	13.7	頁岩	奥羽山脈		30−178
179	14K	Ⅰ層下層	打製石斧	17.6	6.9	3.9	570.0	頁岩	奥羽山脈		30−179

第45図　遺構外出土遺物⑤

V　まとめと考察

1　遺構

(1) 竪穴住居跡

今回の調査で縄文時代早期後葉と考えられる住居跡7棟を検出した。遺跡はほぼ平坦な土地に立地し、竪穴住居跡の占地は調査区南側に集中しており重複はみられない。また出土遺物は縄文時代早期後葉のものであることから、同時期に使用されたものと思われる。住居の規模は様々で、最大のもので5号住居跡の802×694cm、最小のもので1号住居跡の84×90cmである。その他の住居跡は平均して3～4mの規模である。柱穴の配置は前章で触れているが、柱あたりを持つものはなく、柱穴の埋土と規模と位置、他遺跡の報告等を参考にして推定したものであり、明確な特定には至らなかったため調査時に確認できたものを全て図面に掲載している。床面は地山を多少掘り込み、ほぼ平坦である。壁は緩やかに外傾し、壁高の平均値は5～14cmである。6号住居跡については、壁はほとんどなくⅠ・Ⅱ層からの掘削が激しい場所であったため、その影響を受けているものと思われる。炉については、2号住居跡の北側から規模53×38cm、厚さ約20cmの焼土が検出された。焼土の検出面からみて住居に伴う炉と考えられる。しかし、尖底土器が出土した3号住居跡や大型の5号住居跡など他の住居からは床面上の焼土は確認されていない。住居跡に関連するピットについては、1号住居跡の北東側にあるP1から横型石匙・磨石が出土しているが、位置からみて柱穴になりうる可能性もある。1号住居跡P3、2号住居跡P1・P2は住居内の北西側にあり平面形が楕円形で浅い窪み状のものであり位置・形状とも類似している。出土遺物等はない。5号住居跡内の南側にあるP1の埋土から110点のチップが出土した。

各住居跡の出土遺物については、ほとんどが磨滅の激しい土器片で、繊維は含むもの、含まないものが混在している。時期の特定となる尖底土器を出土した住居は2・3・5号住居で、いずれも底部の破片である。出土状況は床面直上で、一地点に集中し散らばっている状態で出土した破片が多い。3号住居については床面西側より尖底土器の完形破片2個体が出土している。また、床面に接して大型礫が5点出土し、そのうち3点には使用の痕跡が見られる。5号住居は他の住居跡に比べ石器の出土量が多く、先述したが住居南側のP1の埋土からチップ110点が出土した。

休場遺跡の本住居跡については上記した特徴が見られるが顕著な規則性は認められず、住居跡の平面形をとっても不整楕円形・円形・隅丸方形などバリエーションが見られる。県内でも表裏縄文土器をともなった住居跡の例は少ないため第46・47図を含め、他の遺跡より検出された縄文早期末葉～前期初頭の住居跡を概観する。

遺跡の紹介

・大渡野遺跡　　紫波郡矢巾町赤林

ＪＲ東北本線矢巾駅の南西約4kmに位置する。遺跡は花巻段丘の段丘崖近くにある。大渡野遺跡からは弥生時代中期の埋設土器、縄文時代早期の土坑や屋外炉、焼土遺構、早期後半の遺物包含層が検出されている。

・糀口Ⅰ遺跡　　九戸郡軽米町大字晴山

ＪＲ東北本線金田一温泉駅の東約6kmに位置する。遺跡は北上山地の北端で、西に猿越峠山地が南北に連なる低く緩やかな丘陵にある。同町内には押型文、貝殻文、表裏縄文の遺物が出土する土弓Ⅰ遺跡、馬場野Ⅱ遺跡がある。糀口Ⅰ遺跡からは奈良時代の住居跡や土坑、縄文時代前期初頭～末葉の溝形の陥し穴状遺構

が検出されている。

・駈上遺跡　　水沢市天台通り

ＪＲ東北本線水沢駅の南西約 1kmに位置する。遺跡は胆沢扇状地の扇端部に立地し、胆沢段丘上の最下段である福原面にある。古くから縄文時代早期並びに平安期頃の複合遺跡として知られている。駈上遺跡からは、表裏縄文を覆土伴う溝形の陥し穴や土坑、焼土遺構が検出されている。

・尼坂遺跡　　胆沢郡胆沢町南都田字加賀谷地

ＪＲ東北本線水沢駅の西約 6.8kmに位置する。遺跡は胆沢扇状地のほぼ扇央に立地し、駈上遺跡と同様に胆沢段丘上の福原面にある。尼坂遺跡は昭和 26 年の調査以降縄文時代早期中葉の遺跡として知られている。最近の調査では平安時代の住居跡、縄文時代前期前半～早期後葉の住居跡や土坑、陥し穴が検出されている。休場遺跡からは北約 10kmと近隣にある遺跡である。

岩手県内における該期の住居跡の類例は 6 遺跡 21 棟である。その中でも住居の検出状況・遺物出土状況が良好な 18 棟を対比させたのが第 46・47 図、第 2 表である。住居の平面形ごとに円形・長方形・方形・楕円形と分けて掲載している。円形・方形プランでみられることとして、休場 1 号住居跡、駈上Ｓ1-38 住居跡以外はほぼ同じ規模であり、柱穴状の小ピットは壁際に見られるものが多い。方形プランでは休場 5 号住居跡が最も大きく、その他はほぼ同規模である。このプランでは 4 棟の住居跡とも長軸方向が北西―南東に向き、その中でも休場 5 号住居跡と尼坂Ｂ－1 号住居跡はプランと付随する施設の位置もほぼ同地点にある。しかし、尼坂Ｂ－1 号住居跡のピットからはチップなど遺物の出土は見られない。全体でみると焼土は伴っているもの・いないもの両者あり、伴っているもののほとんどは床面に硬くしまった焼土が広がっている状態である。床面に広がっている焼土の規模は最大で 110cm、最小で 42cm、厚さは厚いもので 20cm、薄いもので 3cm である。休場遺跡 2 号住居の炉は焼土が厚く残存し、焼土内に炭化物を検出した例は稀であったといえる。焼土の位置はほぼ中央にあるが、尼坂Ｃ－2・休場 2 号住居跡のように北側に寄っているものもある。壁の立ち上がり方はほとんどが緩やかに外傾し、周溝をもつものはない。柱穴状の小ピットも規模は小さく柱あたりを持つものはない。住居内の出土遺物についてはすべて破砕した土器片で、完形に近い状態で出土した休場 3 号住居跡、駈上Ｓ1-38 住居跡の出土土器についても砕けた状態であり、完全な復元はできていない。

該期の住居は必ずしも 1 つの型におさまるものではなく、多様な形態がある。遺構が検出されている遺跡も県内には 6 遺跡と少数のため、類例を重ね規模・炉の位置・柱穴配置等を詳しく検討をすれば時期的・地域的特徴を見い出せるかもしれない。ここでは北上川水系の駈上遺跡、その支流となる胆沢川水系の休場・尼坂遺跡を主に取り上げたが、いずれも各特徴の一端を確認したものとして、ここでは平面形が多種にわたり、炉に相当する焼土を有するもの有さないものがあること、明確な柱穴配置（有無）と周溝を持たない住居跡の存在を指摘するにとどめる。

（平）

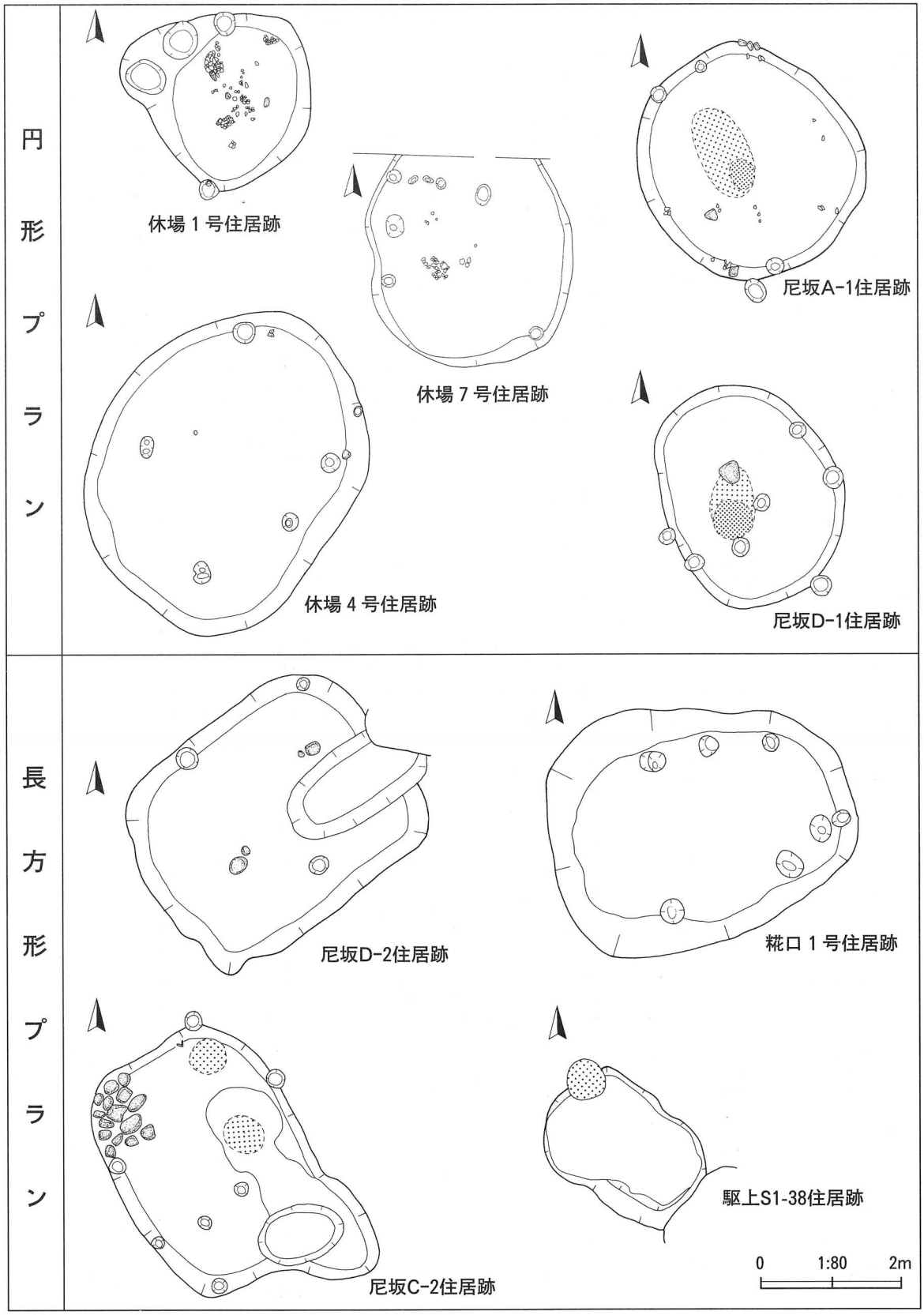
第２表　岩手県内における表裏縄文期の住居観察表

	遺跡名	休場遺跡			尼坂遺跡	
円形プラン	遺構名	１号住居跡	４号住居跡	７号住居跡	Ａ－1住居跡	Ｄ－1住居跡
	平面形	不整円形	不整円形	ほぼ円形	卵形	卵形
	規模(m)	2.67×2.35	4.53×3.60	3.35×3.06	2.9×3.1	2.6×3.32
	炉	－	－	－	深さ10ｃｍの硬い焼土跡	床面上に焼土が広がる
	柱穴	壁際に2基 壁上に1基	壁際に1基 遺構内に4基	壁際に3基 遺構内に5基	壁際に3基 壁上に1基	壁際に5基 遺構内に2基
	施設	窪み上ピット1基	－	－	－	遺構外傍に楕円形ピット 土器片・炭化物含む
	壁の傾斜	緩やかに外傾	緩やかに外傾	緩やかに外傾	外傾	外傾
	壁高(cm)	4.3～11.0	9.5～12.7	1.6～8	15～18	16
	遺物出土状況	土器片 石器・礫	土器片2片・細片 石器・礫	土器片	土器片5点 土器細片十数点 石器17点	土器片7点 細片13点

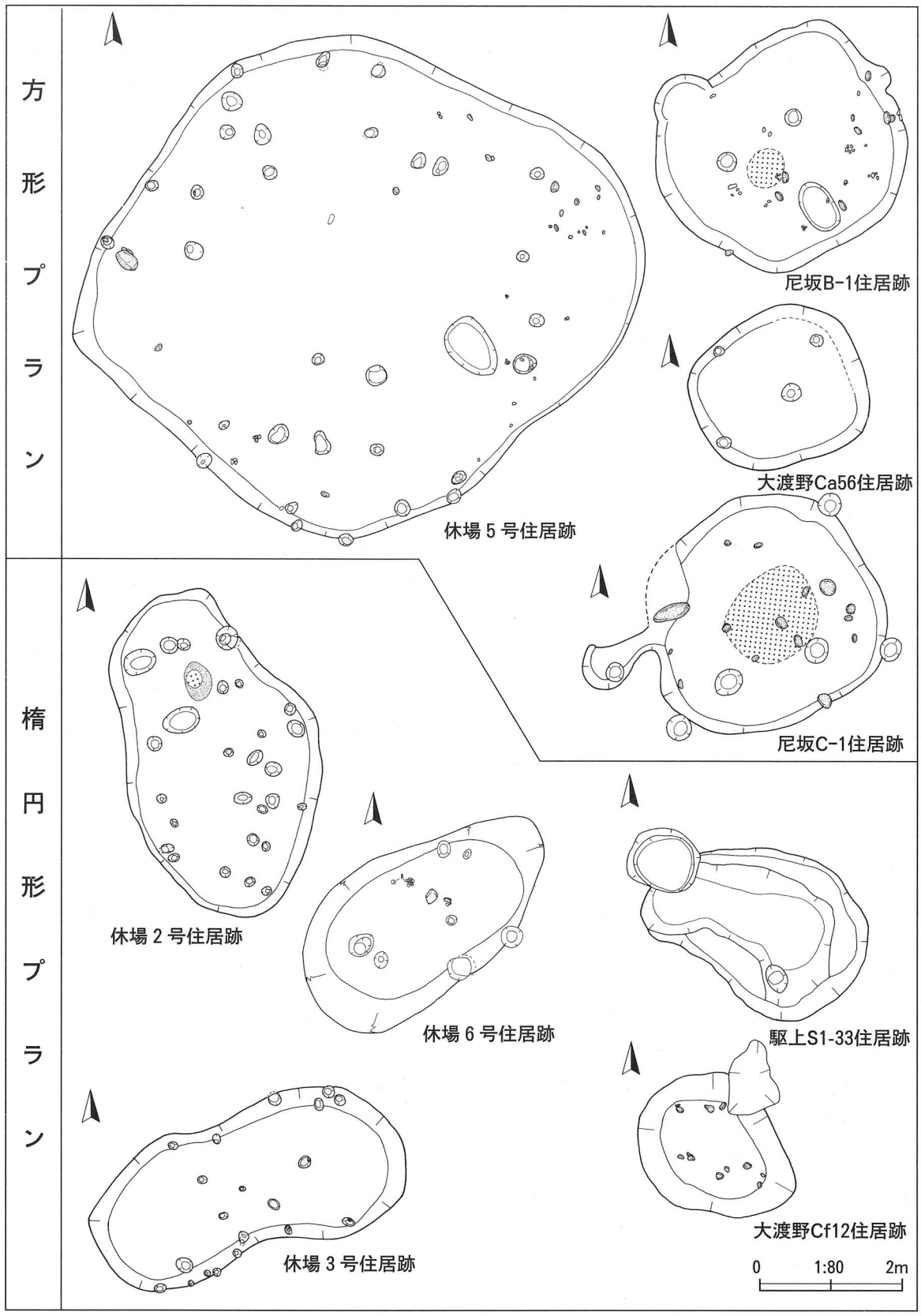
	遺跡名	尼坂遺跡		糀口Ｉ遺跡	駈上遺跡
長方形プラン	遺構名	Ｄ－2住居跡	Ｃ－2住居跡	1号住居跡	ＳＩ－38
	平面形	隅丸方形	ほぼ方形	不整楕円形	ほぼ方形
	規模(m)	4.1×3.0	3.8×2.64	4.25×3.44	2.3×1.6
	炉	－	同時代と思われる焼土遺構2基	－	－
	柱穴	壁際に2基 遺構内に1基	壁際に5基 遺構内に2基	壁際に6基	－
	施設	楕円形の土坑 重複	－	－	焼土遺構と重複
	壁の傾斜	外傾	緩やかに傾斜	緩やか	緩く立ち上がる
	壁高(cm)	2	10	20	30
	遺物出土状況	土器片14点 細片約70点	尖底部含む土器片9点・細片70点 石器33点	半完形の土器片 その他土器片 石器12点	土器片 石匙・石箆

	遺跡名	休場遺跡	大渡野遺跡	尼坂遺跡	
方形プラン	遺構名	5号住居	Ｃａ56住居跡	Ｂ－1住居跡	Ｃ－1住居跡
	平面形	不整隅丸方形	円形ないし楕円形	隅丸方形	隅丸方形
	規模(m)	8.02×6.94	3.5×2.3	3.8×3.0	3.2×3.0
	炉	－	－	中央西側に焼土	中央部に深さ12cmの硬い焼土
	柱穴	遺構内37基	壁際に3基 床面中央に1基	遺構内に2基	壁上に3基 遺構内に2基
	施設	中央南側にピットチィップ110点含む	2m西に屋外炉穴	中央南側にピット 土器砕片・炭化物・灰含む	－
	壁の傾斜	緩やかに外傾	緩い傾斜	外傾	外傾
	壁高(cm)	7.0～15.3	9	20	29
	遺物出土状況	土器片 石器・礫	土器片 石鏃	土器片9点 細片約30点	土器片14点 細片17点 石器54点

	遺跡名	休場遺跡			大渡野遺跡	駈上遺跡
楕円形プラン	遺構名	2号住居跡	3号住居跡	6号住居跡	Ｃf12住居跡	ＳＩ－33
	平面形	不整楕円形	不整楕円形	長楕円形	扁桃形	卵型
	規模(m)	4.68×2.77	4.49×1.74	8.02×6.94	2.4×1.95	3.2×2.1
	炉	厚さ約20cmの焼土 地床炉？	－	－	－	－
	柱穴	46基	35基	19基	－	南西隅に1基
	施設	－	－	－	－	－
	壁の傾斜	緩やかに外傾	外傾	緩やかに外傾	傾斜するが西側は比較的急	－
	壁高(cm)	8.0～17.2	6.0～22.9	1.8～7.0	24	48
	遺物出土状況	土器片 石器・礫	土器片 石器・礫	土器片 礫	土器片 石鏃	－



第46図　岩手県における表裏縄文期の住居跡①



第47図　岩手県における表裏縄文期の住居跡②

(2) 土坑

14基の土坑を検出している。調査区南側、住居検出域を縫うようにある。住居や陥し穴との重複は見られなかった。平面プランは不整円形をはじめとして不整形を呈するものが多く、断面形は皿状を呈するものが多い。土坑の深さは10～20cm・5基、21～30cm・4基、30cm以上・5基と浅い土坑が多い。副穴の検出は6・13・14号土坑で深さは3～5cmと浅い。検出は全て立ちあがり部分である。遺物の出土は1・3・5・7・8・11・12・13・14号土坑で磨耗著しい小破片がほとんどであり、11号土坑からは尖底部の破片が出土している。出土土器は全て縄文時代早期末葉のものと思われる。（平）

(3)陥し穴

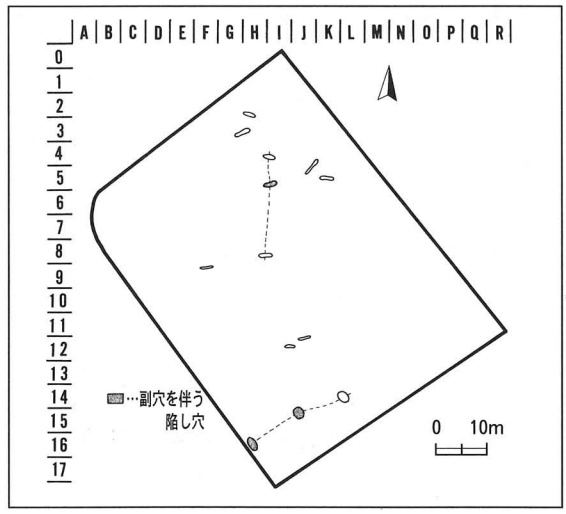
10基の陥し穴を検出している。調査区中央部南北にわたって見られる。形態別では溝形と楕円形の2タイプに分けられる。その中でも副穴？をもつもの・もたないものがあるが検出数が11基と少ないため、あえてここでは2種類とする。又、陥し穴状遺構のまとめについてもここで触れる。陥し穴と陥し穴状遺構と分けた事については、形状は溝形を呈しているが、深さに違いがありすぎ機能を考えた上で浅いものを陥し穴状遺構とした。

＜楕円形＞（1～3号陥し穴）

3基とも調査区南側にて検出された。規模は平均で開口部287×188cm・底部径189×87cm・深さ180cm、断面形は底部から80～95cmまでほぼ垂直に立ち上がりその後緩やかに外傾するビーカー状である。検出面はⅢ層上層と全て同じ面である。副穴を伴うものは1・3号陥し穴で、1号陥し穴は計8基を検出した。深さは18～10cmで底面部の隅に7基・中心に1基ある。3号陥し穴は計5基検出。深さ15～30cmでいずれも底面部の隅に寄っている。副穴の配置に顕著な規則性は見られない。埋土は上層に十和田中掫浮石を含んでレンズ状堆積をする。この堆積層から底部までは1m以上あることから縄文時代早期後葉の遺構の埋土上位に堆積しているものと考えることができる。それぞれの長軸は北西－南東方向に向き、有意の配列を示していると考えられ、獣道の存在が窺われる。配列は東側から3・1・2号陥し穴と続き、それぞれの距離は9.60m・7.70mである。（図48）

＜溝形＞（4～11号陥し穴）

調査区中央部南北に沿って検出された。規模については最小で開口部径2.93×0.5m、最大で3.40×0.9m深さは92～113cmである。底面はほぼ平坦で、長軸の断面は底部近くがオーバーハングするもの、短軸は底面から垂直に立ち上がるY字状のものがほとんどである。埋土は上位に黒色土ないし黒褐色土・中位に褐色土ないし黄褐色土・下位に黒色土ないし黒褐色土を主体としている。6号陥し穴について、埋土は極めて粘性が強く長軸方向東側底面には開口部径0.18×0.20m、深さ18cmの副穴？が見られる。このような柱穴は他の陥し穴にはみられなかった。有意の配列については7・6・9号陥し穴の長軸はほぼ東－西を向きそれぞれの距離は4.60m・13.50mである。その他の陥し穴について、有意の配列を示すものは見られないが長軸方向の向きはほぼ東－西を向いている。



第48図　陥し穴配列図

＜陥し穴状遺構＞

1号陥し穴状遺構は調査区南側2・3号住居と4号陥し穴にはさまれるように検出され、長軸方向は4号陥し穴とほぼ同じ東―西を向いている。2号陥し穴状遺構は調査区北部10号陥し穴横に検出され、長軸方向は南西―北東を指す。深さは20cm程度と浅いため、陥し穴として十分に機能されたかは不明である。

（平）

(4) 焼土遺構

3基検出している。いずれもⅢ層上面で検出されており、厚さは8～26cmである。場所は住居の検出が多い南側で検出されている。全て現地性の焼土で焼成面が単独で存在した屋外の地床炉と思われる。埋土中には遺物・炭化材の確認はできなかったが、2号焼土からは細かい炭化粒が含まれ、3号焼土からは焼土下の黒褐色土より同様の炭化粒がみられた。周辺より柱穴などの痕跡は確認できなかった。（平）

2　遺物

全部で大コンテナ4箱分の遺物が出土した。ここでは出土量の多い土器および石器について若干のまとめを行いたい。

(1) 土器

器面の表裏に縄文や条痕が施された尖底深鉢土器が出土している。出土した土器は胴部の小破片が殆どで、磨耗が著しく残存状態は極めて悪い。器形は全体が残る資料が少ないが、3号竪穴住居から得られた31・32は尖底を呈する深鉢土器で、口縁部がやや外傾するものである。また、底部破片が全体で3点得られたが、形状は全て尖底であった。胎土は繊維を含まないものと、少量の繊維を含むものがあり、後者をスクリーントーンによって示した。また、ほとんどの土器は焼成不良で、土器の断面が黒色を介したサンドイッチ状を呈する。口縁部の文様には横位平行沈線や沈線下に巡る原体末端圧痕、口唇部の刺突や刻目、貝殻条痕＋原体末端圧痕などが認められる。地文はＬＲ・ＲＬの単節縄文がみられ、横位に施されるものが目立つ。これらの土器は施文手法などの特徴から、青森県八戸市の赤御堂遺跡出土の第Ⅴ群土器や、宮城県石巻市の梨木畑貝塚出土の梨木畑式土器に相当するものと考えられ、これらとの関連性も示唆される。

＜分類について＞

本書では遺跡から出土した土器を、遺構外のものも含めて下記の通り分類し観察表に掲載した。分類は施文手法に主眼を置き、調整等を合わせて行った。小破片がほとんどであり、不明な点が多いことから、器形や底部の形態は主要な属性として扱わなかった。なお、土器は小破片のうえ、ゆがみが大きいものや、磨耗のため繊維の方向が判定しにくいものが多く存在する。その為、遺物の天地（上下）や原体についての間違いが少なからず存在している可能性があることを先にお断りしておく。

Ⅰ類　外面が単節縄文、内面にナデ・指頭圧痕が施されている土器　（遺物番号1.2.5.8.10～13.15.18.19.29.38.43.46～55.74.77.78.108.110.111.114.119.121～129.132.143～147.149）

Ⅱ類　内外面とも単節縄文が施されている土器　（遺物番号3.4.6.7.9.14.16.30～37.39.44.76.109）

Ⅲ類　外面が単節縄文、内面に貝殻条痕が施されている土器　（遺物番号112.113）

Ⅳ類　口縁部文様帯に貝殻条痕＋原体末端圧痕、胴部に地文が施される土器　（遺物番号150）

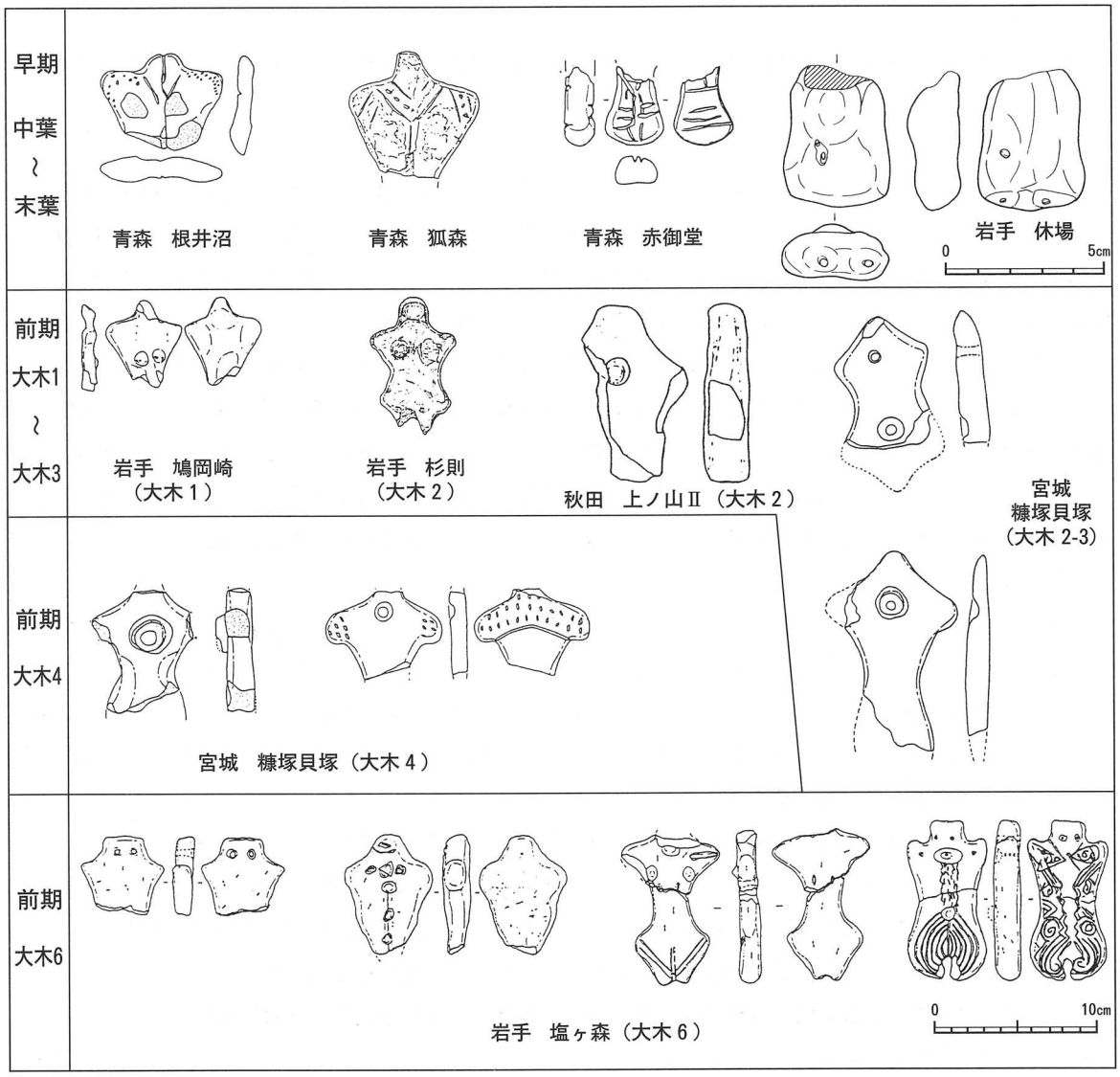
Ⅴ類　その他　（遺物番号11.17.45.133.148）

（中村）

(2)土製品

2号住居南側床面より土器片にまじって1点出土した。長さ4.5cm・幅3.4cm・厚さ1.7cm・重さは18gで、にぶい黄橙色～明黄褐色を呈す。特徴は①4.5cm程の小型のものである。②中央部に凸状のふくらみを持つ。③下面に刺突を持つことがあげられる。この性格については明確性がないため、①～③をふまえ近県・同県にて出土した類似の土製品例をあげておきたい。早期中葉の貝殻沈線文土器様式期のものとして、青森県の根井沼遺跡・狐森遺跡より土偶として出土している。文様は細かな刺突文と沈線文が施されている。後葉になると小型・細身で幾何学的な沈線が施された板状を呈した土製品が青森県八戸市の赤御堂遺跡より出土している。前期に入ると県内でも出土例が増え、大木1式期・江釣子村鳩岡崎遺跡、大木2a式期・花泉町杉則遺跡、大木6式期・雫石町塩ヶ森遺跡があげられる。近県では秋田県の上ノ山Ⅱ遺跡、宮城県の糠塚貝塚遺跡等からも出土している。当遺跡出土の土製品も類似する事例として事実報告のみにとどめたい。

（平）



（原田昌幸 1997 発生・出現期の土偶総論 より一部抜粋）

第49図　県内近県における早期～前期の土偶土製品

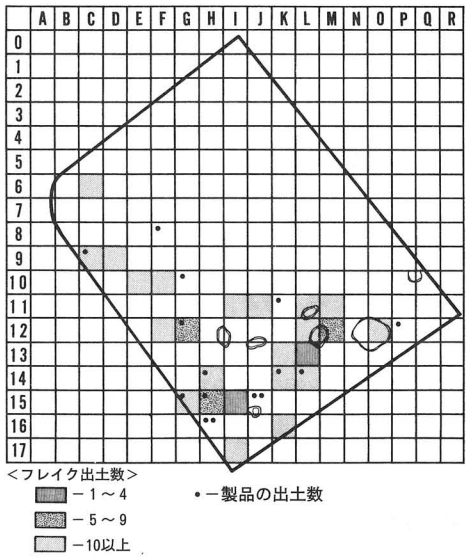
(3) 石器

石器の全点数は573点で、遺構内より469点、遺構外より104点が出土した。このうち明瞭な使用痕の認められない剥片やチップ類を除いた104点を掲載した。掲載した石器の石材は剥片石器では頁岩が90%、礫石器では安山岩が81%を占め、登録外の石器についてもほぼ同率で石材を用いているものと思われる。いずれの石材も周辺部から容易に入手できるものである。

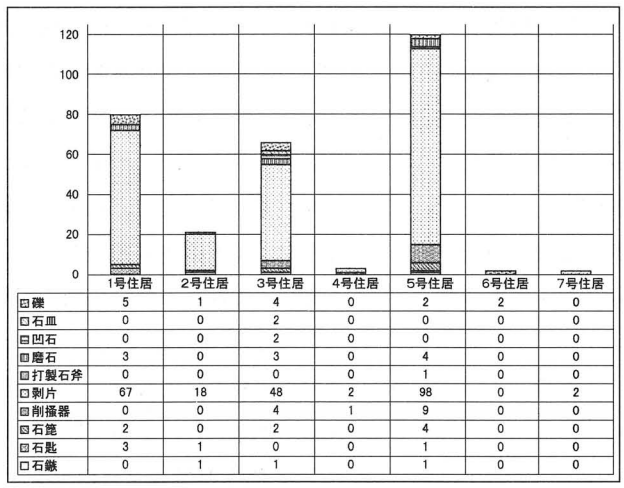
竪穴住居跡においての器種組成は第3表に示したとおりである。1・3・5号住居からの出土が断然多いがその出土量の差については土器の出土量や住居の床面積とは比例しておらず、その関係については不明である。出土した石器は剥片類が80%を占める。製品では磨石や石匙・石篦が見られ、その中での欠損品は約半数を占めている。遺構外出土については第50図に示したが、生活域だったと考えられる住居検出区域に多く出土している。製品の出土は少なく15点で、その内の約60%は欠損品である。

全体の石器の組成（剥片・チップ類483点を除いた90点の割合）については、石鏃は8点（10%）、石匙13点（15%）、石篦13点（15%）、石錐1点（1%）、削掻器36点（37%）、打製石斧3点（4%）、磨石12点（14%）、凹石2点（2%）、石皿2点（2%）、である。石鏃は全て無茎のもので、円基が6点、凸基が2点である。完形で出土したものは3点で、その他は全て尖頭部が欠損している。石匙は13点で縦型が12点、横型が1点で、縦型のほとんどが細長く対照的な形をした柳葉状のものである。石篦で完形のものは9点と他の製品に比べ欠損している割合が低い。刃部の欠損しているものが1点、基部の欠損しているものが3点である。

剥片石器の製品数は全体の出土数に比べると少なく、礫石器についても同様のことが言える。また、欠損品が半数を占めていることも特徴の一つとして窺われる。（平）



第50図　遺構外石器出土点数



	1号住居	2号住居	3号住居	4号住居	5号住居	6号住居	7号住居
礫	5	1	4	0	2	2	0
石皿	0	0	2	0	0	0	0
凹石	0	0	2	0	0	0	0
磨石	3	0	3	0	4	0	0
打製石斧	0	0	0	0	1	0	0
剥片	67	18	48	2	98	0	2
削掻器	0	0	4	1	9	0	0
石篦	2	0	2	0	4	0	0
石匙	3	1	0	0	1	0	0
石鏃	0	1	1	0	1	0	0

第3表　竪穴住居における器種組成

おわりに

今回の調査では胆沢扇状地の南部、岩堰川からなる河岸段丘上の平地の一端、約3,200㎡を調査し、その結果、竪穴住居跡7棟、土坑14基、陥し穴11基、陥し穴状遺構2基、焼土遺構3基、柱穴状小ピット10基、溝1条を検出することができた。遺物量は土器1.5箱、石器573点、土製品1点と少なく、しかもほとんどの土器は、破片で磨耗が激しく脆いものであった。そのなかで、3号竪穴住居跡からは2個体の尖底土器が出土し、胆沢扇状地の一端に縄文時代早期後葉の資料が加えられることとなった。残念ながら、この土器も脆く、取り上げ・水洗・接合の段階で砕け、完全な復元とはならなかった。

占地については、ほぼ平坦な立地であり、調査区の北側には陥し穴を中心に、南側には竪穴住居跡や土坑、焼土遺構を中心とする。調査区外の南側にある畑からは石鏃があったと地主の方からの話もあり、居住の範囲は南側にも伸びる可能性がある。

現在の遺跡の立地は、ほぼ平地で近くには小さな沢が点在し人間が生活する上での水源には恵まれているように思われる。しかし、この水源が6,000年以上も前から安定した水の供給が可能であったか否かは知り得ないが、この立地や水源を求め、狩猟を行い、この地に定着し、生活した人々がいたことは事実である。

最後にこの内容については、筆者の不勉強もあり、解釈や位置づけなど誤っている部分も多いと思うが、ご容赦いただければ幸いである。　（平）

参考・引用文献

（財）岩手県埋蔵文化財センター　1979「大渡野遺跡」
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－Ⅱ－ 第32集』
（財）岩手県埋蔵文化財センター　1999『尿前Ⅱ遺跡Ａ地区発掘調査報告書 第288集』
（財）岩手県埋蔵文化財センター　1988『飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書 第120集』
（財）岩手県埋蔵文化財センター　1997『下尿前Ⅱ遺跡発掘調査報告書 第252集』
（財）岩手県埋蔵文化財センター　1992『糀口Ⅰ遺跡発掘調査報告書 第175集』
八戸市教育委員会　1988『赤御堂遺跡発掘調査報告書 第33集』
八戸市教育委員会　1975『赤御堂遺跡発掘調査概要報告書』
青森県教育委員会　1980『長七谷地貝塚発掘調査報告書 第57集』
胆沢町教育委員会　1992『尼坂遺跡　－第二次緊急発掘調査報告書 第22集－』
胆沢町　1971『胆沢町史Ⅰ　原始古代編』
水沢市教育委員会　1982『駈上遺跡発掘調査報告書 第７集』
中村哲也・坂本真弓　1998「青森県の縄文早期住居集成」『研究紀要第３号』
青森県埋蔵文化財調査センター
原田　昌幸　1997「発生・出現期の土偶総論」『土偶とその情報研究論集（１）』
田村　壮一　1987「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要Ⅶ』
岩手県埋蔵文化財センター
加藤晋平／小林達雄　他　1983「道具と技術」『縄文文化の研究 7』
町田勝則　1996「石器の研究方法」『（財）長野県埋蔵文化財センター研究論集』
稲野裕介　1998「北上川中流域における板状Ｏ脚土偶とそれ以外の形態について」
『野村先生還暦記念編集　北方の考古学』

Ⅵ　分析・鑑定

1　休場遺跡の出土炭化材の年代測定について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

休場遺跡は、胆沢扇状地の開析段丘（中位段丘）上に立地する。今回の発掘調査により、縄文時代早期～前期の集落が出されている。今回の自然科学分析調査では、これらの時期のものと考えられている炭化材の年代に関する情報を得るために、放射性炭素年代測定を行う。

(1)　試料

試料は、休場遺跡出土炭化材の１点である。

(2)　分析方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定研究室の協力を得た。なお、年代値の算出には14Ｃの半減期として、LIBBYの半減期5,570年を使用した。

(3)　結果

測定結果は、2460±60．B．P（Gak－20094）であった。なお、この年代値は同位立効果の補正をした結果である。

(4)　考察

今回得られた年代値は、これまでの資料からみて、縄文時代晩期にあたると考えられる（キーリ・武藤1982)。これは、出土遺物等から想定されている、縄文時代早期～前期より数千年新しい値である。したがって、本試料は後世の新しい炭素（例えば植物の根やカビなど）によって汚染されたか、縄文時代早期～前期以降の新しい炭化材の可能性がある。出土状況を改めて確認したい。

引用文献

キーリC.T.・武藤康弘（1982）4．年代　縄文時代の年代．縄文文化の研究　第１巻　縄文人とその環境，p.246－275，雄山閣出版．

2　休場遺跡の火山灰分析について

はじめに

休場遺跡は、胆沢扇状地の開析段丘（中位段丘）上に立地する。今回の発掘調査により、縄文時代早期～前期の集落が出されている。また、該期の土坑の埋土上位には、テフラに由来すると考えられている軽石のブロック状堆積物が検出されている。今回自然科学分析調査では、このブロック状堆積物を対象に、テフラ分析および屈折率測定、重鉱物分析、火山ガラス比分析を行い、テフラの特徴を捉える。

(1)　試料

試料は、「ＹＢ－98　３号陥し穴２休場遺跡火山灰」とされる、褐色砂混じりシルトである。

(2)　分析方法

a・テフラ分析・屈折率測定

試料は、適量を蒸発皿にとり、水を加え、超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰

り返すことにより、泥分を除去する。得られた砂分を実体顕微鏡および偏光顕微鏡下で観察し、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石の産状を調べる。さらに、火山ガラスの屈折率の測定を行う。以上の観察および屈折率の測定結果から、テフラの同定を行う。なお、屈折率の測定は、古澤（1995）に示された温度変化型屈折率測定装置を用いて行う。

b・重鉱物分析

試料約40ｇに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4㎜－1/8㎜の砂分を、ポリタングステート（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを、「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は、「その他」とする。

c・火山ガラス比分析

重鉱物分析の処理により得られた軽鉱物分を偏光顕微鏡下にて観察、火山ガラスとそれ以外の砕屑物250粒計数し、砕屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、便宜上軽鉱物に含め、その形態によりバルブ型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バルブ型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

(3) 結果

a・テフラ分析・屈折率測定

試料中には、中砂～粗砂径で発泡が良好～やや良好の白色の軽石が、中量含まれる。また、軽石の中には、繊維束状に発泡した軽石も認められる。さらに、中量の細砂～極細砂径の無色透明の火山ガラスが含まれる。火山ガラスの形態は、スポンジ状に発泡した軽石型火山ガラスおよび気泡の長く伸びたものが集まった繊維束型が比較的多く、薄手平板状のいわゆるバルブ型も認められる。火山ガラスの屈折率は、平均値1.5118、最小値1.5097、最大値1.5142であった。

b・重鉱物分析

結果を表1・図1に示す。試料中の重鉱物は、斜方輝石が最も多く次に単斜輝石、不透明鉱石を含む。

c・火山ガラス比分析

結果を表1・図1に示す。試料中には、軽石型火山ガラスが比較的多くバルブ型火山ガラスが微量含まれる

(4) 考察

今回の分析結果と、町田ほか（1984）Hayakawa, Y.（1985）、Arai et. al.（1986）、町田・新井（1992）等の記載および検出層準から、本試料中の軽石や火山ガラスは約5500年前に十和田カルデラより噴出した

表1　重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料名	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
YB-98 1号土坑2	2	135	57	2	35	19	250	15	1	110	124	250

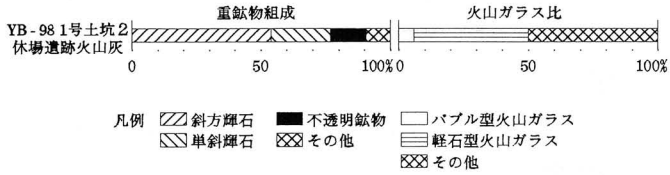


図1　重鉱物組成および火山ガラス比

分析鑑定の表グラフ

Ｔｏ－Ｃｕに由来すると考えられる。このことは、本試料が縄文時代早期～前期の土坑埋土上位から検出されていることと整合する。

引用文献

Arai, F., Machida, H, Okumura, K., Miyauchi, T., Soda, T., and Yamagata, K. (1986) Catalog for Late Quaternary Marker－Tephras in Japan Ⅱ－Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido －, Geographical of Tokyo Metropolitan University, 21, p. 223－250.

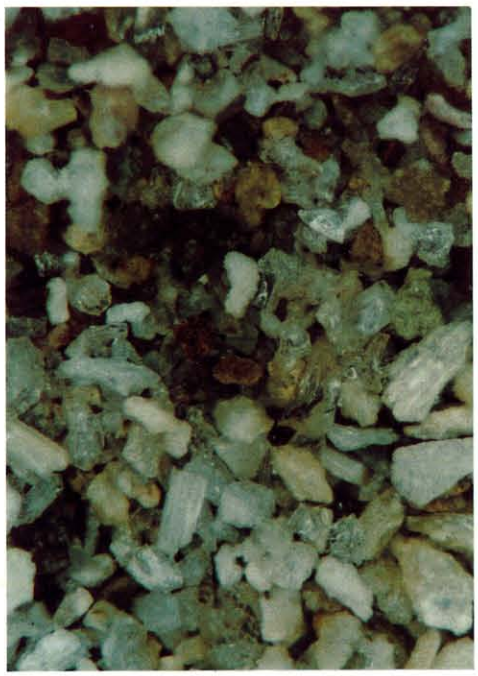
古澤　明（1995）火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な分析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, p. 123－133.

Hayakawa, Y. (1995) Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bull. Earthq. Res. Inst., Univ. Tokyo, 60, 507－592.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス. 276p., 東京大学出版会.

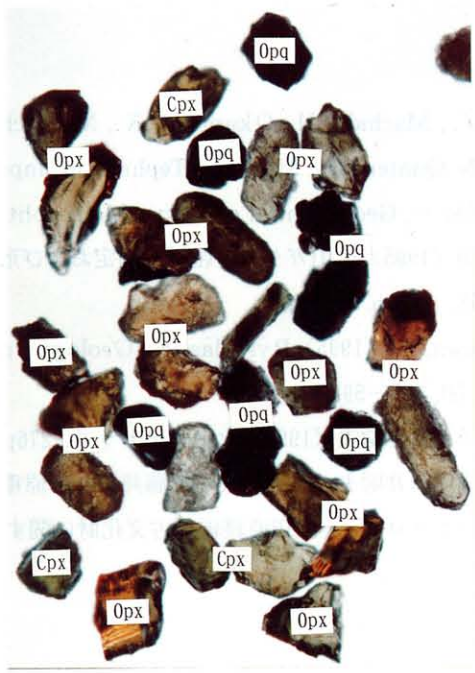
町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重雄（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－. 渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p. 865－928.

図版１　軽石・重鉱物・火山ガラス



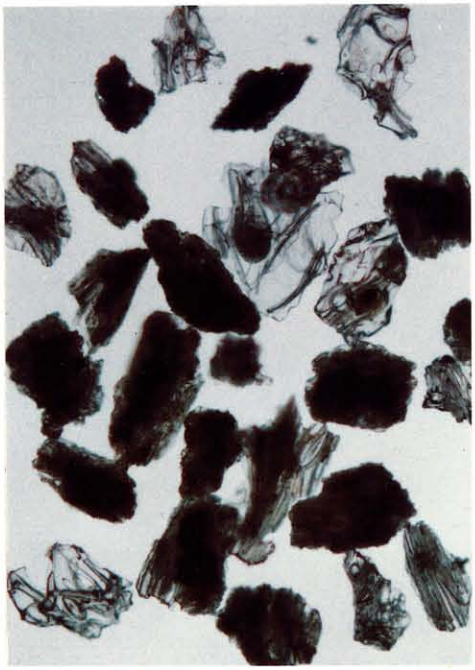
1. Ｔｏ-Ｃｕ軽石　0.5mm

(1)



2. 重鉱物　0.5mm

(2, 3)



3. 火山ガラス

Opx:斜方輝石. Cpx:単斜輝石. Opq:不透明鉱物.

分析・鑑定・結果　写真

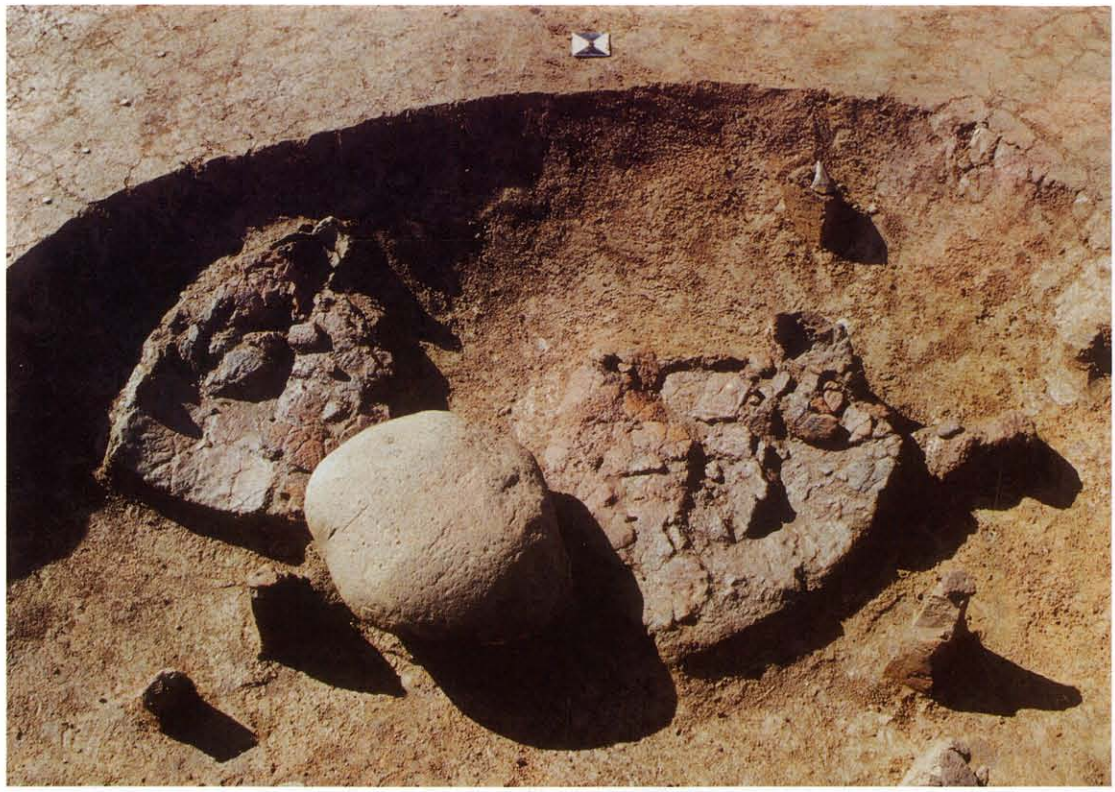
写　真　図　版

調査区遠景　南から

調査区遠景　南東から

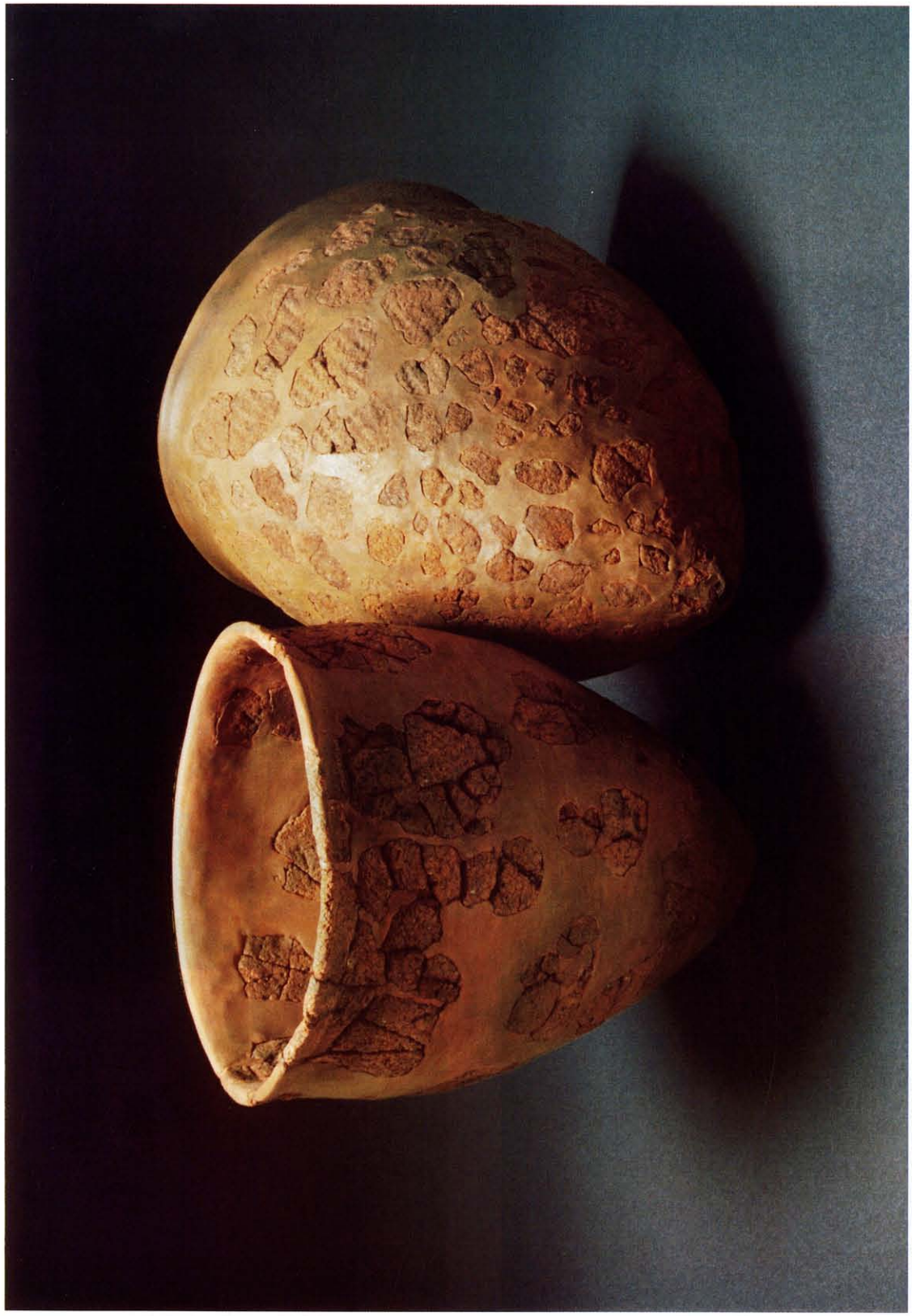
カラー写真図版１　調査区遠景

3号竪穴住居跡



3号住居跡　尖底土器出土状況

カラー写真図版2　3号竪穴住居跡・尖底土器出土状況



3号住居跡　出土土器

カラー写真図版3　3号竪穴住居跡出土土器

調査後全景　南東から

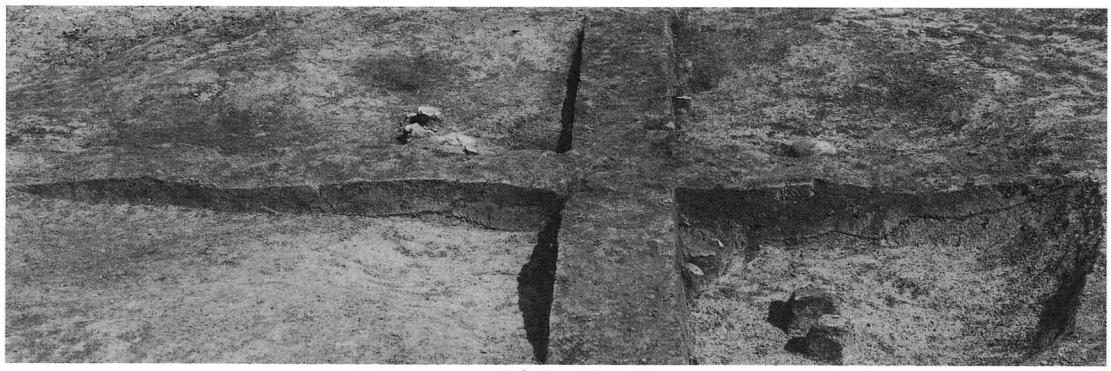
基本土層

調査前　近景　北から

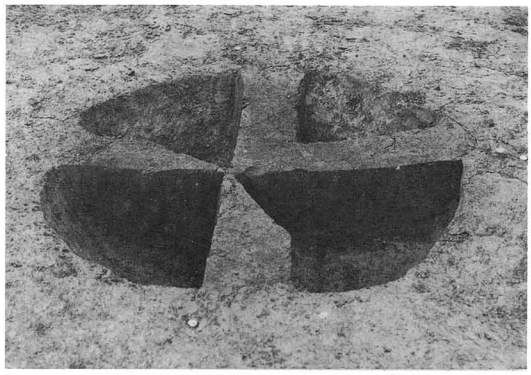
調査前　近景　北西から

写真図版１　調査区遠景・基本土層

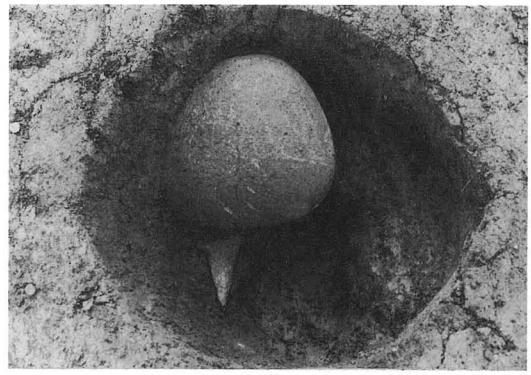
1号竪穴住居跡　平面



1号竪穴住居跡　断面



1号竪穴住居跡　　P2　断面

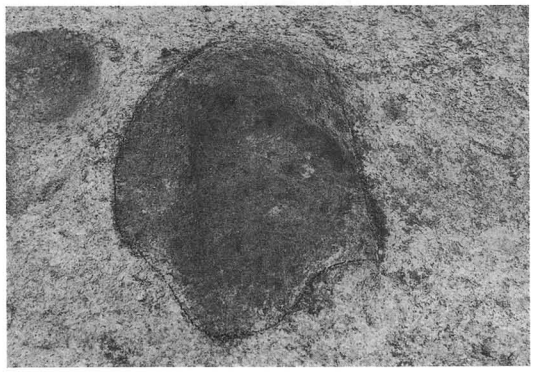


1号竪穴住居跡　　P1　平面

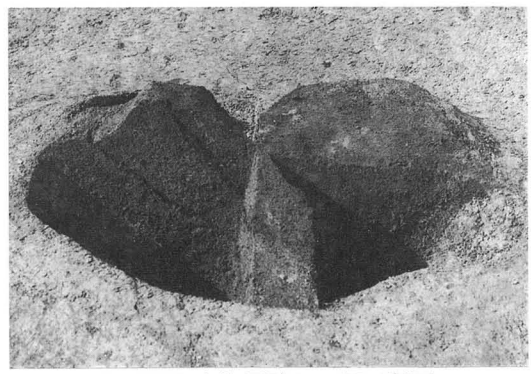
写真図版2　1号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡　平面

2号竪穴住居跡　断面



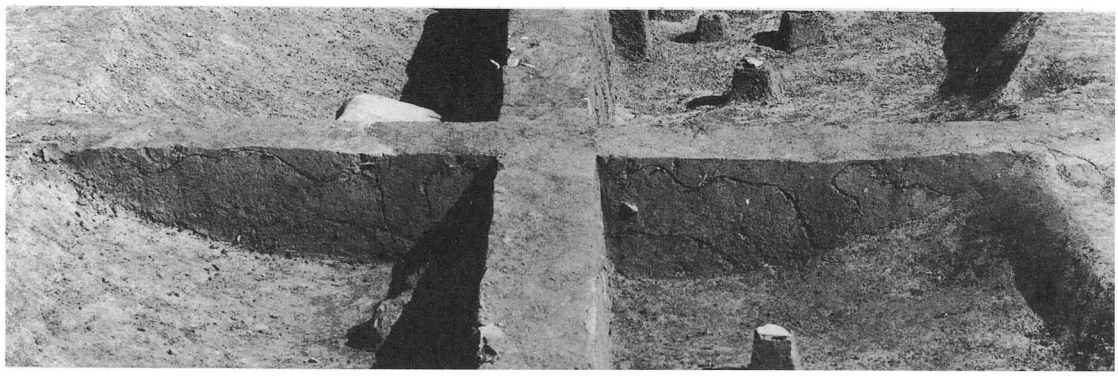
2号竪穴住居跡　　炉　平面



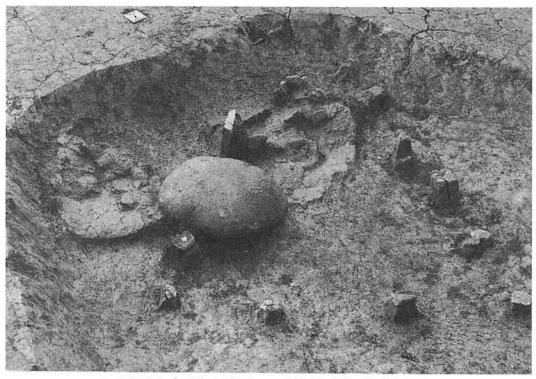
2号竪穴住居跡　　炉　断面

写真図版3　2号竪穴住居跡

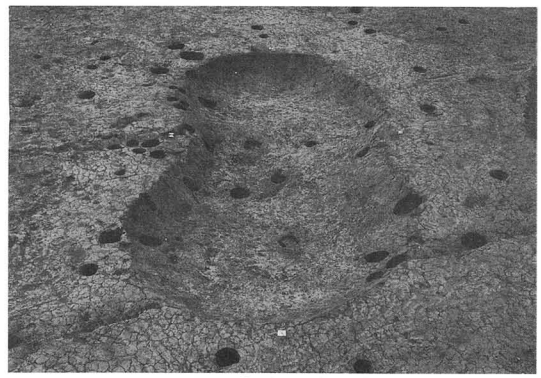
3 号竪穴住居跡　平面



3 号竪穴住居跡　断面

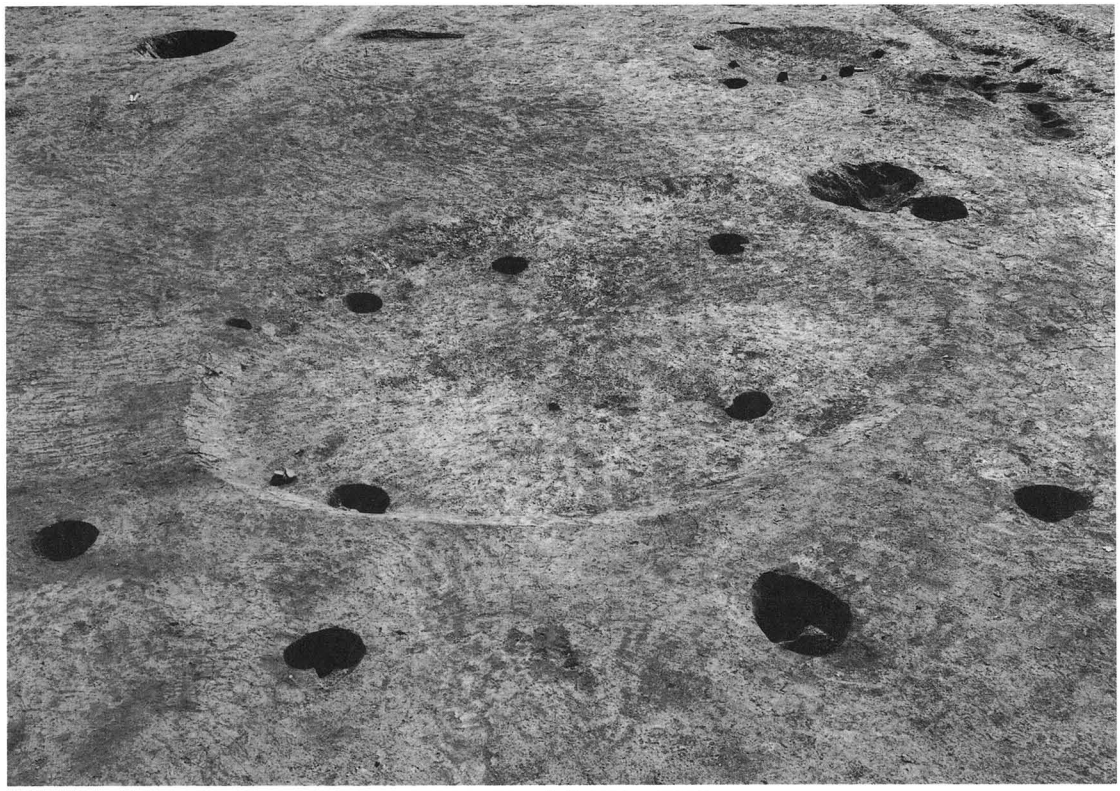


3 号竪穴住居跡　遺物検出状況

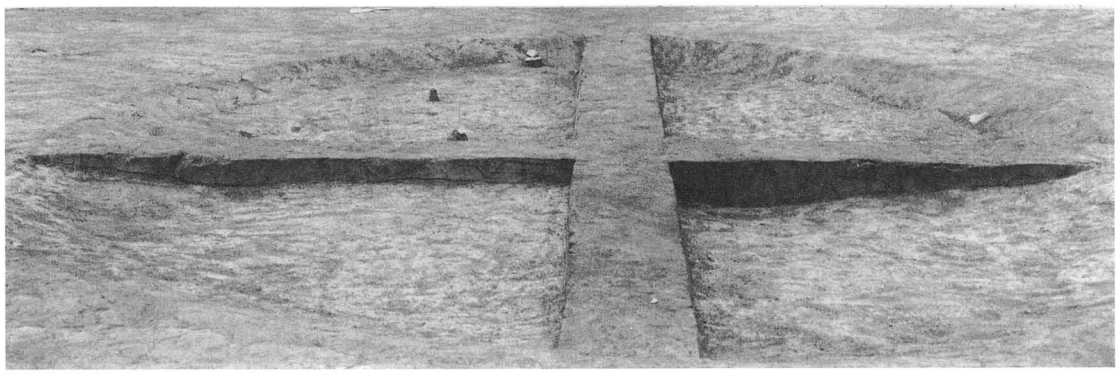


3 号竪穴住居跡　完掘

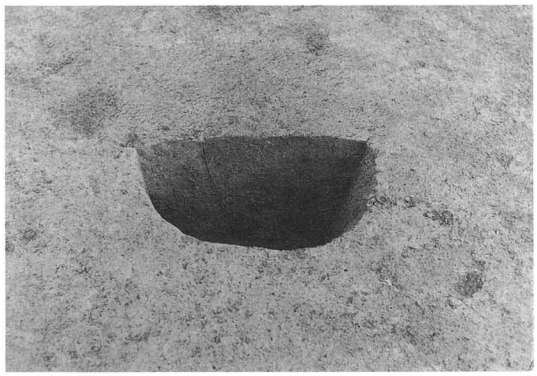
写真図版 4　3 号竪穴住居跡



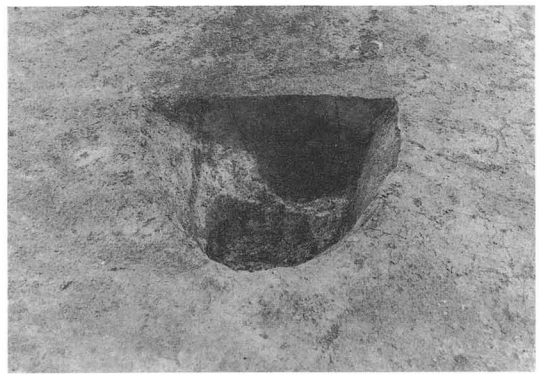
4号竪穴住居跡　平面



4号竪穴住居跡　断面



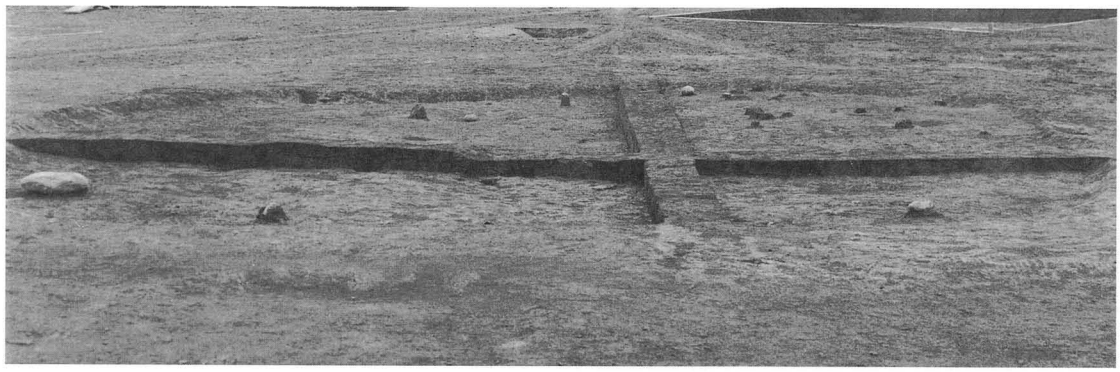
4号竪穴住居跡　柱穴　断面



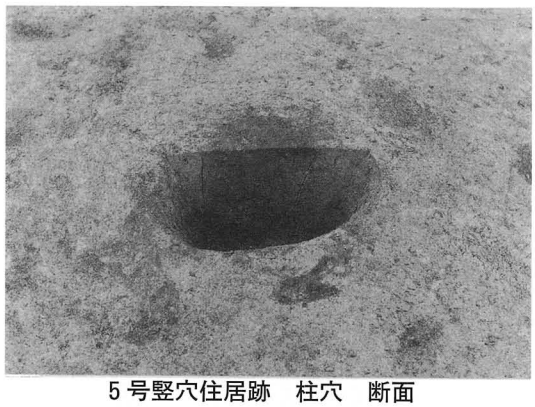
4号竪穴住居跡　柱穴　断面

写真図版5　4号竪穴住居跡

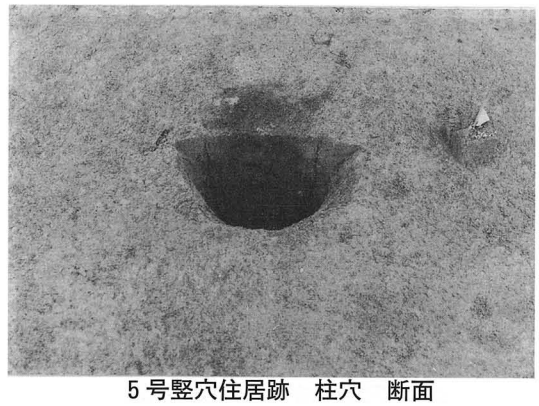
5号竪穴住居跡　平面



5号竪穴住居跡　断面



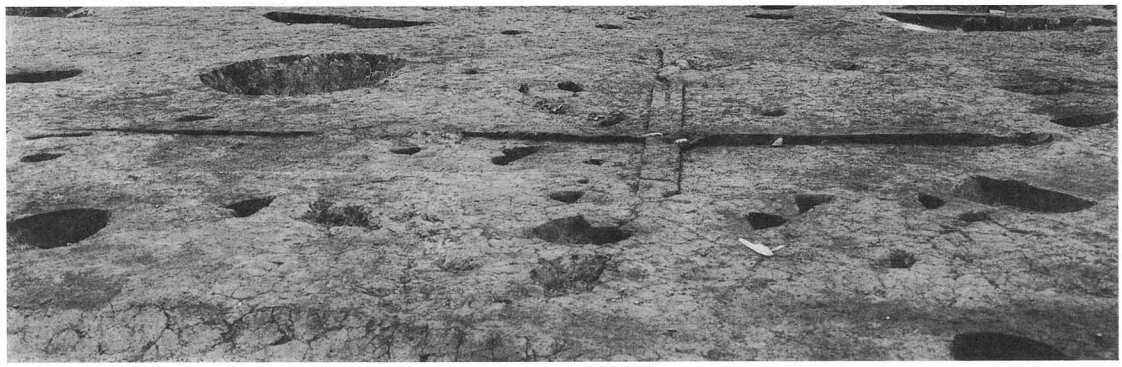
5号竪穴住居跡　柱穴　断面



5号竪穴住居跡　柱穴　断面

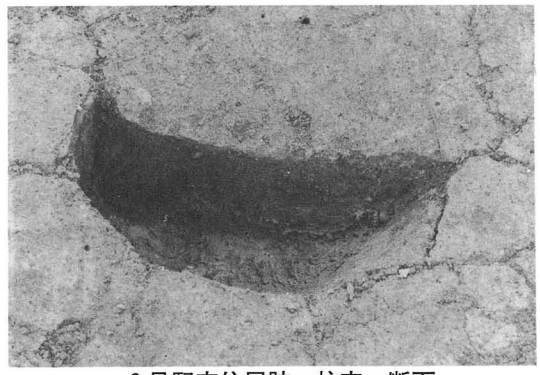
写真図版6　5号竪穴住居跡

6 号竪穴住居跡　平面



6 号竪穴住居跡　断面

6号竪穴住居跡　遺物検出状況

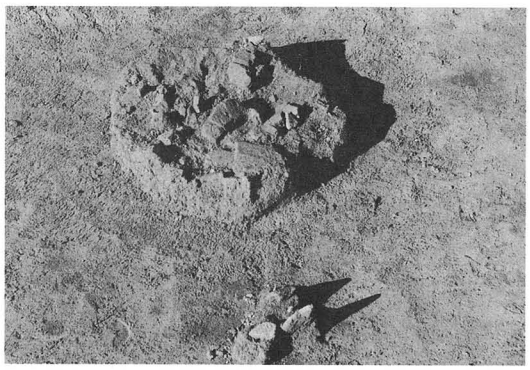


6 号竪穴住居跡　柱穴　断面

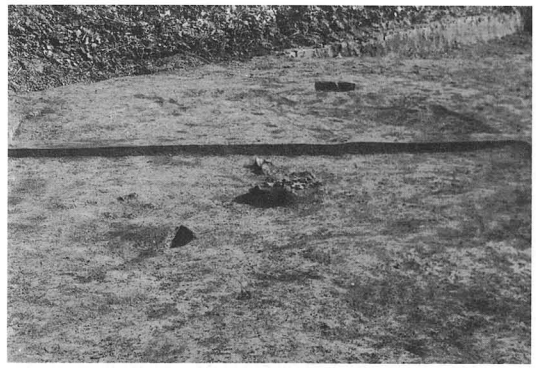
写真図版 7　6 号竪穴住居跡

7号竪穴住居跡　平面

7号竪穴住居跡　断面

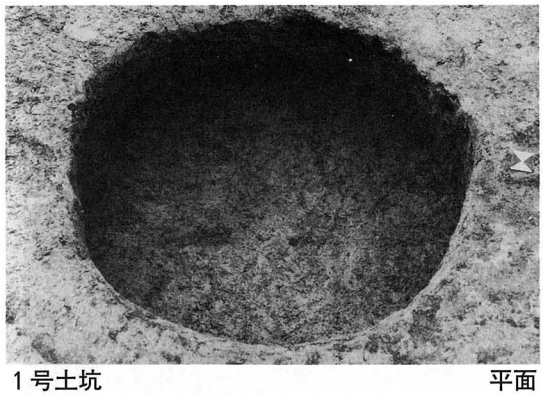


7号竪穴住居跡　遺物検出状況

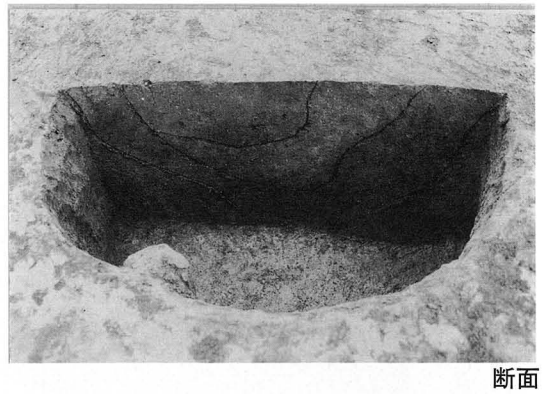


7号竪穴住居跡　断面

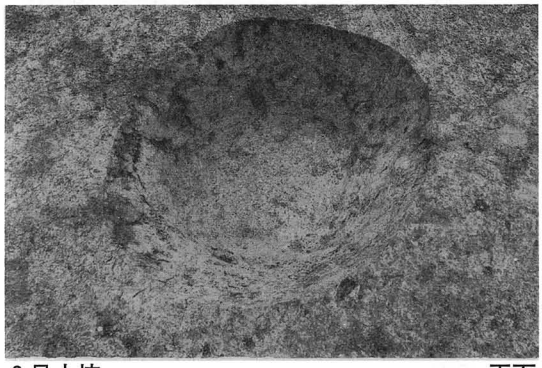
写真図版8　7号竪穴住居跡



1号土坑　平面

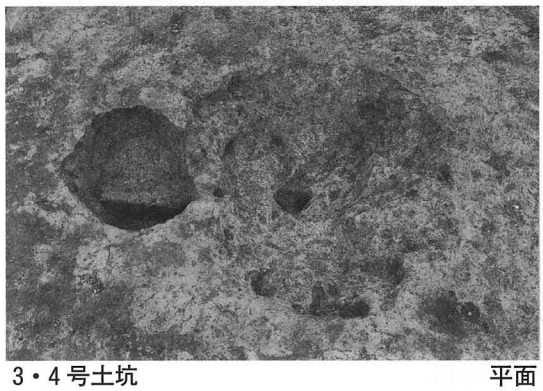


断面

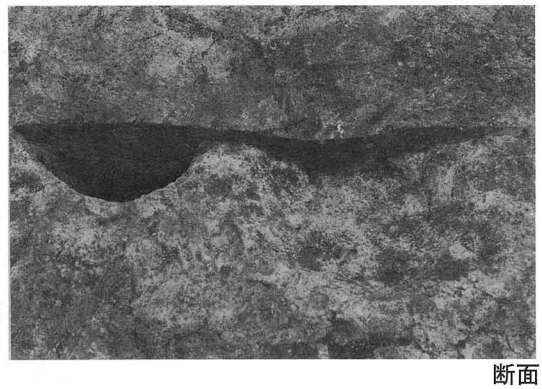


2号土坑　平面

断面

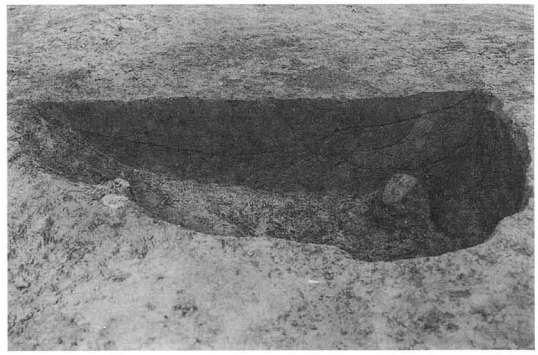


3・4号土坑　平面



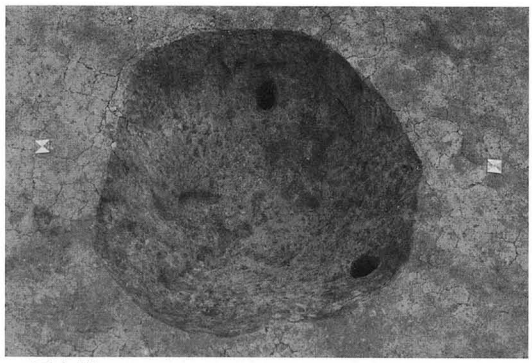
断面

5号土坑　平面

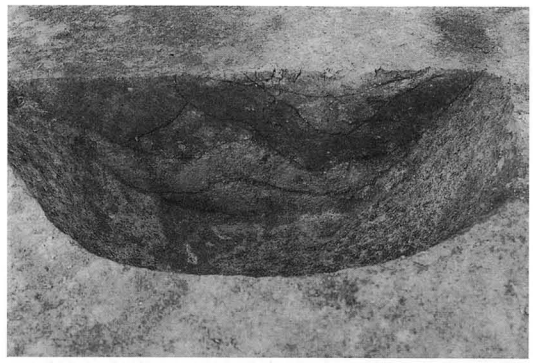


断面

写真図版9　1～5号土坑

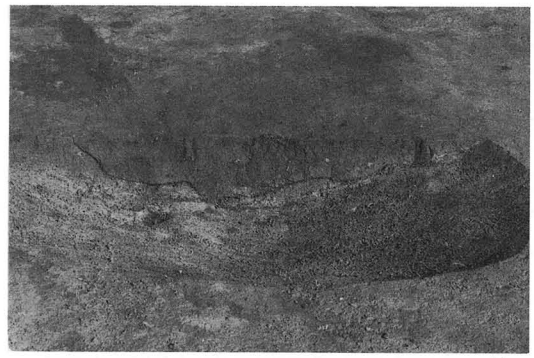


6 号土坑　平面

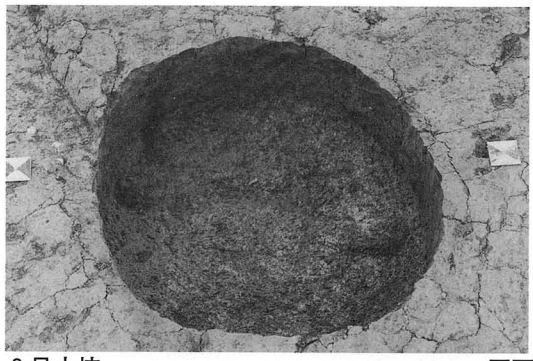


断面

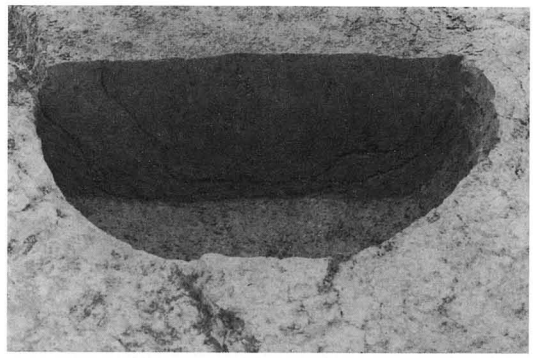
7 号土坑　平面



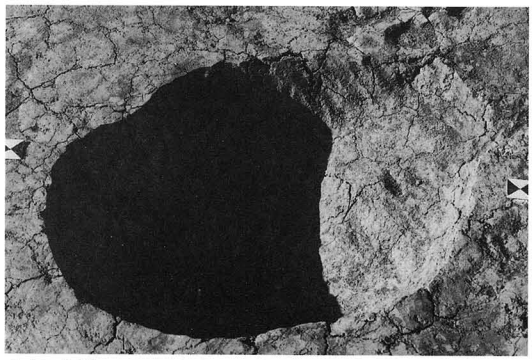
断面



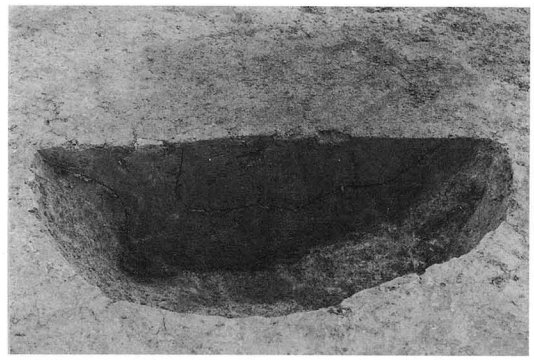
8 号土坑　平面



断面

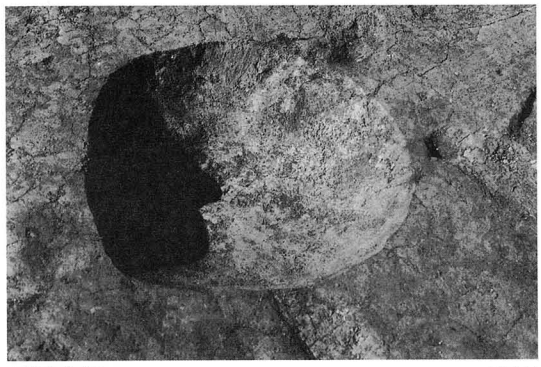


9 号土坑　平面



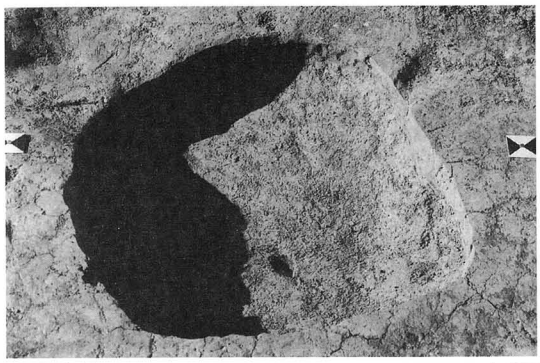
断面

写真図版10　6～9 号土坑

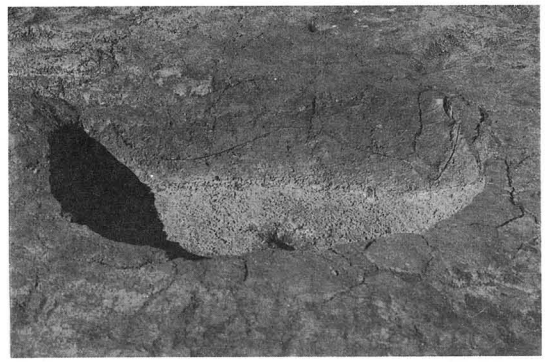


10号土坑　平面

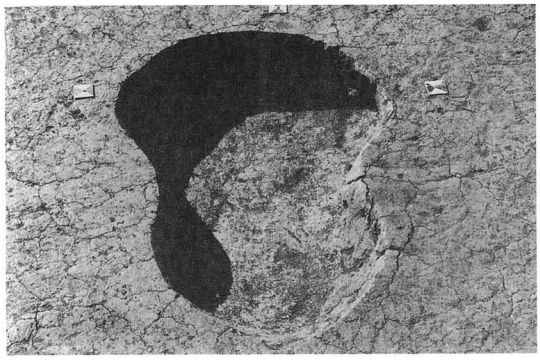
断面



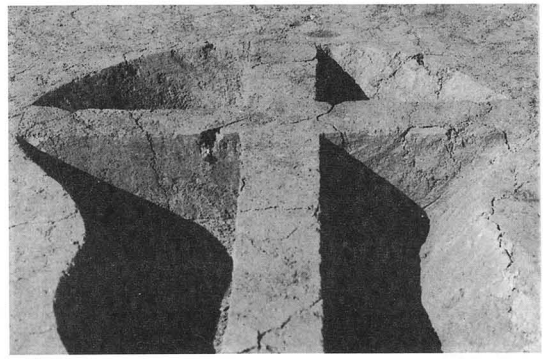
11号土坑　平面



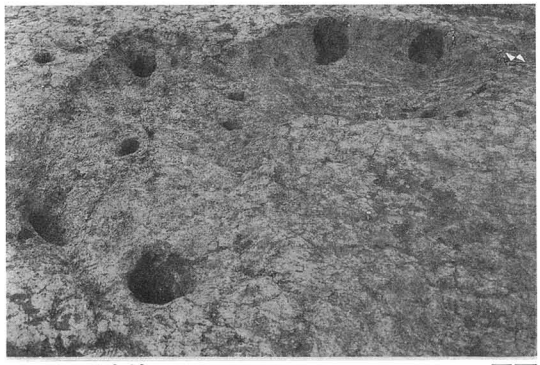
断面



12号土坑　平面



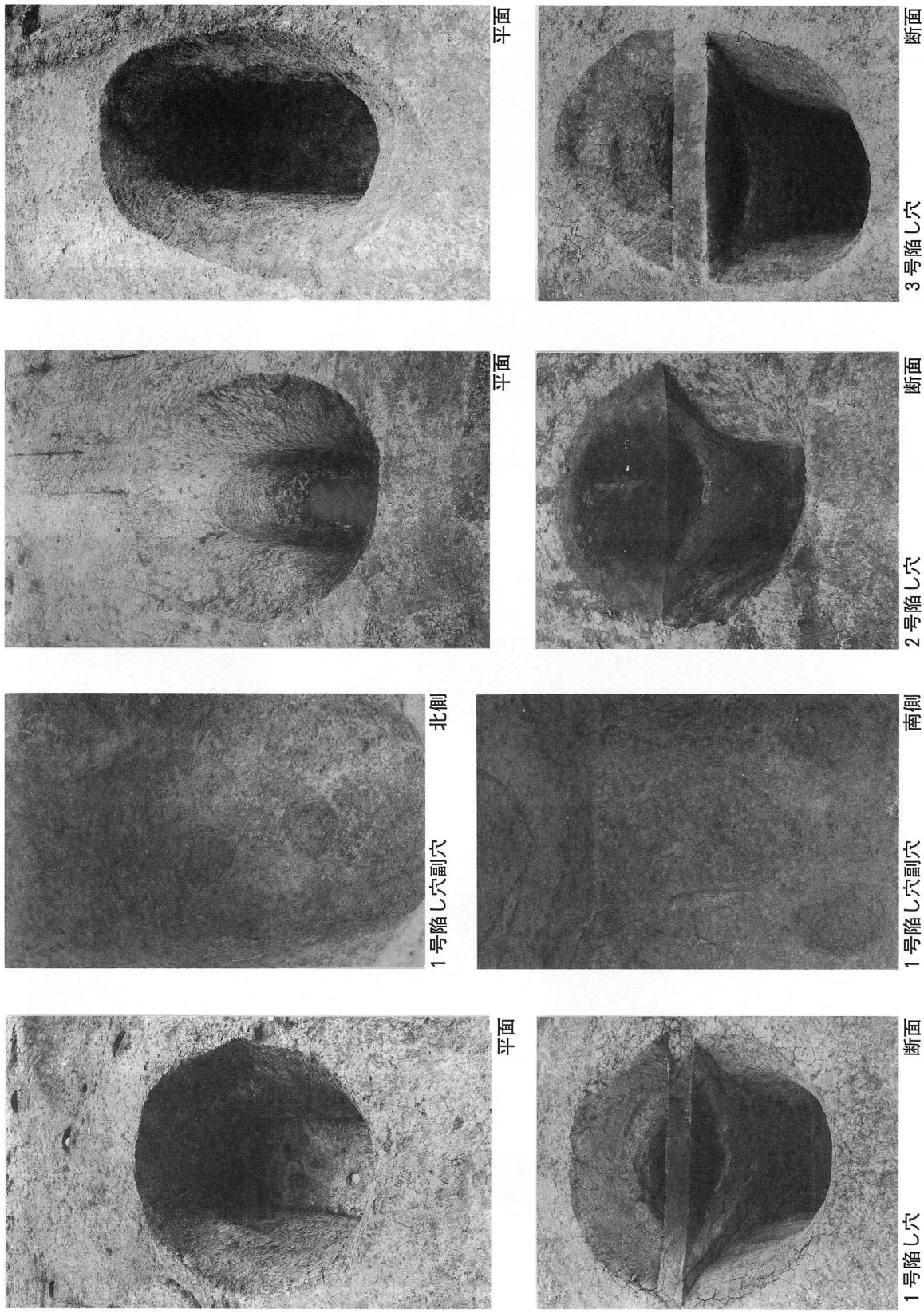
断面



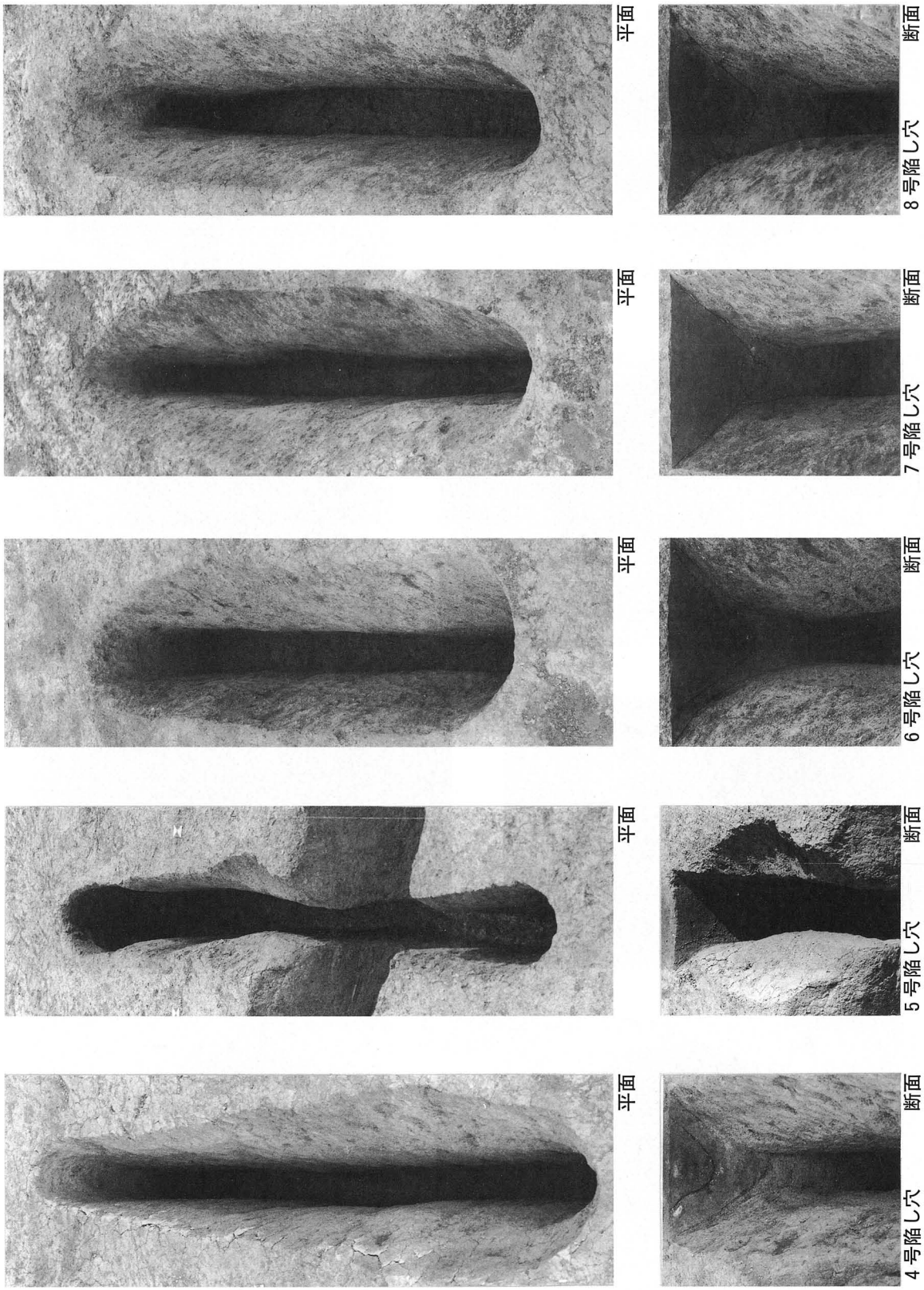
13・14号土坑　平面

断面

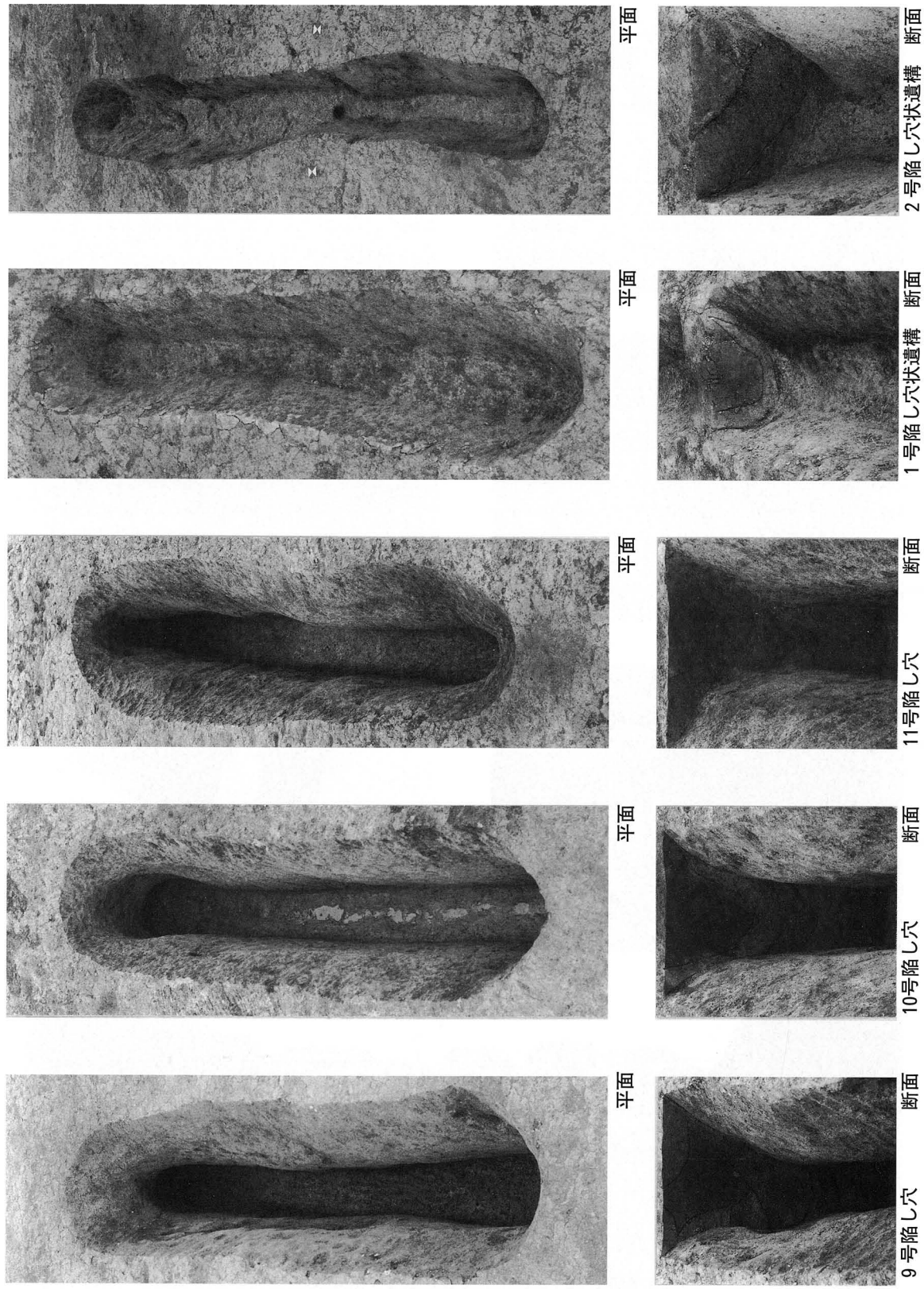
写真図版11　10～14号土坑



写真図版12　1～3号陥し穴・1号陥し穴副穴検出状況

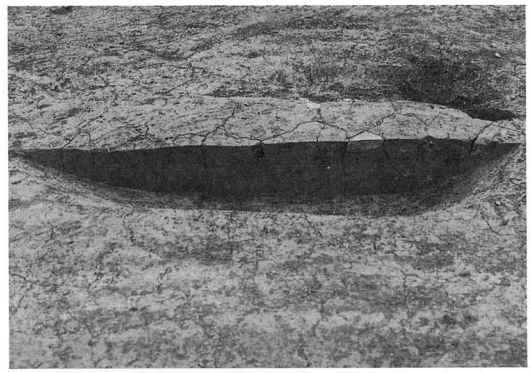


写真図版13　4～8号陥し穴

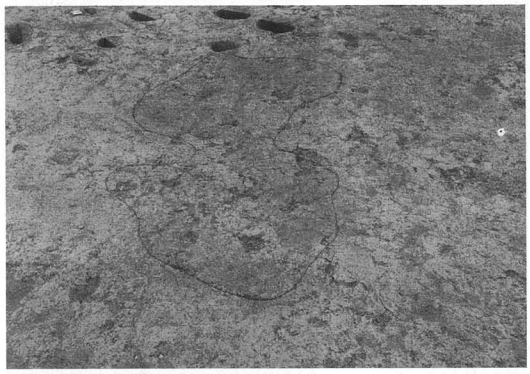


写真図版14　9～11号陥し穴・1・2号陥し穴状遺構

1号焼土遺構　平面



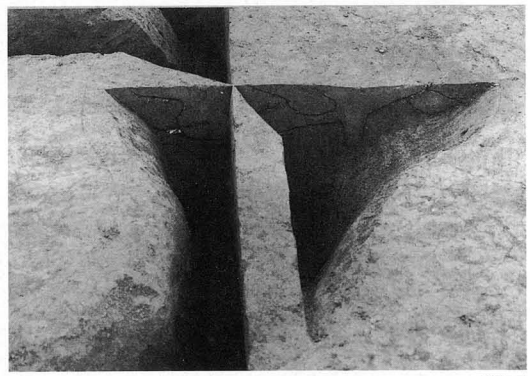
断面



2号焼土遺構　平面

断面

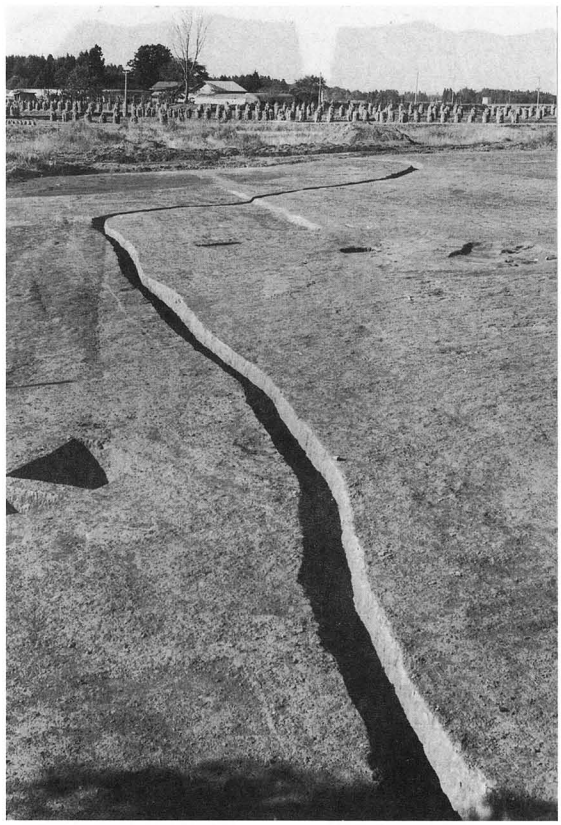
3号焼土遺構　平面



断面

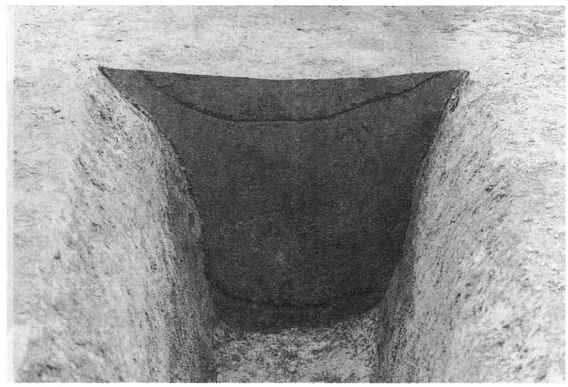
作業風景

写真図版15　1～3号焼土遺構・作業風景



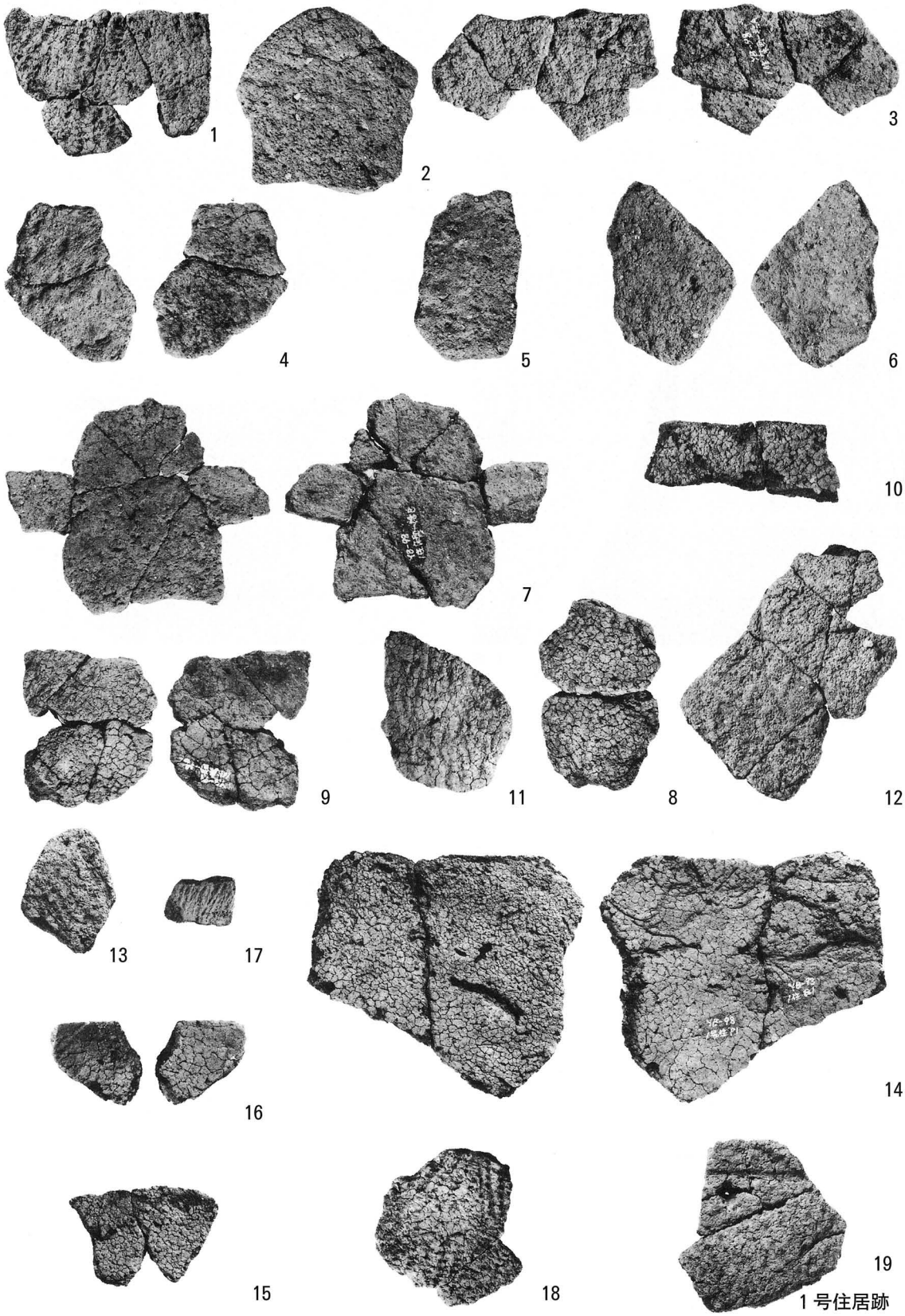
溝跡　平面

断面

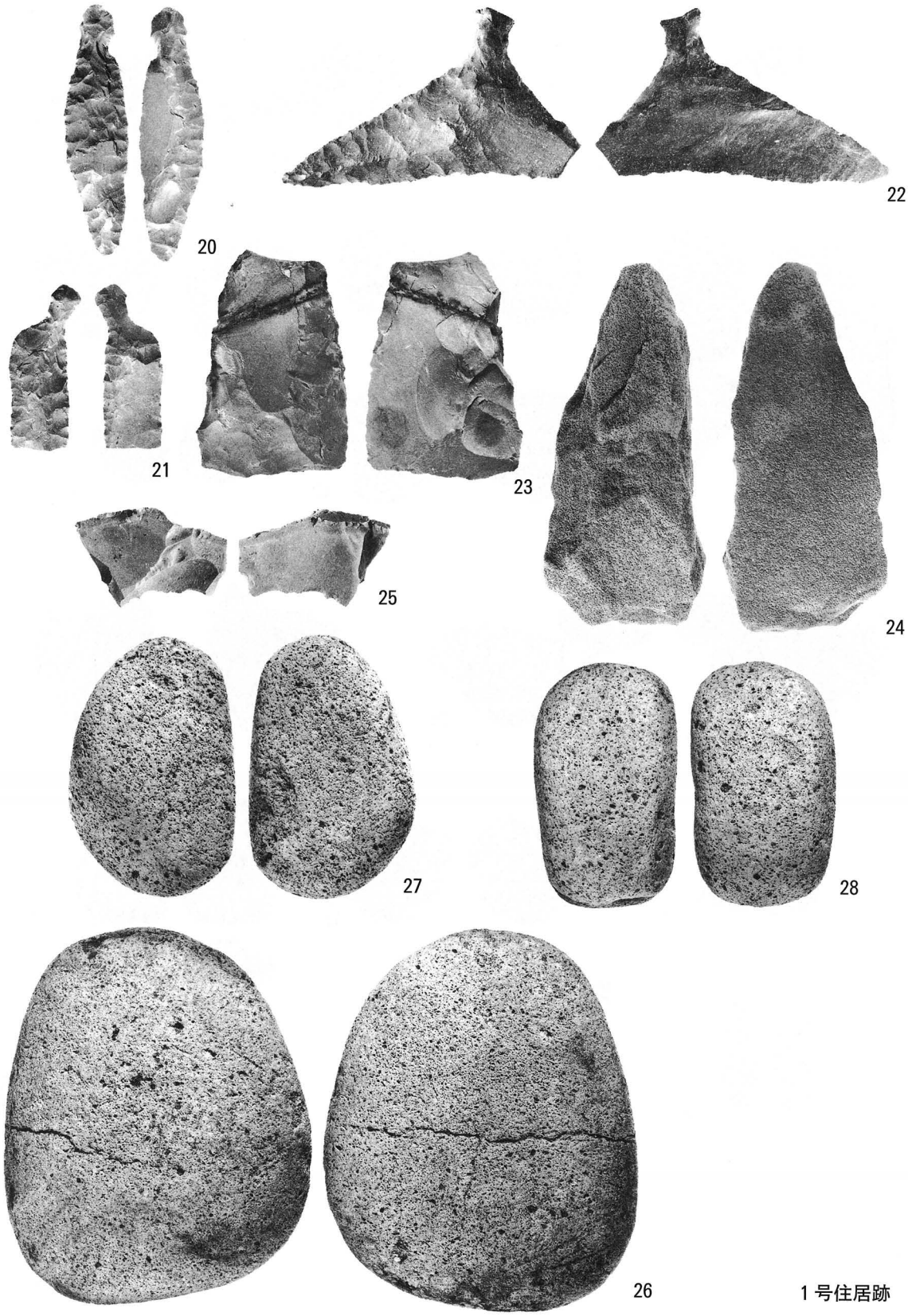


断面

写真図版16　溝跡



写真図版17　遺構内出土遺物①



1号住居跡

写真図版18　遺構内出土遺物②

写真図版19　遺構内出土遺物③

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

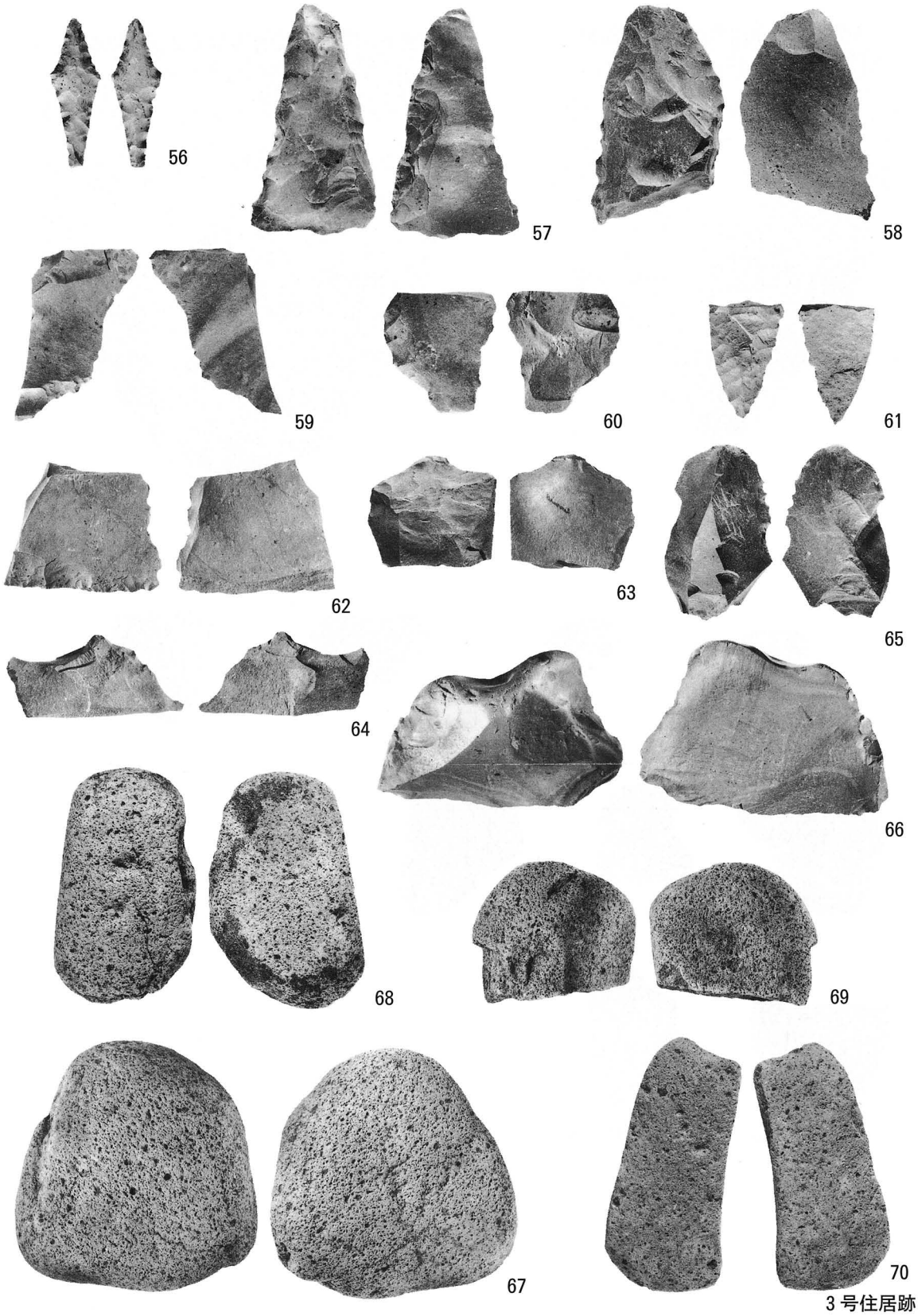
53

54

55

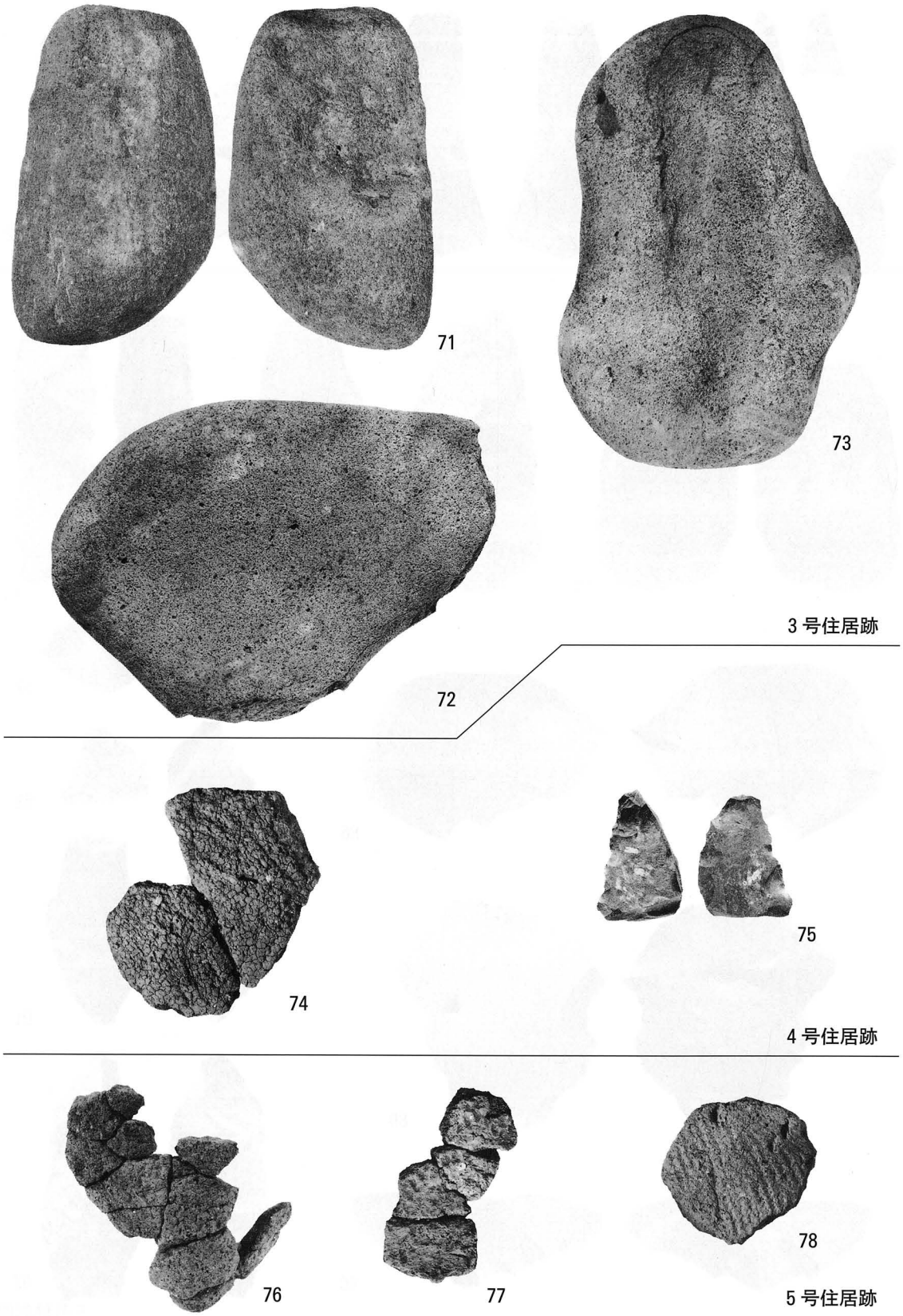
3号住居跡

写真図版20　遺構内出土遺物④

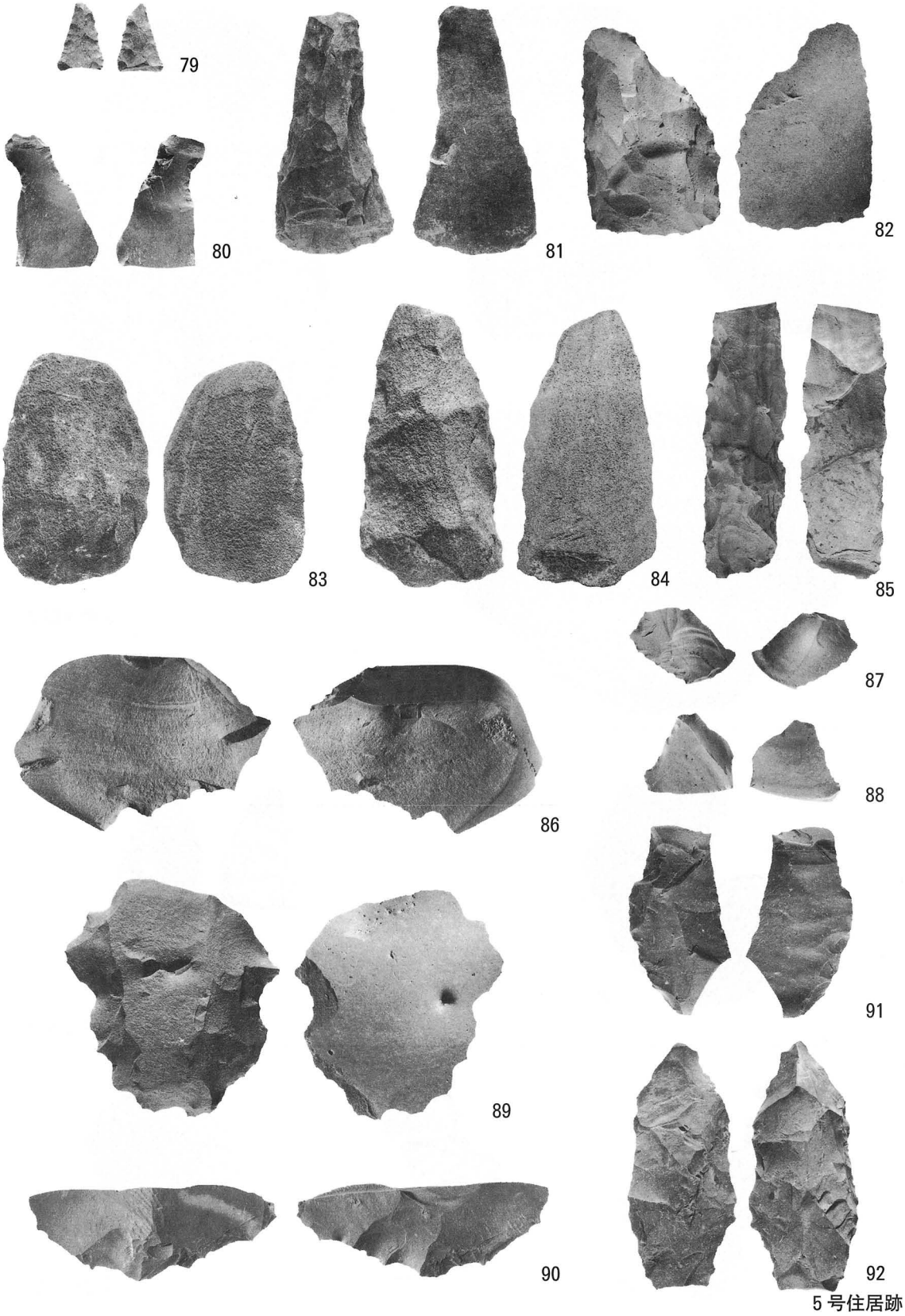


3 号住居跡

写真図版21　遺構内出土遺物⑤

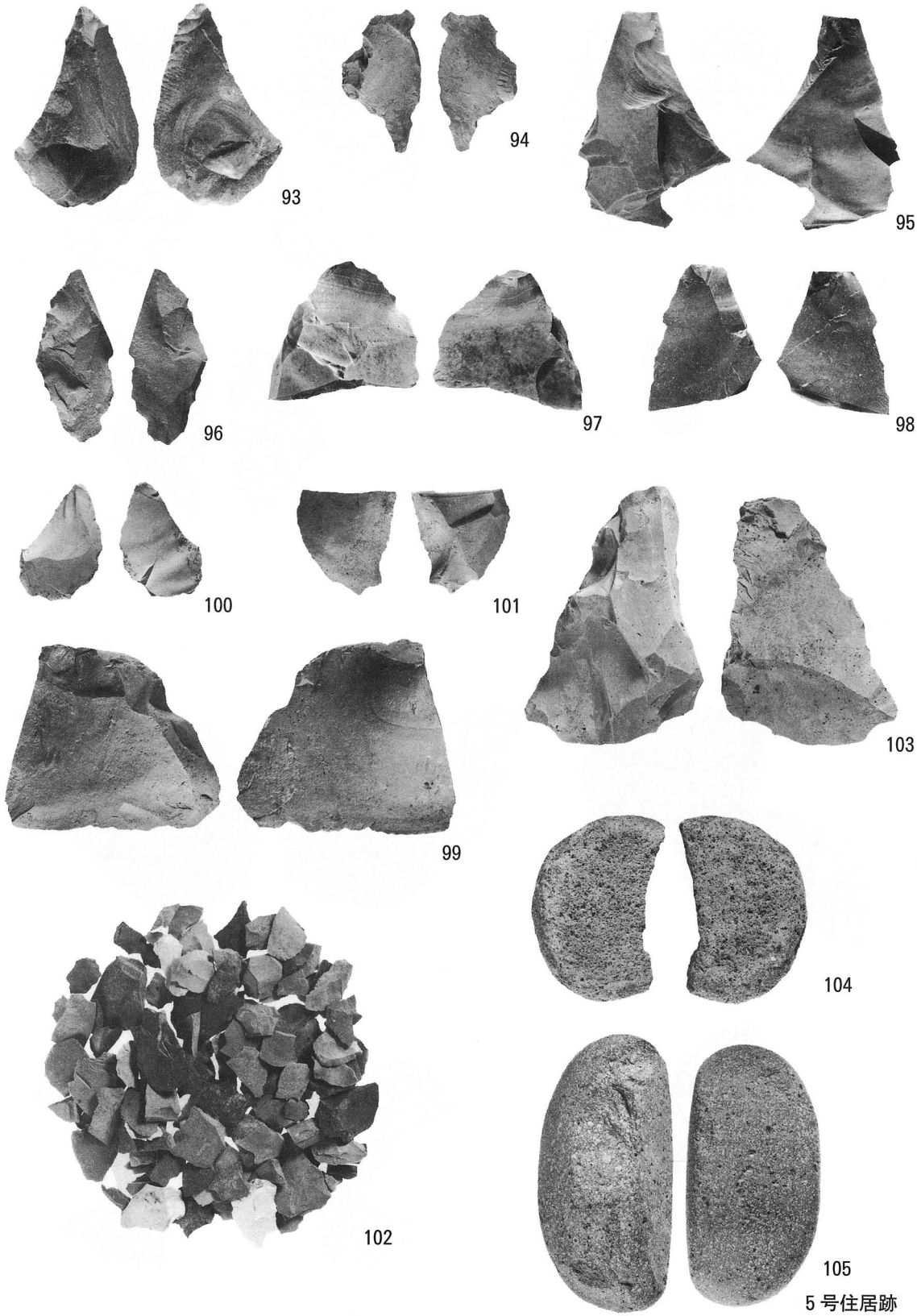


写真図版22　遺構内出土遺物⑥

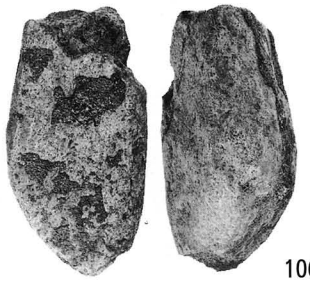


5号住居跡

写真図版23　遺構内出土遺物⑦



写真図版24　遺構内出土遺物⑧

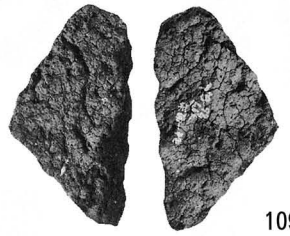


106

107

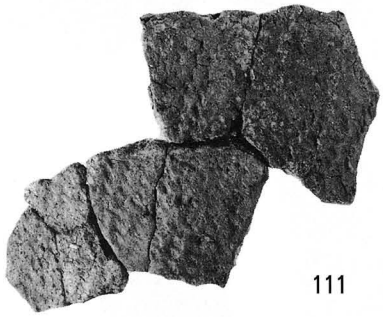
5 号住居跡

108

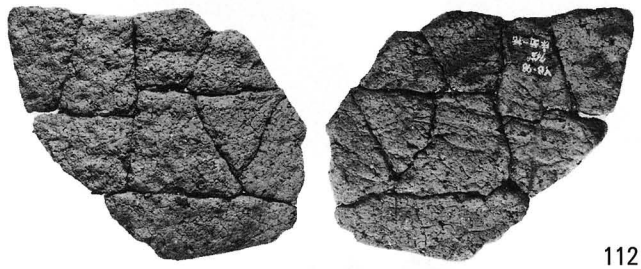


109

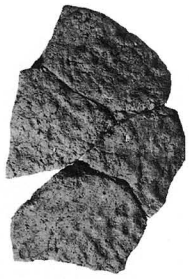
6 号住居跡



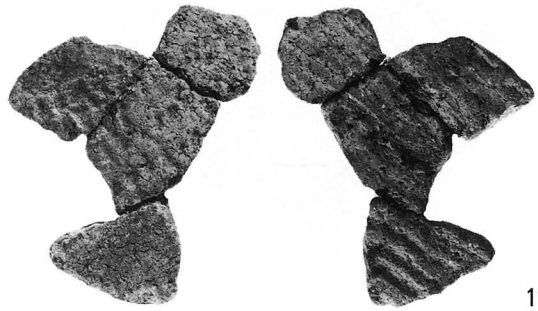
111



112



110



113

7 号住居跡

写真図版25　遺構内出土遺物⑨

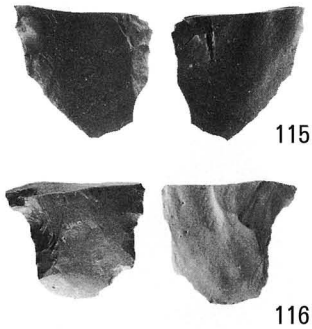
114

1 号土坑

119

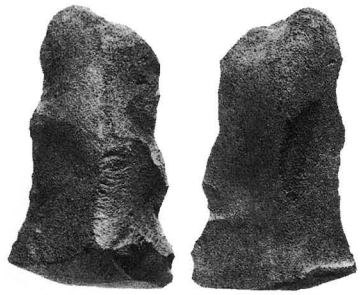
120

5 号土坑



115

116



117

118

3 号土坑

121

122

123

124

128

125

126

127

7 号土坑

129

130

131

11号土坑

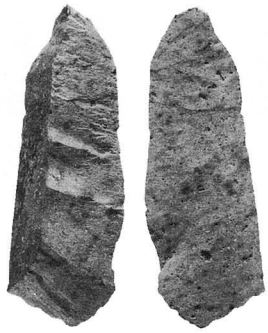
132

13号土坑

133

14号土坑

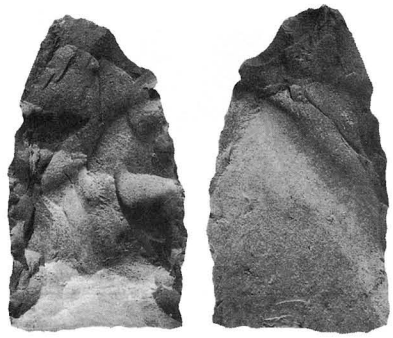
写真図版26　遺構内出土遺物⑩



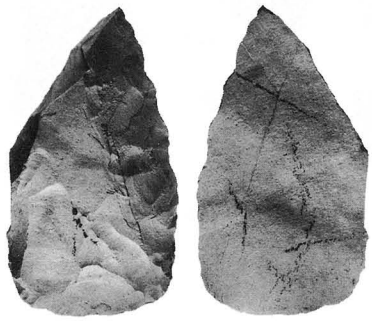
134

135

1号陥し穴

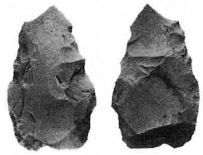


136



137

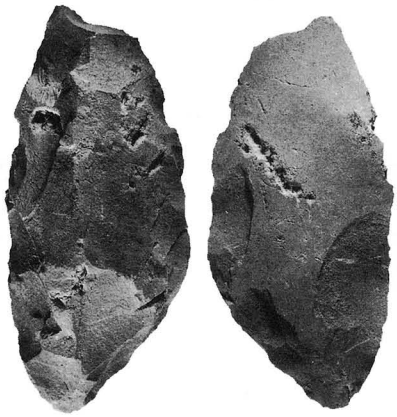
2号陥し穴



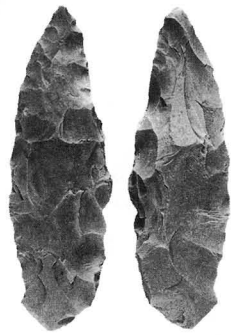
138

139

141



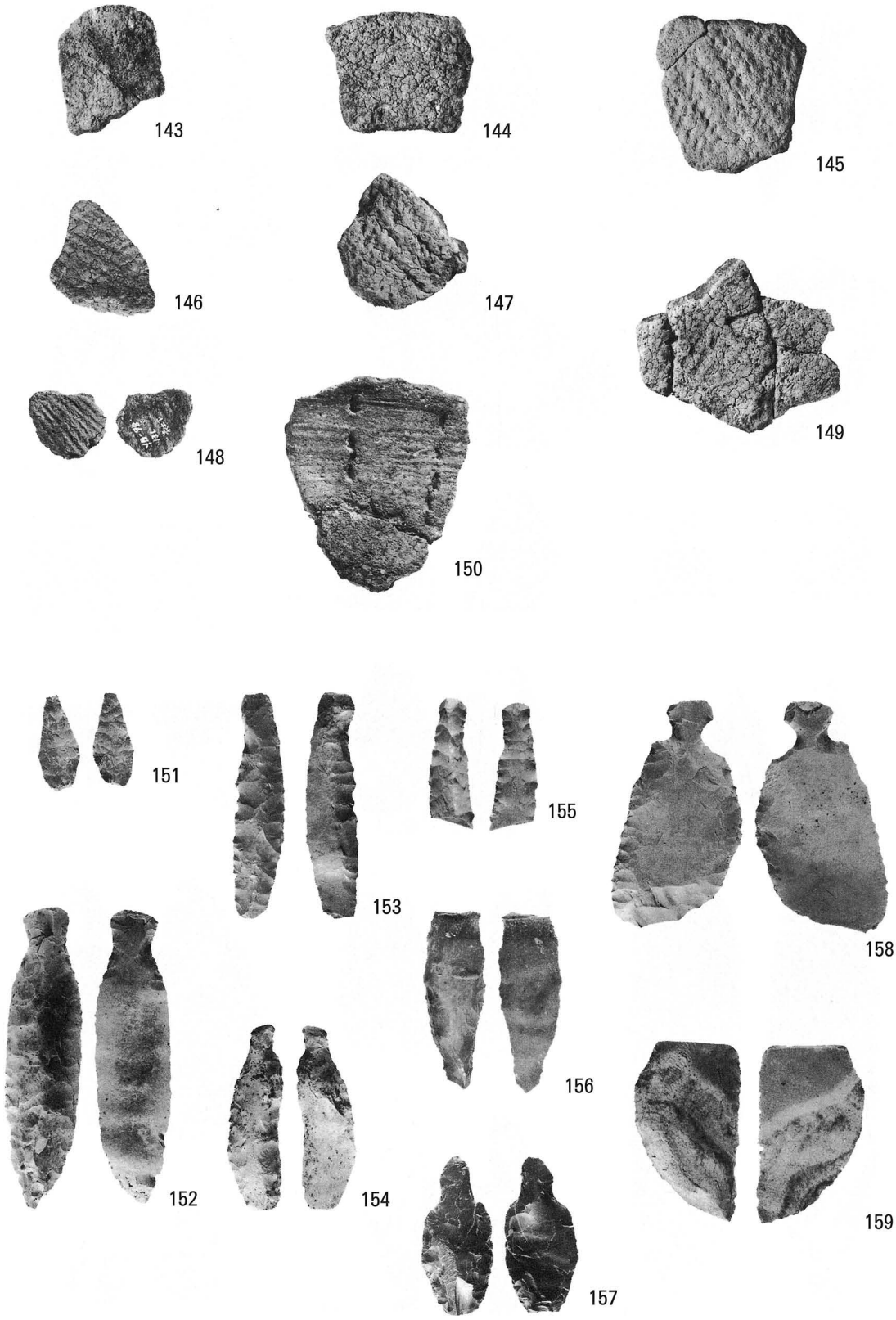
140



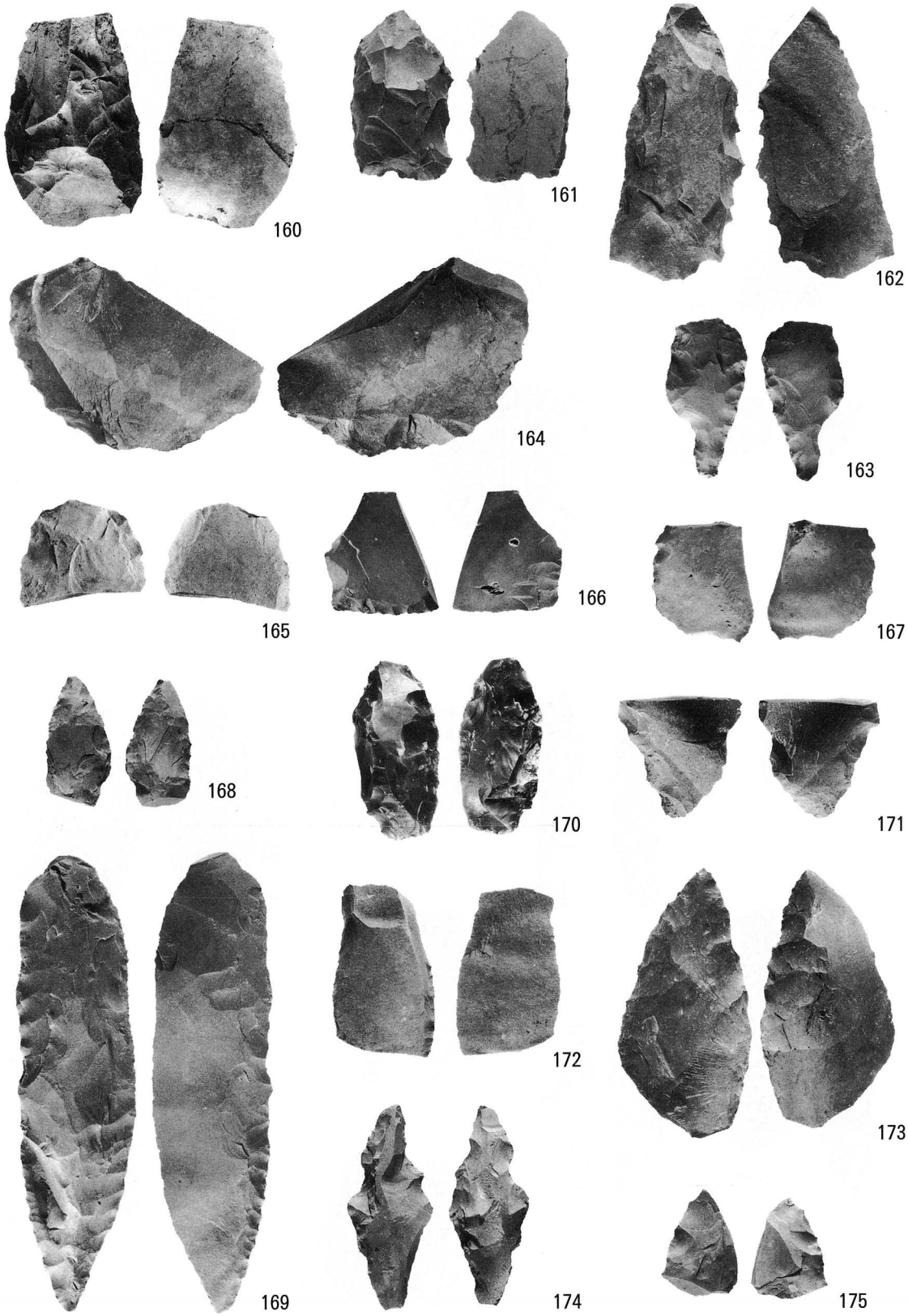
142

3号陥し穴

写真図版27　遺構内出土遺物⑪

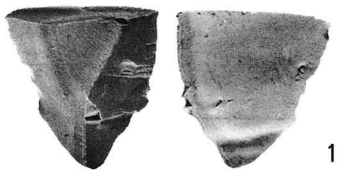


写真図版28　遺構外出土遺物①

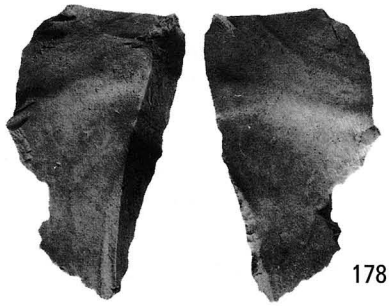


写真図版29　遺構外出土遺物②

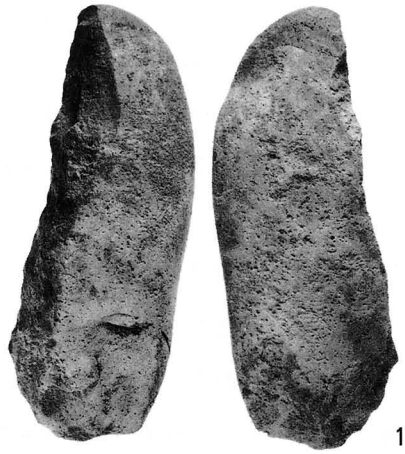
176



177



178



179

写真図版30　遺構外出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	やすみばいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	休場遺跡発掘調査報告書
副書名	担い手育成基盤整備事業徳岡地区関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第３３１集
編著者名	中村直美　平めぐみ　高橋與右衛門
編集機関	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　TEL 019－638－9001
発行年月日	西暦　2000年2月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 住　所	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やすみばいせき 休場遺跡	いわてけんいさわぐん 岩手県胆沢郡 いさわちょうおやまあざ 胆沢町小山字 そとうら　ほか 外浦70他	03383	NE45-1144	39度 04分 05秒	141度 04分 39秒	19980901～ 19981106	3,200㎡	圃場整備 事業に伴う 事前調査

所収遺構名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
休場遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡	7棟	縄文土器	1.5箱	
			土坑	14基	石器	573点	
			陥し穴	11基	土製品	1点	
			陥し穴状遺構	2基			
			焼土遺構	3基			
			溝	1条			
			柱穴状小ピット	10基			

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所　長　佐藤　基
副所長　伊藤直司

〔管理課〕

管理課長　川浪清徳
主　任　立花多加志
主　事　日影睦夫

〔調査第一課〕

課　長　小野田哲憲
課長補佐　佐々木清文
主任文化財専門調査員　酒井宗孝
〃　小山内透
文化財専門調査員　中田迪
〃　吉田充
〃　鎌田勉
〃　小笠原健一郎
〃　鳥居達人
〃　濱田宏
〃　佐々木進悦
〃　安藤由紀夫
〃　木戸口俊子
〃　小野寺正之
〃　阿部勝則
〃　千葉正彦
〃　羽柴直人
〃　高木晃
〃　佐藤淳一
〃　菅原靖男
〃　半澤武彦
〃　朝倉雄大
〃　菊池貴広
〃　村上拓
〃　本多準一郎
〃　中村直美
〃　丸山浩治
期限付専門職員　佐藤綾子
〃　平めぐみ
〃　藤原賢徳
〃　江藤敦
〃　小林弘卓
〃　小原広幸
嘱託　藤島恵子
〃　新田トヨ
〃　佐々木光重

〔調査第二課〕

課　長　高橋與右衛門
課長補佐　中川重紀
主任文化財専門調査員　高橋義介
文化財専門調査員　古舘貞身
〃　阿部眞澄
〃　松尾芳幸
〃　小原眞一
〃　工藤徹
〃　前田稔
〃　金子佐知子
〃　岩渕計
〃　早坂悟
〃　佐々木務
〃　晴山雅光
〃　星雅之
〃　佐々木琢
〃　杉沢昭太郎
〃　溜浩二郎
〃　北村忠昭
〃　金子昭彦
期限付専門職員　鈴木聡
〃　平澤里香
〃　布谷義彦
〃　山口俊規
〃　熊谷佳恵
〃　吉田里和
〃　北田勲
〃　吉川徹

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第331集

休場遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業徳岡地区関連遺跡発掘調査

印刷　平成12年2月20日
発行　平成12年2月28日

発行　財団法人　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　盛岡市下飯岡11-185
電話　(019)638-9001・9002
FAX　(019)638-8563
印刷　株式会社 五六堂印刷
〒020-0021　盛岡市中央通3-16-15
電話　(019)654-5610
FAX　(019)651-2167

©（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000